

2022 年 8 月

食料安全保障月報 (第 14 号)



令和 4 年 8 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 8 月食料安全保障月報（第 14 号）

目 次

概要編

I	2022 年 8 月の主な動き	1
II	2022 年 8 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報 ウクライナの穀物輸出再開と EU の穀物生産・貿易動向 （資料）	5
1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（A L I C 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は冬小麦が減少するものの春小麦が回復し前年度を上回る	
	＜カナダ＞ 生産量は回復し、前年度比 59.4% 増、過去 5 年平均比 13.3% 増	
	＜豪州＞ 生産量は前月から 3.0 百万トン上方修正され 33.0 百万トンの見込み	
	＜EU27+英国＞ EU27 の生産量は前月予測から 1.2 百万トン下方修正	
	＜中国＞ 冬小麦は収穫が終了。品質は良好。	
	＜ロシア＞ 生産量は前月から 6.5 百万トン上方修正で史上最高の 88.0 百万トン	
	＜ウクライナ＞ 4 者合意に基づく輸出再開で輸出量は 1.0 百万トン上方修正	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ 4 者合意に基づく輸出再開で輸出量は 3.5 百万トンの上方修正	
3	コメ	15
	＜米国＞ 中・短粒種は 1985/86 年度以来の歴史的低水準の生産量に	
	＜インド＞ 作付面積減少により 2015/16 年以来初の減産に	
	＜中国＞ 2022 年上半期の輸入量はインド産碎米を中心に対前年同期比 4 割増	
	＜タイ＞ 2022 年上半期の輸出量が対前年同期比 6 割増	
	＜ベトナム＞ 2021/22 年度の冬春作が低温等により減産	

II 油糧種子	
大豆	21
＜米国＞ 単収の上方修正により、生産量は史上最高、輸出減の見通し	
＜ブラジル＞ 2021/22 年度は高温・乾燥の影響で減産、輸出減の見通し	
＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続	
＜中国＞ 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し	
＜カナダ＞ 収穫面積・単収の減少により減産も、輸出量は増加見通し	
（参考1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）	27
（参考2）単位換算表	27

特別分析トピック

「我が国と世界の油脂をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：ウクライナの冬小麦の収穫（8月1日撮影）

肥料や農薬の不足で単収は前年より伸びなかったとのこと。

(概要編)

I 2022 年 8 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は収穫が終盤となり、その他の作物は成熟期を迎え、南米では今後作付けが開始される。

品目別にみると、8 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度よりわずかに増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、国際相場は 3 月には過去最高を更新した。今後も注視が必要。

また、とうもろこしについては、世界の生産量が前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：7 月）については、穀物（166→147）、植物油（212→171）、乳製品（150→146）等が下落した影響により、6 月より下落（154→141）したが、引き続き高い水準を維持（参考：前年 7 月の値は 124）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録。それ以降は下落していたが本年 2 月から上昇に転じ、直近では再び下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、8 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の8月11日報告によると、冬小麦は収穫終盤を迎え、1,540万トンの収穫となったとみられる。

とうもろこし等の夏作物は現在、開花期から成熟期を迎えているとみられる。

7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、8月には、オデーサ港等3港からの輸出が再開された。8月27日までに穀物・油糧種子が104万トン輸出された。

米国農務省（USDA）によれば、ウクライナの2022/23年度の小麦生産量は、ロシアによる侵攻の影響を受け、対前年度比41%減の1,950万トンの見通しであるが、一方、上記4者合意を受け、輸出量は前月から上方修正され、前年度対比42%減の1,100万トンの見通し。

一方、とうもろこし生産量については、7月の降雨により7月見通しから上方修正され、対前年度比29%減の3,000万トン。輸出量は小麦と同様に上方修正され、前年度対比49%減の1,250万トンの見通し。

1 ロシアの小麦生産量は史上最高の8,800万トン

ロシアの小麦は7月以降、冬小麦が収穫期を迎えている。USDAによれば、前年度と比較して冬枯れ被害が少なかったため、史上最高の8,800万トンの見通し。

穀物の輸出税については、7月に入り米ドル建てからルーブル建てに変更され、実質上ドルベースでは引き下げられたと見られる。ロシアのラブロフ外相は、7月下旬、ウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開合意に合わせ、アフリカ諸国を訪問し、エジプト向け小麦輸出を確約するなど、ロシア産小麦の輸出拡大に注力している。USDAによれば、小麦輸出量は史上最高の4,200万トンの見通し。

国連グテーレス事務総長は、ウクライナとロシアからの食料と肥料の輸出が、商品相場を落ち着かせ、消費者価格を引き下げると発言している。

2 米国のとうもろこし生産見通しは下方修正されたが、大豆生産見通しは上方修正

米国中西部における7月後半から8月前半の高温乾燥により、受粉期を迎えたとうもろこしが影響を受けた可能性もある。USDAによれば、とうもろこしの生産量は、単収の引き下げにより前月から370万トン下方修正され、3億6,470万トンの見通し。輸出量も60万トン下方修正され、6,030万トンの見通し。

一方、大豆については、収穫面積は下方修正も単収の引き上げにより、生産量は、前月から70万トン上方修正され、史上最高の1億2,330万トンの見通し。輸出量も50万トン上方修正され、5,870万トンの見通し。

3 中国南部の高温乾燥で穀物生産への影響が懸念

重慶市・江西省など中国南部では、8月に入り、1961年の観測開始以来最高の高温・乾燥が継続し、稲作（インディカ）などの生産に影響があったとみられる。中国政府は24日の常務会議で100億元（日本円でおおよそ2000億円）の追加支援を決定した。

その後、8月28日以降、重慶市等で豪雨となったが注視が必要である。

なお、吉林省や遼寧省などの東北部は降雨に恵まれ、とうもろこし、大豆、ジャポニカ米は順調に生育しているとみられる。

4 インドのコメの生産量は降雨不足で前年度比1%減の見通し

6月～7月にかけて、インド北東部のコメの主産地でモンスーンの降雨量が不足し、USDAの8月見通しによれば、コメの生産量は、7月見通しから200万トン下方修正され、前年度より1%減少の1億2,850万トンの見通し。また、小麦の生産量についても、7月見通しから300トン下方修正され、1億300万トンの見通し。

小麦は、5月から輸出規制(輸入国の食料安全保障については配慮)を実施しているが、世界の貿易に占めるシェアは3%。一方、世界の貿易量の40%を占めるコメは、過去の豊作により在庫水準が高いため、今のところ輸出が継続されている。

(参考)ウクライナの黒海からの穀物輸出再開までの道のり

2月24日：ロシアがウクライナ侵攻。ウクライナ産穀物の黒海からの輸出が事実上停止となる。

7月22日：イスタンブールで、国連(グテーレス事務総長)、ウクライナ(インフラ省)、ロシア(国防省)、トルコ(国防省)がウクライナ産穀物の輸出再開に関する協定に署名。(ウクライナ、トルコ、国連の協定と全く同じ内容の協定をロシア、トルコ、国連が同時に締結)

＜協定の内容＞

- ・協定の有効期間は120日で、その後の延長が可能。
- ・オデーサ港、ユジニ港、チョルノモルシク港からの輸出が再開される。
- ・港湾における穀物の船積みには、ウクライナ、トルコ、国連の代表者が管理を行う。ロシアの代表者はウクライナの港での立ち合いは行わない。
- ・機雷が設置された海域の航行は、安全なルートの地図を渡されたウクライナの船の先導により行われる。
- ・穀物輸送船は、黒海からボスポラス海峡を通過する際にはイスタンブールの「共同調整センター」(4者の代表者が参加)が通過を監視する。輸送船がウクライナに帰る際に、兵器を輸送していないことを同センターが確認する。
- ・4者は、穀物輸送に関わる商船及び港を攻撃しないことを約束する。

7月23日：ウクライナ・インフラ省傘下のウクライナ海洋港湾管理局が、穀物輸出の再開に向けて、輸送船のキャラバンを編成するので申請を行うよう呼びかけを行った。

ウクライナのクブラコフ・インフラ相は、ロシア軍によるオデーサ港の攻撃が行われたが、穀物輸出再開に向けた作業は継続すると発表。

7月24日：ウクライナ国防省によれば、破壊されたのは港湾のポンプステーション(石油関連施設)であり、穀物保管施設に被害は出なかった。

国連のグテーレス事務総長は、オデーサ港の攻撃を無条件に非難するとの声明を発表。

8月1日：トウモロコシ2万6527トンを搭載した「ラゾニ」号(シエラレオネ船籍)が、オデーサ港を出港。穀物輸出が再開。

8月27日：共同調整センターが輸出再開以降の輸出状況をまとめており、8月27日現在、輸出量は104万トン(うち、とうもろこし66万トン、小麦18万トン、ひまわり加工品13万トン、その他7万トン)。目的地はトルコ、韓国、イラン、エジプト等。

II 2022 年 8 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、7 月末、290 ドル/トン台半ばで推移。8 月に入り、ウクライナの黒海経由での輸出再開から 280 ドル/トン前後に値を下げたものの、米国のプレーンズでの高温・乾燥懸念やドル安の進行等を受け、290 ドル/トン台後半に値を上げた。8 月中旬以降、ウクライナ産穀物の輸出進展から 260 ドル/トン台後半まで値を下げたものの、とうもろこし価格の上昇に追随し値を上げ、8 月下旬現在、280 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、7 月末、240 ドル/トン台前半で推移。8 月に入り、ウクライナの黒海経由での輸出再開等から 230 ドル/トン台前半に値を下げたものの、米国中西部の高温・乾燥懸念やドル安の進行等を受け、250 ドル/トン台前半に値を上げた。8 月中旬以降、米国中西部の降雨予報やウクライナ産輸出の増加の一方、EU の高温・乾燥による作柄悪化懸念から値が上下し、8 月下旬現在、240 ドル/トン台後半で推移。

コメは、7 月末、420 ドル/トン台半ばで推移。8 月に入り、タイ国内の堅調な需要に加え、中東及びアセアン諸国からの新規需要等から、一時 450 ドル/トン台前半に値を上げたものの、パーツ安により値を下げ、8 月下旬現在、440 ドル/トン台後半で推移。

大豆は、7 月末、600 ドル/トン前後で推移。8 月に入り、米国産大豆の作柄改善等から 570 ドル/トン台前半に値を下げたものの、米国中西部の高温・乾燥懸念やドル安の進行等を受け、620 ドル/トン台後半に値を上げた。8 月中旬以降、米国中西部の降雨予報や景気減速を示す中国の経済指標発表を受けた米国産大豆の輸出抑制懸念等から値を下げ、8 月下旬現在、560 ドル/トン前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 210 万トン下方修正され 27.6 億トン。消費量は、前月予測から 300 万トン上方修正され 27.8 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 27.9%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で上方修正され、27.8 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで上方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は 8 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.5 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、19.2%となる見込み。

(注：数値は 8 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報: ウクライナの穀物輸出再開とEUの穀物生産・貿易動向

ウクライナのゼレンスキー大統領は、8月5日のスピーチで穀物の黒海からの輸出再開に関し、アジア・アフリカ諸国向けの輸出に加え、熱波の影響を受けたEU向けにも輸出が行われると発言した。国連、ロシア、トルコとの4者合意を受け再開されたウクライナの輸出動向と、高温乾燥の影響を受けて、隣接するウクライナ等からのとうもろこしの輸入拡大が予想されるEUの動向と世界の穀物貿易への影響についてまとめた。

注 文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、ウクライナ的小麦は2022年7月から2023年6月。

国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 ウクライナの生産・輸出動向

(1) 生産・輸出動向

米国農務省(USDA)の2022年8月の需給見通しによれば、ウクライナの2022/23年度の小麦については、冬小麦の収穫がほぼ終了し、生産量は、ロシアの侵攻の影響を受け、史上最高であった前年度と比べて41%減の1,950万トンで前月予測から変わらず。一方、とうもろこしについては、主要産地の北部・中部で生育期の7月の降雨に恵まれ、前月から500万トン上方修正され3,000万トンの見通し。

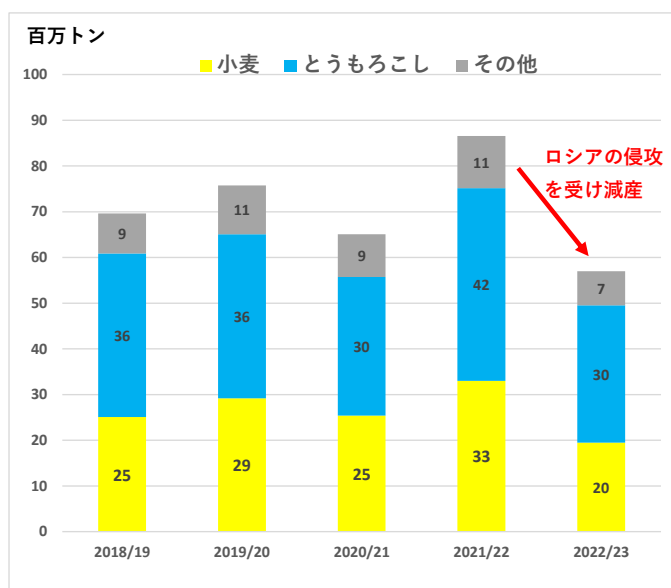
輸出については、7月22日、イスタンブールにて、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物のオデーサ港を含む3港からの輸出再開に合意した。これを受け、小麦は、前月予測より100万トン上方修正され1,100万トン、とうもろこしも350万トン上方修正され1,250万トンの見通し。いずれも前年度を大きく下回る。

(2) 今後の見通しと国際相場への影響

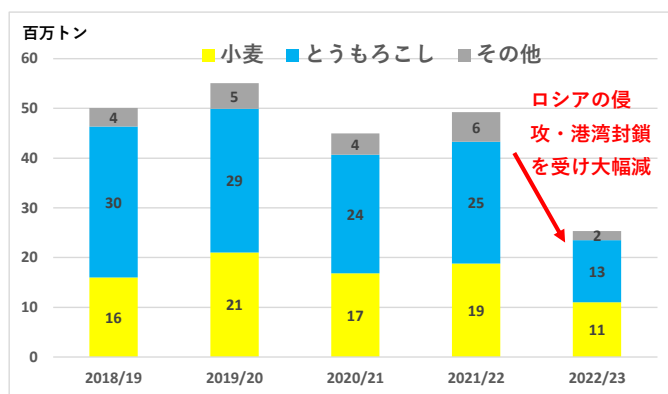
4者合意の翌日の7月23日にはロシアからオデーサ港への攻撃があり、輸出再開が危ぶまれたが、8月1日以降、オデーサ港などからの輸出が順次再開された。イスタンブールの共同調整センターによる確認を経て、8月8日には、最初の船が目的地のトルコに到着し、8月27日までにトルコや韓国、イラン等向け計104万トンの穀物・油糧種子が輸出された。

シカゴの小麦相場は、2月24日のロシアによる侵攻等を背景に大きく上昇し、3月7日には史上最高値(14.25ドル/ブッシェル)を更新したが、その後下落し、今般の4者合意を受け、8月下旬にはロシアの侵攻前の水準の7ドル台後半(期近物)まで下落している。

図1 ウクライナの穀物の生産・輸出見通しの推移
(1) 生産量



(2) 輸出量



出典: 米国農務省 「PS&D」(2022.8)

2 EUの生産と貿易動向

(1) 天候状況

EU 域内では 7 月に入り、各地で 40 度を超える気温を記録するなど高温・乾燥となった。

フランスでは、ボルヌ首相が、「フランス史上、もっとも過酷な干ばつに見舞われている」と発表した。ほぼ全土で、水使用制限が課されており、農業用水も使用を制限されている。フランス気象庁によると、7 月は過去 60 年の間で、最も降水量が少なく乾燥していた。

イタリア北部でも 70 年ぶりの干ばつとなっている。ポー川の水位が低下し、アドリア海からの逆流が懸念されている。

ドイツでも、ライン川の水位が低下し舟運に影響が出るほどの乾燥となっている。

今回の歴史的な高温・乾燥により、特にとうもろこしなどの夏作物の生産への影響があったとみられる。8 月中旬には降雨があったものの、生育状況の改善には遅かったとみられる。

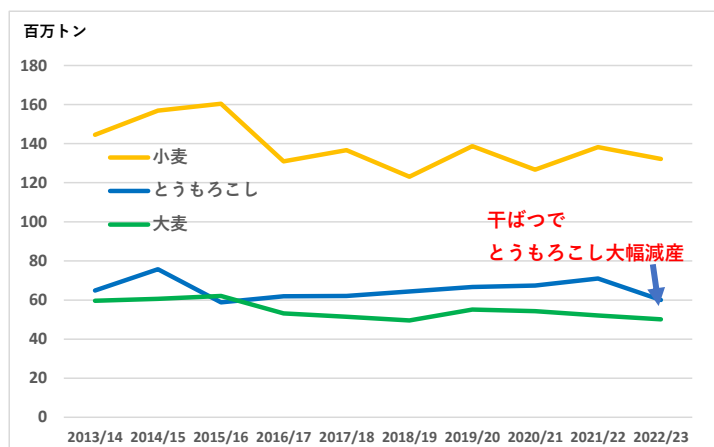
(2) 小麦

USDA によると、7 月の高温乾燥の影響を受け、生産量は 7 月見通しから 200 万トン下方修正され、前年度比 4 % 減の 1 億 3,210 万トンの見通し。収穫は 7 月時点でほぼ終了している。

国別では、ルーマニアで前年度 (1,100 万トン) から 210 万トン減産となり 890 万トン、スペインも前年度 (680 万トン) から 60 万トン減産となり 620 万トンとなっている。

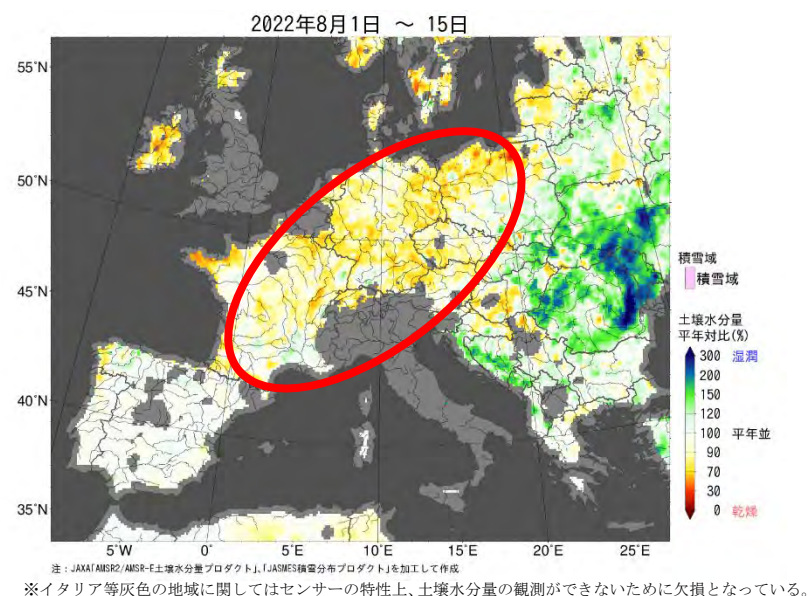
輸出量は、減産の影響を受け、前月から 200 万トン下方修正され 3,350 万トンの見通し。

図 2 EU の小麦、とうもろこし、大麦の生産量の推移



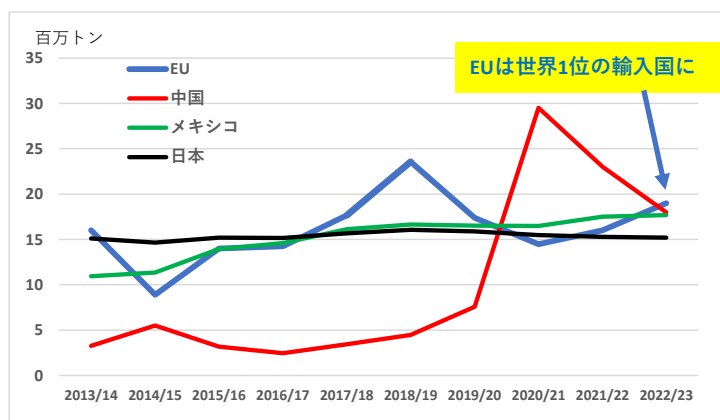
出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 8)

図 3 欧州の 8 月前半の土壌水分量の平年対比(JASMAI より)
ドイツからフランスにかけて土壌水分が少ない(赤丸)



「JASMAI」: https://jasmai.maff.go.jp/climate_map/?area_id=500

図 4 主要とうもろこし輸入国の輸入量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 8)

(3) とうもろこし

生産量は、7月の高温乾燥の影響を受け、7月見通しから800万トン下方修正され、前年度比15%減の6,000万トンとなる見通し。

7月時点で収穫が終盤または終了していた小麦と異なり、とうもろこしは、作柄決定に大きな影響を与える受粉期に高温・乾燥であったため、生産量への影響が大きいとみられる。国別ではフランス、ルーマニア、ハンガリー、イタリアでの影響があったとみられる。

EUは、従来からとうもろこしの不足分をウクライナ等から輸入していたが、今般の減産を受け、輸入量は、300万トン上方修正され1,900万トンとなり、前月まで世界1位の輸入国であった中国(1,800万トン)を上回り、メキシコ(1,770万トン)も抜き、世界最大の輸入国(地域)となる見通し。

写真 乾燥の影響を受けたフランスのとうもろこし圃場
降水量が少なく生育状況は悪い (7月30日撮影)



3 世界の穀物貿易への影響

(1) 小麦

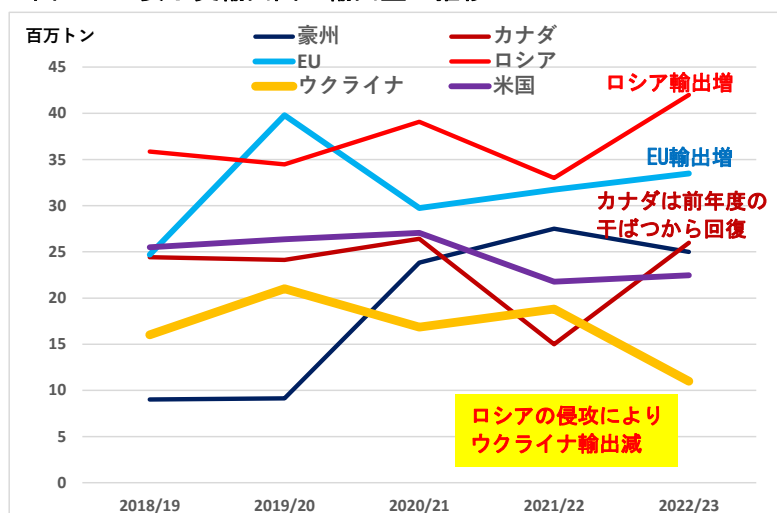
ウクライナの穀物輸出再開に向け、4者合意を受けて、ウクライナの穀物輸出が再開され、輸出見通しも上方修正されたが、前年度を大きく下回っている。

EU産は、今回の高温乾燥の影響を受け生産量・輸出量とも下方修正されたが、輸出量は前年度より増加が見込まれている。

ロシア産は、史上最高の豊作が見込まれており、対露経済制裁を行っていない中東、アフリカ諸国向けの輸出が拡大すると見られている。7月下旬のウクライナの穀物輸出再開の4者合意に合わせ、ロシア産穀物や肥料の輸出確保についても合意されたといわれている。ロシアのラブロフ外相は7月下旬に、エジプト、エチオピアなどアフリカ諸国を訪問し、穀物輸出拡大に努めている。

輸出が伸び悩んでいる米国では冬小麦の収穫が開始され、今後新穀の輸出が開始されるとみられる。前年度干ばつであったカナダ産も豊作が見込まれるとともに、豪州は3年連続豊作が見込まれている。なお、豪州産穀物輸出に関するサプライチェーンの状況については、ロシアの増産や米国、カナダの生産・輸出状況も見つつ、引き続き注視が必要である。

図5 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」(2022. 8)

(2) とうもろこし

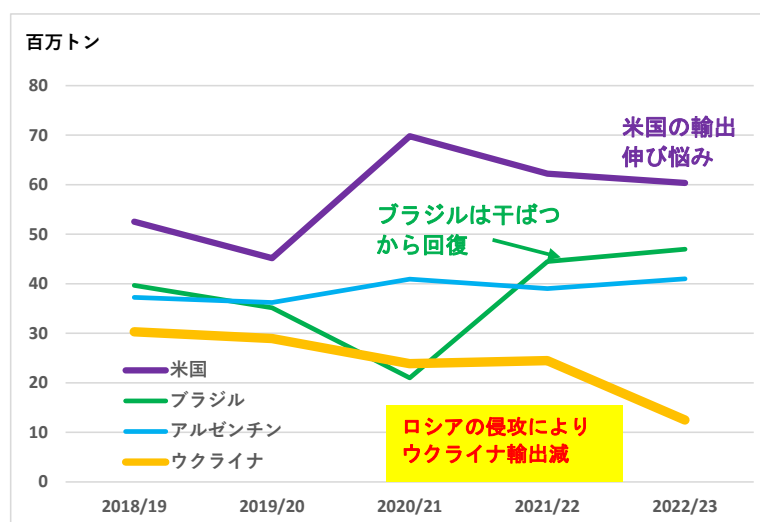
ウクライナに関しては、小麦同様、4者合意により輸出が再開されているが、輸出量は前年度を大きく下回っている。8月の輸出先をみると、トルコやイラン向けが多くを占めるものの、EUや英国など欧州向けも含まれている。

一方で、冬とうもろこしの収穫が終盤を迎え、これから輸出が開始される2021/22年度のブラジル産は史上最高の生産量（前年度比33%増の1億1,600万トン）となり、それに伴い輸出量も史上最高の4,450万トン

（前年度比2.1倍）となる見込み。なお、EUは、減産に伴いブラジル産の輸入を増加させる可能性があるとする業界関係者もいる。

なお、これまでウクライナ産を輸入していた中国は、当面は米国産を手当てしている模様である。ただし、米国産は、作付面積減に加え、受粉期の乾燥により単収が低下すると見られ、前年度より減産となると見込まれている。中国はすでにブラジル産の輸入について検疫問題に関し5月に合意していることから、遺伝子組換えの承認関係がクリアされればブラジル産の輸入も開始される可能性もある。今後、各国の需要がブラジル産に集中する可能性もあり、引き続き注視していく。

図6 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移

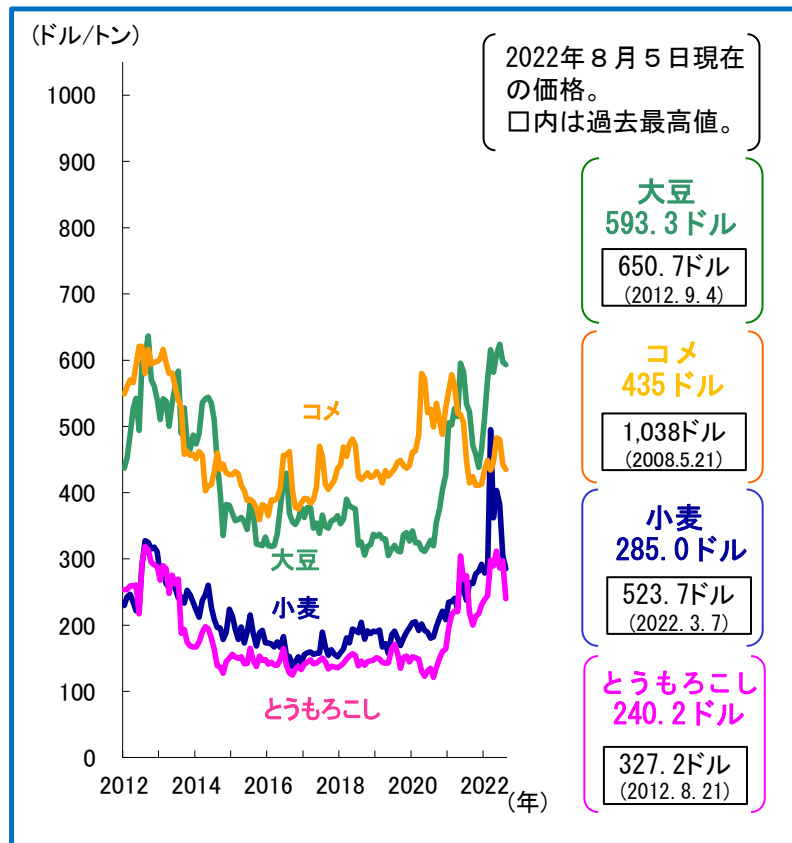
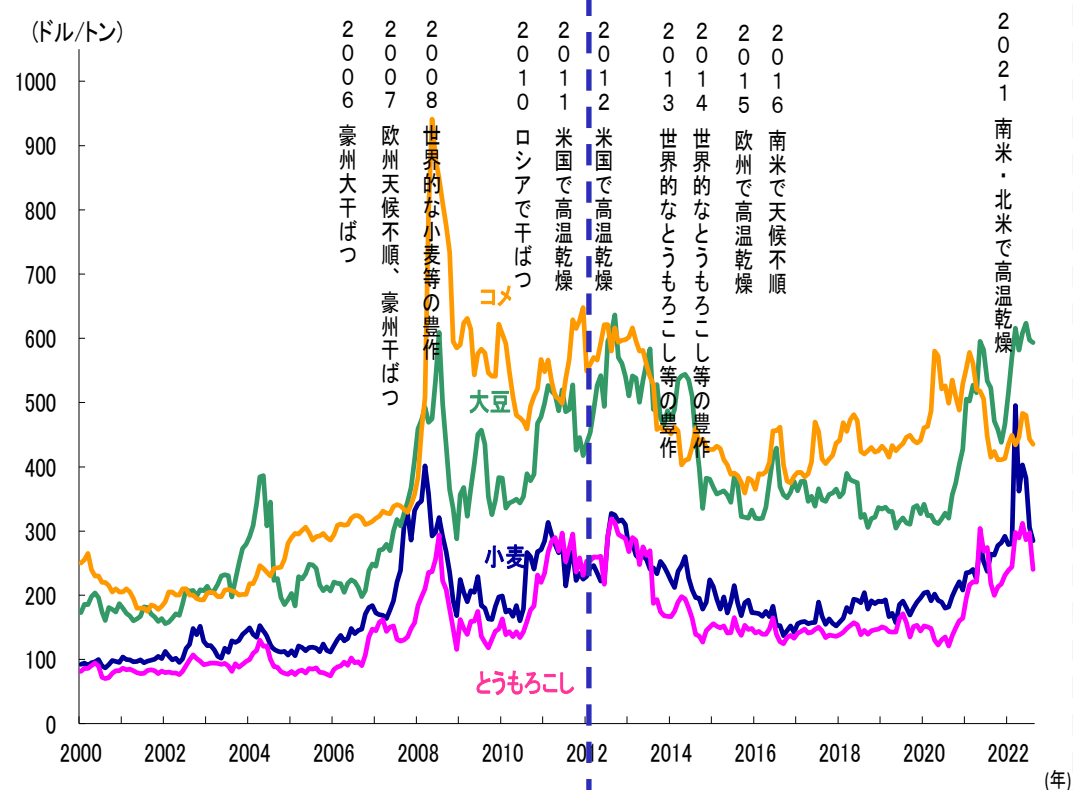


出典：米国農務省 「PS&D」(2022.8)

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



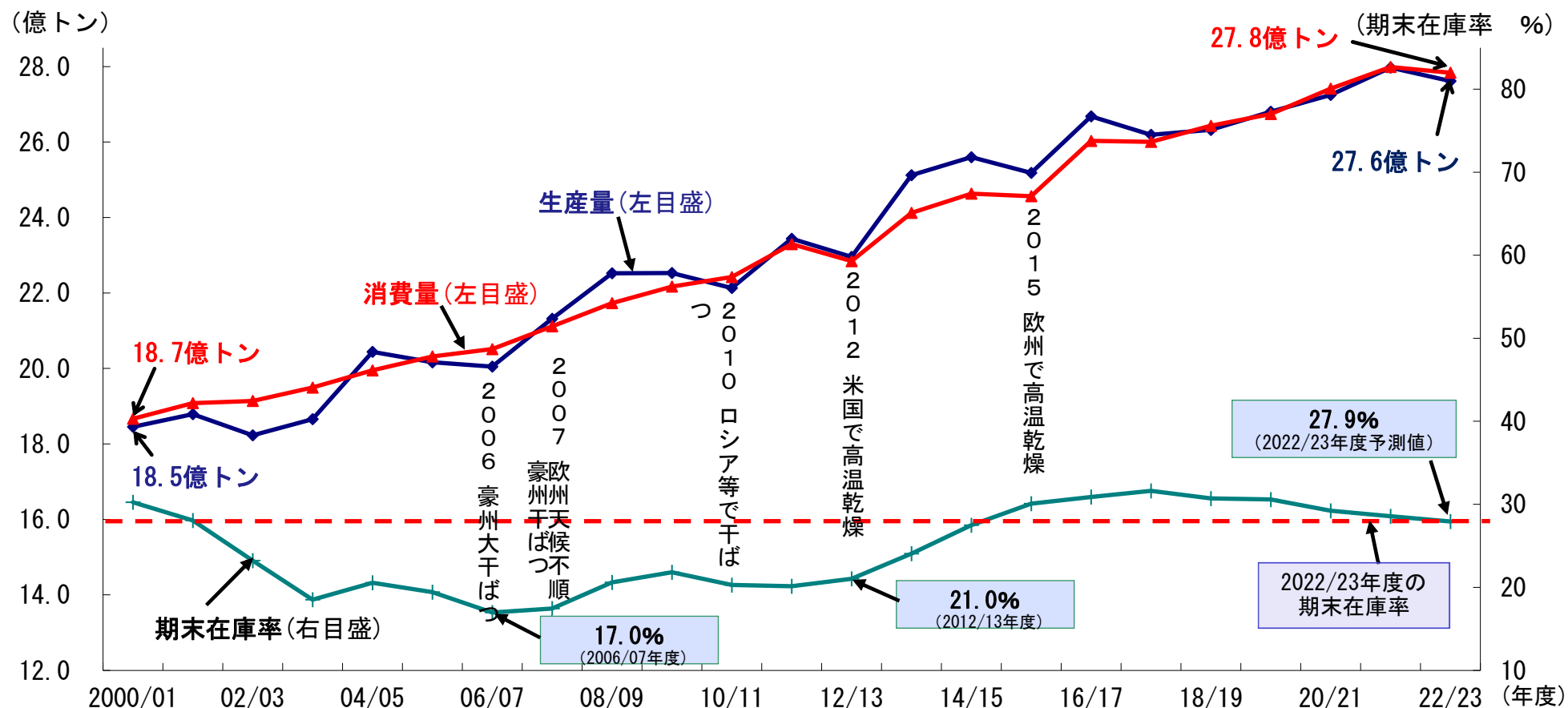
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、コメの2022年8月5日現在の価格は、8月3日の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.9%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

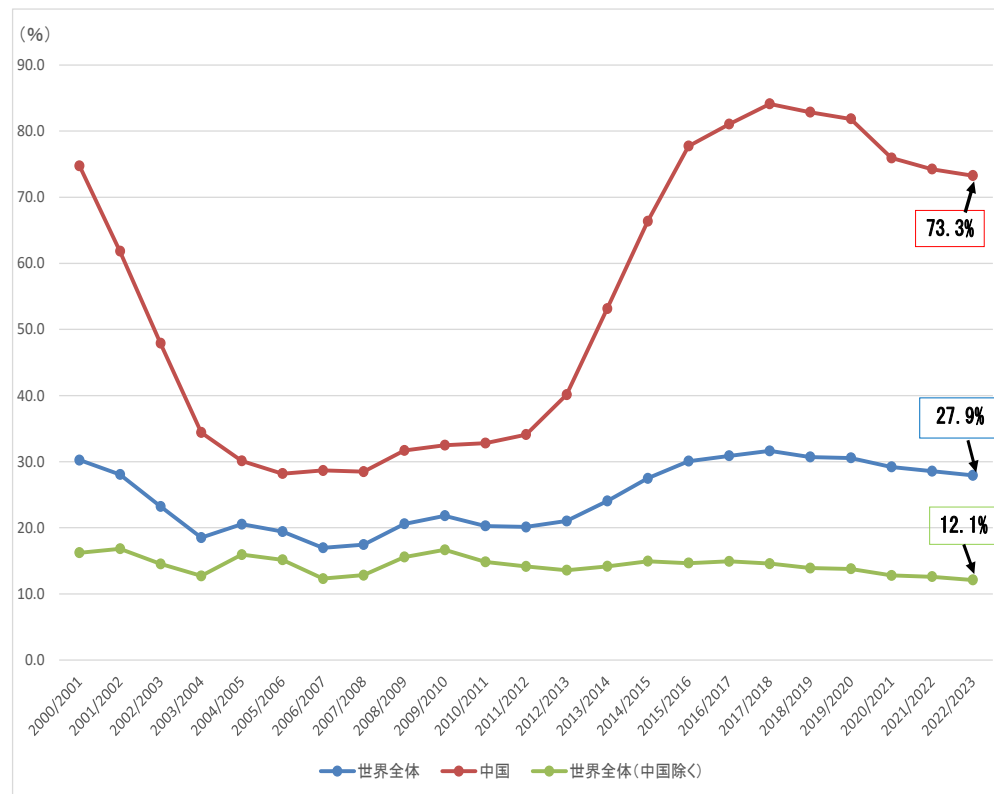


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(August 2022)、「PS&D」

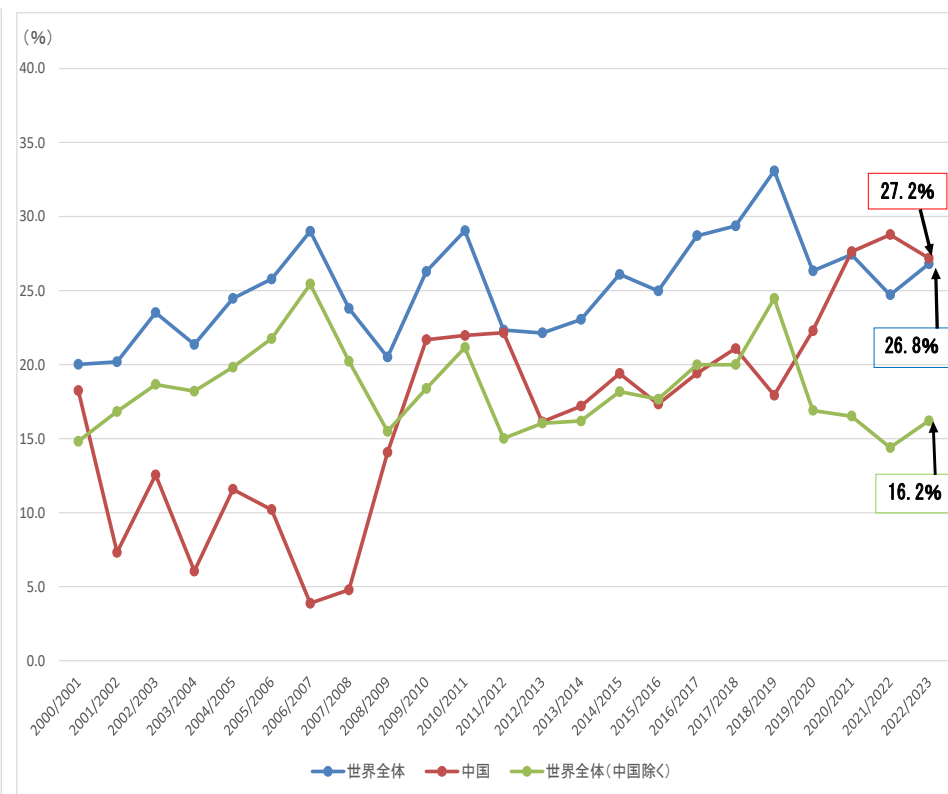
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(August 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

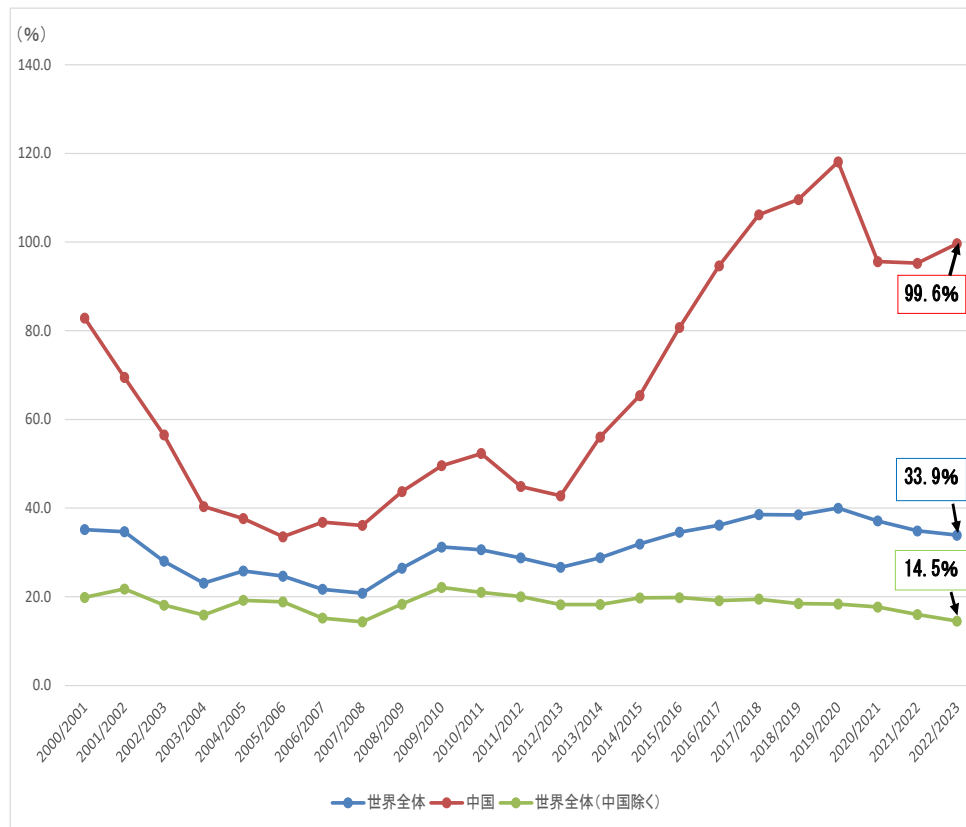
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

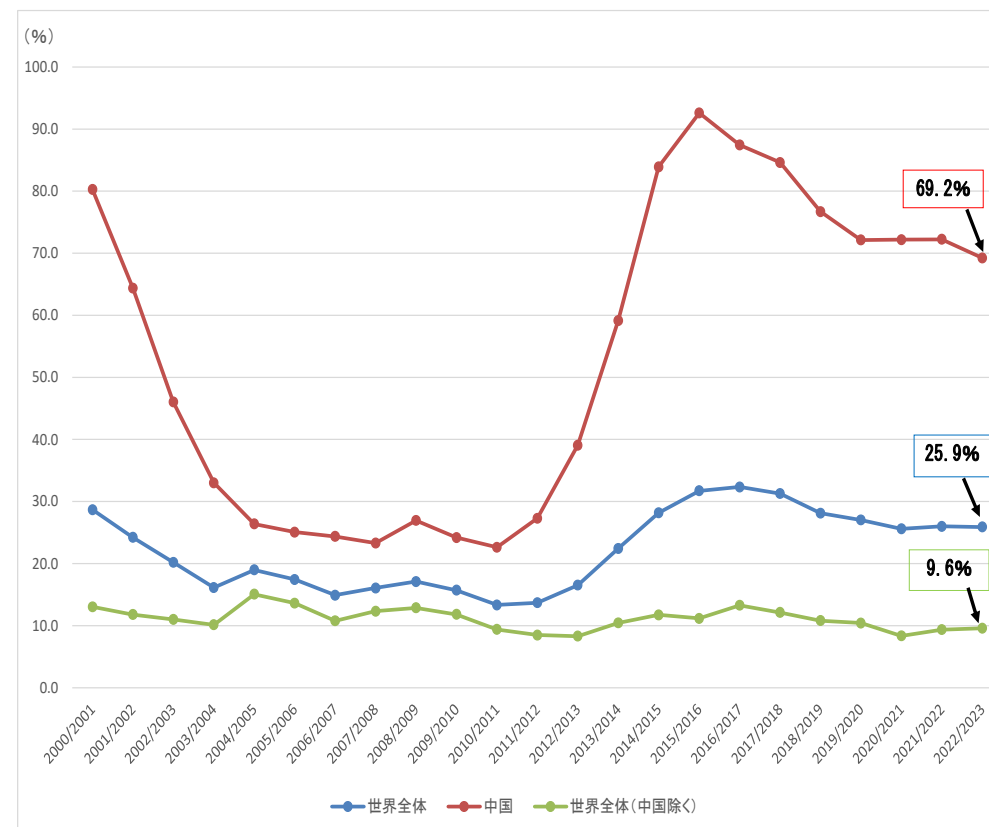
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(August 12, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

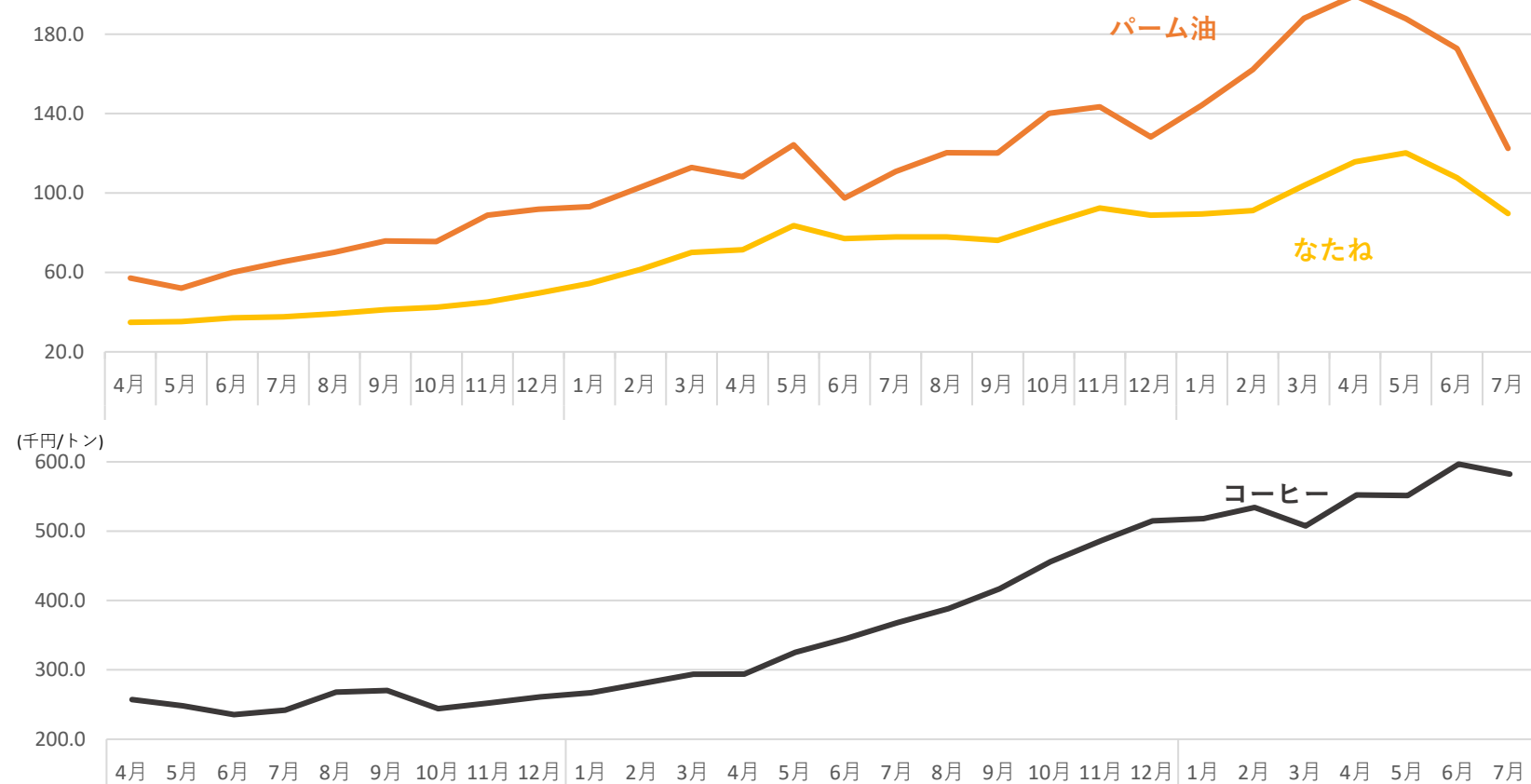
3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（５月２３日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

(千円/トン)



2022年8月20日現在
□内は2020年4月以降
の最高値。

パーム油
122.4千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
89.6千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

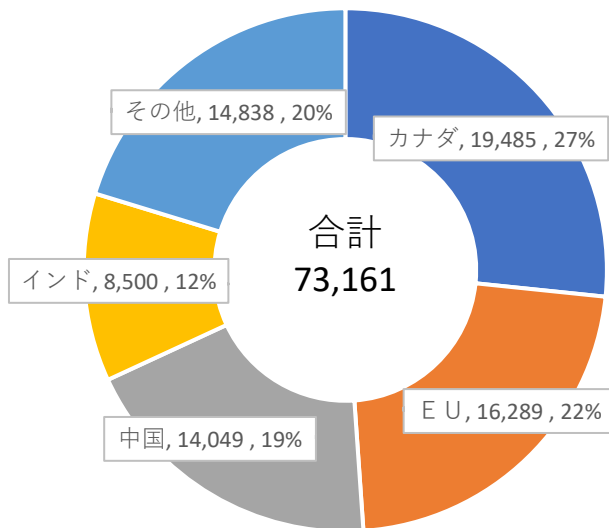
コーヒー
582.3千円/トン
596.8千円/トン
(2022.6)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

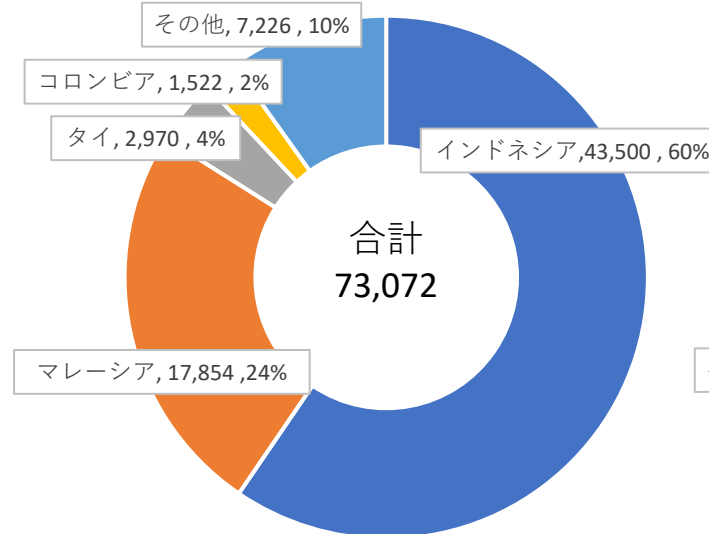
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



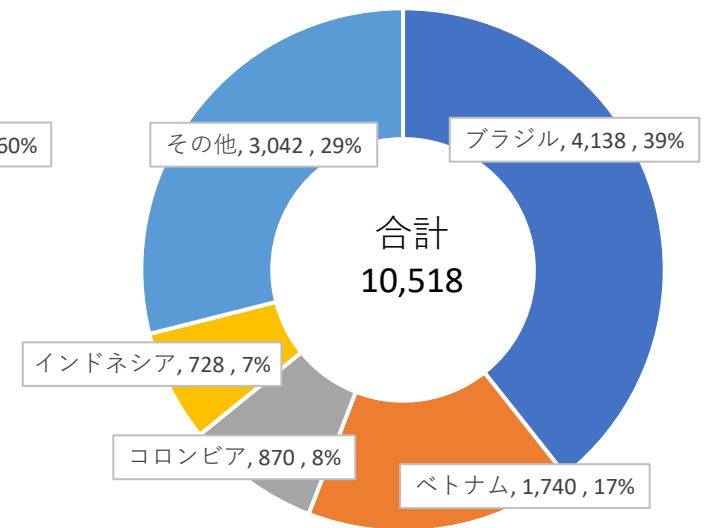
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	
コーヒ一	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年7月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.1～145.8（前年同月比で－0.9%～40.3%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年2月～令和4年7月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	2月	3月	4月	5月	6月	7月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	107.1	107.2	108.0	107.5	107.9	111.9	12.6%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.9	100.9	100.1	100.1	110.0	113.7	13.3%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.1	102.9	103.1	104.0	104.7	104.9	3.8%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	128.4	132.2	134.8	135.4	139.2	145.8	40.3%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	99.0	99.9	100.7	101.0	99.8	99.9	0.3%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	113.3	120.3	123.9	126.1	125.0	125.2	15.3%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	100.2	99.3	103.0	105.3	104.0	106.2	7.6%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.9	99.7	99.1	99.5	99.3	99.1	-0.9%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	101.5	101.9	102.4	102.6	103.2	103.8	3.7%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年2月～令和4年8月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4									
品目	平均	平均	平均	平均	平均	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	105.3	104.6	105.1	104.6	105.9	109.8	111.1	1.2%	13.9%	
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	98.4	99.0	99.0	99.0	110.0	111.2	111.2	0.0%	12.3%	
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	101.1	102.0	101.6	102.4	102.9	103.3	103.7	0.4%	2.6%	
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	122.9	126.4	129.6	130.8	132.7	139.1	148.3	6.6%	39.8%	
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	98.1	98.4	99.0	99.6	98.8	99.8	100.4	0.6%	1.4%	
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	105.9	112.1	117.2	117.2	118.3	117.2	118.3	0.9%	11.7%	
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	98.6	98.6	105.0	104.5	105.0	105.0	104.5	-0.5%	5.4%	
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.7	99.3	99.3	99.3	99.0	99.3	0.3%	-0.2%	

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年9月号（8月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）干ばつなどによる牛群の縮小により牛の供給はひっ迫予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002347.html

（EU）飼料費の高騰などから2022年1～5月の牛肉生産量は前年同期並み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002365.html

（豪州）牛肉輸出量、低迷も2カ月連続で前年同月比増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002366.html

（NZ）2021/22年度の牛肉生産量、輸出量ともに前年度を下回る見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002367.html

（アルゼンチン）2022年1～6月の牛肉輸出量、前年同期をわずかに上回って推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002368.html

◆豚肉

（メキシコ）2022年の豚肉生産量、前年比6.4%増の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002369.html

（ブラジル）2021年の豚肉輸出量は4年連続の増加、22年は減少傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002370.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）チーズの輸出好調、5月は過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002371.html

（EU）生乳取引価格は引き続き過去最高値を更新

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002372.html

（NZ）乳製品輸出量は減少も、世界的需要の高まりから輸出額は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002373.html

（中国）主要乳製品輸入量、全品目で減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002374.html

◆飼料穀物

（世界）2022/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度並みの見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002351.html

（世界）米国の下方修正も、南米での生産回復などで大豆の期末在庫は大幅増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002375.html

（米国）2022/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は10%台の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002376.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002377.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.8)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・インド、EU、中国等で下方修正も、ロシア、豪州等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み

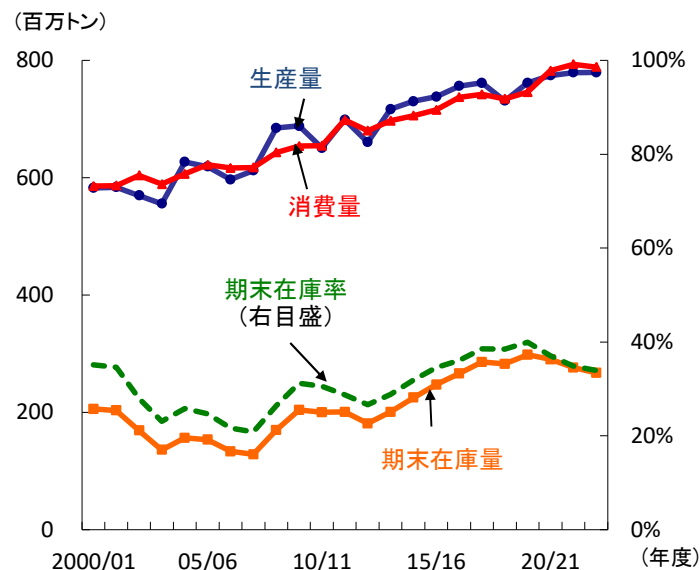
消費量 前年度比 前月比

- ・EU 等で下方修正も、ロシア、豪州等で上方修正され、前月から上方修正された。

輸出量 前年度比 前月比

- ・EU 等で下方修正も、ロシア、豪州、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



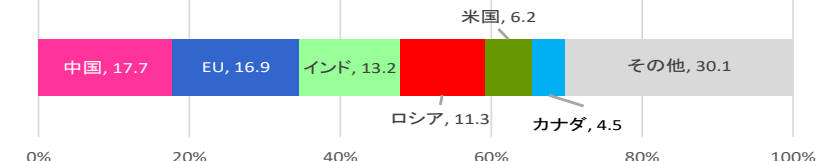
◎世界の小麦需給

(単位:百万トン)

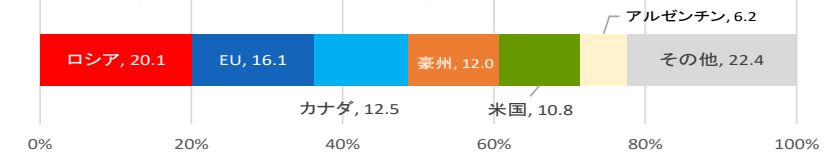
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.3	779.2	779.6	8.0	0.0
消 費 量	782.2	793.2	788.6	4.4	▲ 0.6
うち飼料用	158.0	159.9	152.8	1.5	▲ 4.5
輸 出 量	203.4	202.7	208.7	3.2	3.0
輸 入 量	195.4	197.8	203.9	1.1	3.1
期末在庫量	290.3	276.4	267.3	▲ 0.2	▲ 3.3
期末在庫率	37.1%	34.8%	33.9%	▲ 0.2	▲ 0.9

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 August 2022)

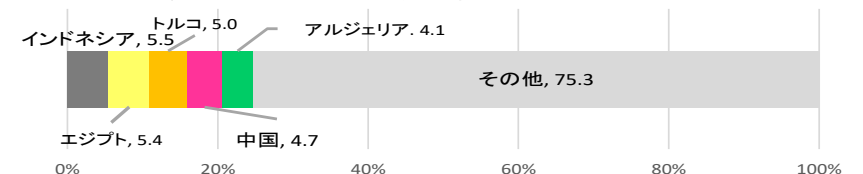
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量 (779.6百万トン) (単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量 (208.7百万トン) (単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量 (203.9百万トン) (単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は冬小麦が減少するものの春小麦が回復し前年度を上回る

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測に比べ0.1百万トン上方修正され、前年度に比べると8.3%増の48.5百万トンの見込み。

作期別には、前月に比べ、冬小麦、デュラム小麦が下方修正されたものの、春小麦が上方修正。

また、前年度に比べ、冬小麦は干ばつの影響による収穫面積と単収の減少から32.6百万トン(前年度34.8百万トン)と6.2%減少。一方、春小麦及びデュラム小麦は、収穫面積と単収の増加から前年度の干ばつによる減産から回復し、それぞれ13.9百万トン(同9.0百万トン、前年度対比54.5%増)、2.0百万トン(同1.0百万トン、同97.4%増)の見込み。

冬小麦の州別の生産状況は、ハード・レッド・ウインター(HRW)の産地である中央プレーンズのカンザス州、オクラホマ州では干ばつの影響で単収が引き下げられ、それぞれの生産量が前年度を28.5%、36.6%下回った。一方、ホワイト小麦(WW)の産地である北部のワシントン州、オレゴン州等では前年度からの干ばつが緩和し単収が引き上げられ、生産量がそれぞれ同81.6%、51.0%上回った。ソフト・レッド・ウインター(SRW)の産地である米国東部の単収は史上最高となった前年度には及ばないものの、史上2番目の高単収となっている。

「Crop Progress」(2022.8.22)によれば、8月21日時点の冬小麦の収穫進捗率は95%と、前年度同期(99%)及び5年平均(97%)を下回った。州別には、HRWの主産地である中央プレーンズのカンザス州、オクラホマ州等で収穫が終了、同北部のモンタナ州等では収穫が進展している。

また、春小麦の収穫進捗率は33%と、前年度同期(74%)及び5年平均(54%)を下回った。春小麦の作柄評価(良からやや良の割合)は64%(前週64%)と、干ばつの影響を受けた前年度同期(11%)を53ポイント上回っている。2022/23年度の春小麦は、プレーンズ北部のミネソタ州、ノースダコタ州で降雨過多により播種が遅れたものの、小麦価格が堅調なことから6月半ばから急速に播種が進んだ。その後、暖かい天候により生育の遅れが幾分解消されたものの、依然として遅れている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は主要輸出国の中で輸出価格が比較的に低いこと、世界の強い需要見込みから、前月予測から0.7百万トン上方修正され22.5百万トンとなる見込み。

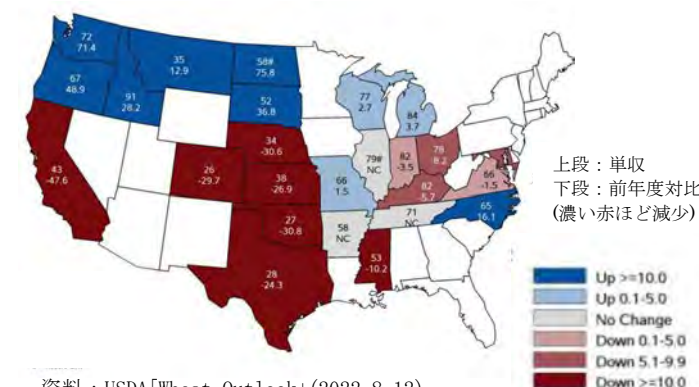
小麦－米国（冬小麦が全体の7割、春小麦は3割）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 予測値	2022年6月～23年5月	
				前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	48.5	0.1	8.3
消費量	30.4	30.6	30.4	0.2	▲0.7
うち飼料用	2.5	2.6	2.2	-	▲15.2
輸出量	27.1	21.8	22.5	0.7	3.1
輸入量	2.7	2.6	3.0	-	15.4
期末在庫量	23.0	18.0	16.6	▲0.8	▲7.6
期末在庫率	40.0%	34.3%	31.4%	▲2.0	▲2.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.04	15.19	▲0.04	1.0
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.20	0.02	7.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 August 2022)

図 米国産冬小麦の州別の単収(bu/acre)



資料：USDA「Wheat Outlook」(2022.8.12)

表 米国の小麦輸出先国別輸出量（輸出検証高）

2022年7月			2022年1月～7月		
国名	検証高(万トン)	シェア(%)	国名	累積検証高(万トン)	シェア(%)
メキシコ	47.1	24.9	メキシコ	234.8	20.6
韓国	16.3	8.6	フィリピン	140.2	12.3
フィリピン	14.6	7.7	日本	125.1	11.0
イエメン	13.5	7.2	ナイジェリア	72.4	6.4
日本	11.7	6.2	韓国	67.8	6.0
その他	69.4	36.7	その他	497.8	43.7
合計	189.1	100	合計	1,138.0	100

注1：7月の輸出検証高は、7月7、14、21、28日、8月4日の合計値

注2：2022年累積輸出検証高は、2022年1月6日～8月4日の合計

資料：USDA Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals (2022年8月12日)より作成。

＜ カナダ ＞ 生産量は回復し、前年度比 59.4%増、過去 5 年平均比 13.3%増

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.8.22)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、34.5 百万トンの見込み。カナダ西部の干ばつにより減少した 2021/22 年度に比べ、播種面積と単収の引き上げから、59.4%増加する見込み(過去 5 年平均対比 13.3%増)。

このうち、普通小麦は、前月予測からの変更はなく史上第 3 番目の 28.2 百万トン(前年度対比 48.6%増、過去 5 年平均対比 11.0%増)。デュラム小麦は、単収の引き上げから、前月予測から 0.8 百万トン上方修正され 6.3 百万トン(同 136.1%増、同 25.4%増)。平原三州のサスカチュワン州やアルバータ州では、良好な天候から単収は過去 5 年平均を上回っている。

USDA によれば、サスカチュワン州西部とアルバータ州南部では 6 月と 7 月の降雨や、温暖な気温によって生長が急速に進み、春小麦は成熟期の初期段階となっており、作柄は、2020/21 年と同じく平均以上となる見込み。

各州政府報告によれば、サスカチュワン州では 8 月 8 日時点の収穫進捗率は冬小麦が 7 %。春小麦とデュラム小麦は収穫が開始されていない。マニトバ州では、東部地域で冬小麦の収穫が開始、一方で、春小麦は開花が完了した。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.6 百万トン上方修正され、前年度に比べ 53.7%増加の 23.0 百万トン。そのうち、普通小麦は前月予測からの変更はなく 18.0 百万トンと、生産量の回復と世界の強い需要から、前年度に比べ 46.3%増加の見込み。デュラム小麦は、前月予測から 0.6 百万トン上方修正され 5.0 百万トンと、生産量の回復と高温・乾燥で作物が影響を受けた欧州や北アフリカ等の需要から、前年度に比べ 87.9%増加。

USDA によれば、カナダ産小麦の輸出価格は米国や豪州に比べ安価であることから、カナダは主要輸出先である南北アメリカ大陸、アジアの市場を回復する可能性がある。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022 年 6 月の輸出量は普通小麦が 80.4 万トン、デュラム小麦は 18.5 万トンの計 98.8 万トンで、輸出先国は、普通小麦はコロンビア(16.3%)、日本(11.9%)、ペルー(11.4%)、デュラム小麦は、モロッコ(44.3%)、米国(31.4%)、イタリア(12.4%)の順。2021/22 年度のカナダ産小麦輸出のペースは前年より遅くなっている。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	35.2	21.7	35.0 (34.5)	1.0	61.7
消 費 量	9.1	9.5	9.1 (9.4)	-	▲ 4.2
うち飼料用	4.2	4.5	4.0 (5.0)	-	▲ 11.1
輸 出 量	26.4	15.0	26.0 (23.0)	1.0	73.3
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	-
期末在庫量	5.7	3.4	3.9 (5.9)	-	14.6
期末在庫率	15.9%	14.0%	11.2% (18.2%)	▲ 0.3	▲ 2.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.25	10.00 (10.14)	-	8.1
単収(t/ha)	3.51	2.34	3.50 (3.40)	0.10	49.6

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 August 2022)

表 カナダ産小麦の輸出先国、輸出量

＜普通小麦＞

2022年6月			2021年8月～2022年6月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
コロンビア	13.1	16.3	日本	138.1	13.4
日本	9.6	11.9	インドネシア	108.0	10.5
ペルー	9.2	11.4	コロンビア	89.4	8.7
バングラデシュ	6.5	8.1	ペルー	77.6	7.5
ベネズエラ	6.4	8.0	中国	69.4	6.7
その他	35.6	44.3	その他	549.4	53.2
計	80.4	100.0	計	1031.9	100.0

＜デュラム小麦＞

2022年6月			2021年8月～2022年6月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
モロッコ	8.2	44.3	モロッコ	60.6	26.0
米国	5.8	31.4	アルジェリア	44.5	19.1
イタリア	2.3	12.4	米国	35.1	15.1
コロンビア	0.7	3.8	イタリア	31.9	13.7
日本	0.7	3.8	日本	16.1	6.9
その他	0.8	4.3	その他	44.7	19.2
計	18.5	100.0	計	232.9	100.0

注1:Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2普通小麦の品種はNO.1-3Canada Western Red Spring No.1 Canada Western Red Winter
No.2 Canada Eastern Red Spring No.2 Canada Eastern Oter,デュラムはCanada Western Amber Durum Other
資料:Canadian Grain Commission「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」をもとに作成。

＜ 豪州 ＞ 生産量は前月から 3.0 百万トン上方修正され 33.0 百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は前月予測に比べ 3.0 百万トン上方修正され、33.0 百万トンの見込み。史上最高となった前年度(36.3 百万トン)に比べ 9.1%減少するものの、過去 5 年平均を 36.1%上回る。

7 月は、例年に比べ乾燥していたが、この冬の時期の土壌水分はおおよそ保たれた。8 月には降雨に恵まれ、深層の土壌水分は多くの主要生産地で「平均」あるいは「平均以」となっている。生育状況は、特に西オーストラリア州、ビクトリア州、およびニューサウスウェールズ州南部の小麦生産地帯で、良好となっている。なお、小麦の開花は 8 月の半ばに始まり、9 月半ばには最盛期を迎える。

GIWA(西オーストラリア州穀物団体)(2022.8.12)によれば、2022/23 年度のウェスタン・オーストラリア州(WA 州)の実産量は 10.3 百万トン(前月 10.2 百万トン、前年度 12.9 百万トン)の見込み。生育状況は、暖かい気候により作物の成長が例年よりも進んでいる。このため、霜害のリスクがあるものの、作物の成熟が早まり春に生じる高温による障害の可能性は減少すると見られる。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2022.6.7)によれば、2022/23 年度の実産量は、10.3 百万トン(同 20%減)。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、25.0 百万トンの見込み。前年度(27.5 百万トン)に比べ 9.1%減少するものの、前年度に次ぐ史上第 2 番目の輸出量となる。

なお、8 月 10 日時点の豪州の輸出価格(FOB)は、良好な天候で生産量が 10 年平均を上回る見込みから、7 月 8 日時点の 403 ドル/トンから 390 ドル/トンに低下した。

豪州統計局によれば、2022 年 6 月の輸出量は 2.8 百万トンと、前月(2.4 百万トン)に比べ増加。また、2022 年 1 月から 6 月までの輸出量は 15.6 百万トン。輸出先国は、中国(21.3%)、インドネシア(12.0%)、フィリピン(10.8%)、ベトナム(10.2%)の順。豪州は、輸出量計の約 54%をこれらのアジア諸国に輸出しているほか、イエメン(4.0%)、スーダン(3.2%)等の中東、アフリカ諸国にも輸出している。なお、中国はこれまで主要な輸出先国ではなかったが、輸出量が増加している。

また、前年度の北米産小麦の減産やカナダ産菜種の不作により、豪州産穀物等の需要が高まっており、穀物等輸出のサプライチェーンの状況や豪州産穀物等の作柄について引き続き注視が必要。

小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年10月～23年9月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	31.9	36.3	33.0 (30.6)	3.0	▲ 9.1
消 費 量	8.0	8.5	8.6 (8.4)	1.0	0.6
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (4.6)	1.0	-
輸 出 量	23.9	27.5	25.0 (24.7)	1.0	▲ 9.1
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	-	-
期末在庫量	3.0	3.5	3.1 (3.3)	▲ 0.4	▲ 10.1
期末在庫率	9.3%	9.6%	9.3% (10.0%)	▲ 1.8	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.64	13.00	13.20 (13.2)	-	1.5
単収(t/ha)	2.52	2.79	2.50 (2.32)	0.23	▲ 10.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 July 2022)

写真 サウスオーストラリア州の小麦圃場



この圃場では、今年は例年になく降雨量が少なく、乾期播種を余儀なくされた。この圃場の生産者は 5 月中旬に播種を実施。小麦は、5 月下旬に発芽した。この地域では、翌週の 7 月 31 日以降でまとまった降雨が予測されており、生産量は、例年の平均か、それ以上になると見込まれている。(2022.7.29)

表 豪州産小麦の輸出先国別輸出量

2022年6月			2022年1月～6月		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	累積輸出量(万トン)	シェア(%)
中国	71.1	29.4	中国	332.3	21.3
インドネシア	31.8	13.2	インドネシア	188.1	12.0
ベトナム	22.4	9.3	フィリピン	168.5	10.8
フィリピン	20.0	8.3	ベトナム	159.3	10.2
韓国	14.5	6.0	韓国	101.7	6.5
その他	120.2	49.8	その他	611.5	39.2
合計	280.0	115.9	合計	1,561.4	100.0

資料：豪州統計局のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ EU27+英国 ＞EU27の生産量は前月予測から1.2百万トン下方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2022.7.28)によれば、EU27の2022/23年度の生産量は、前月予測に比べ1.2百万トン下方修正され、前年度に比べ6.9%減少の132.1百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、ブルガリア等で上方修正されたものの、フランス、スペイン、ドイツ等で下方修正されたため、前月予測に比べ0.1百万トン下方修正の124.9百万トン。デュラム小麦は、フランス等で下方修正されたことから、同0.1百万トン下方修正の7.2百万トン。

また、USDAによれば、英国の生産量は前月予測からの変更はなく、14.6百万トン。

USDAによれば、7月はスペイン、フランス、イタリア等で高温・乾燥状態が継続したため、EU27の生産量予測が下方修正された(前月に比べ2.0百万トン下方修正の132.1百万トン)。また、この高温の影響で平年より1～2週間早く生育が進み、ヨーロッパの多くの国で収穫が終了した。

フランスアグリメール(2022.8.8)によれば、フランス産普通小麦、デュラム小麦とも前年度に比べ早く収穫が終了した。このため、乾燥天候の影響はある程度免れたと見られている。

また、フランス産普通小麦の品質は、サンプル対象予定数量の58%に当たる検査結果では、タンパク質含有量が11%～11.5%のものが多く、12%以上は20%に留まっている(前年度はサンプル全体の43%がタンパク質含有量12%以上)。一方、容積重は過去5年平均並で、格付けはA1:12%(5年平均38%) A2:40%(同29%) A3:26%(同29%) A4:22%(4)と、最下位A4の比率が多い。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度のEU27の消費量は、国内向け供給量が減少するため、飼料用等消費が前月に比べ0.5百万トン下方修正され107.0百万トンとなる見込み。

また、輸出量は、生産量の引き下げから前月予測から2.0百万トン下方修正され33.5百万トンとなるものの、前年度に比べ5.5%増加する見込み。8月10日現在の輸出価格(FOB)は、ユーロ安とウクライナからの輸出再開から352ドル/トンと、前月から5ドル/トン低下した。

欧州委員会によれば、5月の輸出量は、普通小麦が2.1百万トン(過去5年平均1.8百万トン)、デュラム小麦が0.1百万トン(同0.1百万トン)。輸出先国は、普通小麦がアルジェリア(33.1%)、エジプト(13.9%)、モロッコ(11.4%)、デュラム小麦がチュニジア(79.5%)、コートジボワール(5.4%)、マリ(3.6%)の順であり、ともにアフリカ諸国が中心となっている。

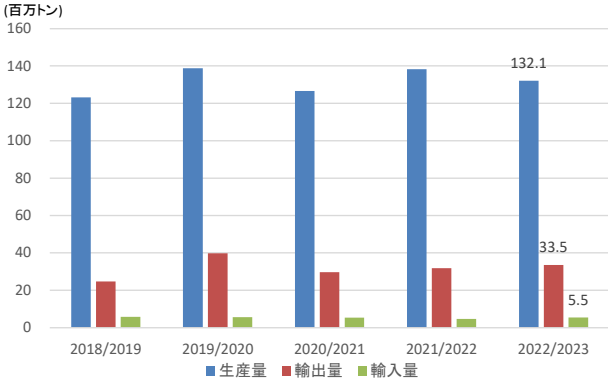
USDAによれば、EU27ヶ国の輸入量は前月予測からの変更はなく、5.5百万トンの見込み。

小麦－EU27+英国(冬小麦を主に栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	136.4	152.3	146.7 (146.9)	▲ 2.0	▲ 3.7
消費量	118.2	124.2	122.6 (118.6)	▲ 0.5	▲ 1.2
うち飼料用	48.5	52.9	50.6 (45.6)	▲ 0.5	▲ 4.3
輸出量	30.2	32.6	34.5 (6.9)	▲ 2.0	5.9
輸入量	8.6	7.2	7.5 (40.2)	-	4.2
期末在庫量	12.1	14.9	12.0 (12.9)	▲ 0.7	▲ 19.5
期末在庫率	8.2%	9.5%	7.6% (10.3%)	▲ 0.1	▲ 1.9

(参考)
収穫面積(百万ha) 22.97 26.04 25.80 (25.64) ▲ 0.10 ▲ 0.9
単収(t/ha) 5.94 5.85 5.69 (5.73) ▲ 0.06 ▲ 2.8
資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 July 2022)
表内及び()内のデータはEU27ヶ国+英国のデータ

図 EU27産小麦生産量、輸入量、輸出量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022. 8. 12)のデータをもとに農林水産省にて作成

表 EU27の普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量

(普通小麦)			(デュラム小麦)		
2022年5月			2022年5月		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
アルジェリア	69.3	33.1	チュニジア	8.2	79.5
エジプト	29.2	13.9	コートジボワール	0.6	5.4
モロッコ	24.0	11.4	マリ	0.4	3.6
ナイジェリア	23.5	11.2	サウジアラビア	0.3	2.9
チュニジア	8.2	3.9	アルバニア	0.2	1.6
イラン	6.6	3.2	スイス	0.2	1.5
その他	48.7	23.3	その他	0.6	5.5
計	209.5	100	計	10.3	100.0

EC(欧州委員会)「Cereals exports and imports」(2022. 7. 22)をもとに農林水産省で作成。

＜ 中国 ＞ 冬小麦は収穫が終了。品質は良好。

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.8.5)によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 1.1%増加の 138.4 百万トンの見込み。作期別には、冬小麦は前月予測からの変更はなく、131.9 百万トン(対前年度 0.4%増)、春小麦も前月からの変更はなく 6.5 百万トン(同 17.7%増)の見込み。

中国全土の冬小麦の収穫は終了しており、冬小麦の品質は、容積重等で分類された中国国家標準の 1～2 級に格付けされた割合が前年度に比べ大幅に増加しており良好である。一方、USDA によれば、登熟期や収穫期の降雨で、タンパク含有量は低下し、砕粒が多くなると見られている。

一方、春小麦は、中国中央气象台 (2022.8.8)によれば、新疆地区で乳熟期、内モンゴル地区で開花期から乳熟期、甘粛地域では開花期から乳熟期に入っている。

USDA によれば、前年秋の洪水で冬小麦の播種が遅れ、播種面積が減少したものの、生育が進むとともに主要産地の天候が回復し、2022 年 4 月と 5 月には良好な天候と土壌水分に恵まれ、順調に登熟と成熟が進んだ。また、冬小麦の播種面積は減少したものの、春小麦の播種面積が増加した。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月からの変更はなく、前年度(9.6 百万トン)から 18.4%減少の 7.8 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2022 年 6 月の輸入量は、前年度同期(75.2 万トン)を 32.1%下回る 51.0 万トン。また、2022 年 1 月～6 月は、490.7 万トンで、同期間中の輸入先国は、豪州が大部を占め、前年同期のシェアが 28.1%の米国の輸入実績はほぼない。

国家糧食和物資儲備局(2022.8.11)によれば、冬小麦の政府による主産地での買付量累計は、8 月 5 日現在、44.8 百万トンと前年度同期に比べ 41 万トンの増加である。

なお、USDA によれば、期末在庫量は前月予測から 2.8 百万トン上方修正され史上最高に近い 144.4 百万トンと、ほぼ年間の需要量に相当する量になると見込まれる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022 年 6 月号」によれば、本年度の冬小麦は豊作で品質が良く、市場への供給見通しは良好であり、市場への出荷量も徐々に増加している。一方、小麦粉消費が依然として低迷していることを受け、小麦粉加工業者の稼働率が低く、一部業者は仕入れ価格を下げたため、6 月の国内小麦価格は小幅に下落した。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	134.3	137.0	138.0	(135.0)	3.0	0.8
消 費 量	150.0	148.0	144.0	(141.0)	-	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0	(26.5)	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9	(1.1)	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	9.5	(9.4)	-	▲ 0.7
期末在庫量	144.1	141.8	144.4	(135.5)	2.8	1.8
期末在庫率	95.6%	95.2%	99.6%	(95.4%)	2.0	4.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.60	(23.5)	0.20	0.1
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.85	(5.74)	0.08	0.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 July 2022)

表 中国産小麦の国家標準表

等級	容積重(g/L)	不完全粒/%	不純物/%		水分/%	色、気味
			総量	そのうち、ミネラル		
1	≥790	≤6.0	≤1.0	≤0.5	≤12.5	正常
2	≥770					
3	≥750					
4	≥730					
5	≥710	≤8.0				
等級外	<710	≤10.0				
		-				

資料：中国国家標準化委員会

表 中国の小麦輸入先国

(輸出量万トン、シェア%)

2022年6月			2022年1月～2022年6月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
オーストラリア	41.7	81.7	オーストラリア	298.4	60.8	オーストラリア	273.4	28.1
カナダ	9.1	17.8	フランス	144.5	29.5	米国	272.6	28.1
カザフスタン	0.3	0.5	カナダ	45.9	9.4	カナダ	254.0	26.1
-	-	-	カザフスタン	1.5	0.3	フランス	141.6	14.6
-	-	-	ロシア	0.2	0.0	カザフスタン	18.7	1.9
-	-	-	米国	0.0	0.0	リトアニア	6.6	0.7
その他	-	-	その他	0.0	0.0	その他	2.9	0.3
計	51.0	100	計	490.7	100	計	971.8	100

資料：中国海関統計(2022. 7. 20)をもとに農林水産省で作成資料

＜ ロシア ＞ 生産量は前月から 6.5 百万トン上方修正で史上最高の 88.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度（クリミア地域分を含まず）は、前月予測から 6.5 百万トン上方修正され、88.0 百万トンと前年度に比べ 17.1%増加し史上最高となる見込み。

作期別の生産量は、冬小麦、春小麦とともに収穫面積と単収が引き上げられたことから、それぞれ、前月予測から 5.5 百万トン上方修正され 65.0 百万トン（前年度 52.2 百万トン）、1.0 百万トン上方修正され 23.0 百万トン（同 23.0 百万トン）となる見込み。前年度に比べ、冬小麦は冬期の枯死も少なく生育状況が良好であったため 24.5 %増加、春小麦も 0.2 %増加した。

冬小麦の収穫は進展しており、冬小麦全体の 18%を生産する主要生産地のクラスノダール地方では、7 月下旬で 78%の収穫進捗率となっている。また、同地域の単収は史上最高と見込まれている。

一方、春小麦は、シベリア連邦管区で 7 月を通じて降水量が平年を下回ったものの、中央、ウラル、沿ボルガ連邦管区で良好な生育条件となった。春小麦の収穫は 8 月下旬に開始される。

ロシア農業省によれば、冬小麦の収穫は南部のクラスノダール地方等から開始され、8 月 12 日時点で、収穫面積は 14.5 百万ヘクタール、収穫進捗率は 49.3%となり、収穫量は 64.1 百万トン（前年度同時期 12.6%増）である。また、単収は 4.42 トン/ヘクタールで前年度同時期の 3.30 トン/ヘクタールを上回っている。ロシア穀物同盟によれば、降雨過多による被害粒の発生等の影響で、品質調整後の収穫量は大きく減る可能性がある。また、品質についても、降水量が多いため、前年度 82%が食用グレードであったが、本年度は 60%程度になる可能性もある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量が引き上げられたことから、前月予測に比べ 2.0 百万トン上方修正され、前年度に比べ 27.3%増加の 42.0 百万トンの見込み。

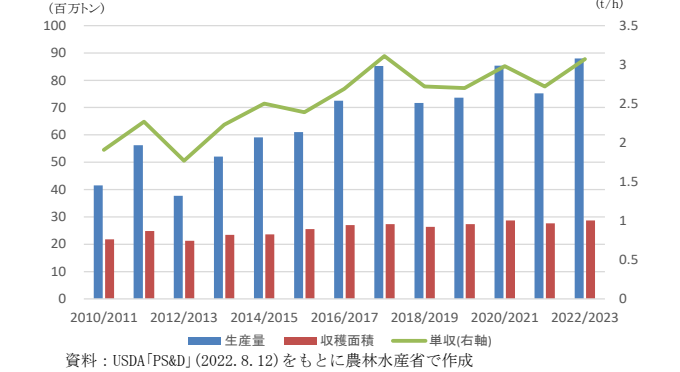
ロシア穀物同盟によれば、7 月の小麦輸出量は、前年度同月比 10.5%減の 280.4 万トン。また、前年度同月の輸出先国数は 41 ヶ国であったものの、ナイジェリア、モザンビーク等のアフリカ諸国への輸出がなく、17 ヶ国に減少した。現地情報会社によれば、7 月の輸出先国は、イラン(20.7%)、トルコ(19.7%)、サウジアラビア(9.9%)の順で、中東諸国向けが多い。

ロシア産小麦は、輸出関税が賦課されているためコストが高く、ウクライナ産に比べ価格競争力が低い。そのため、ウクライナからの海上輸送が定着すれば、輸出価格を下げざるを得ないと見られている。なお、現地情報会社によれば、ロシアは可変式輸出関税廃止について検討していない模様。

小麦－ロシア（主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	85.4	75.2	88.0 (85.2)	6.5	17.1	
消 費 量	42.5	41.8	44.0 (44.4)	1.8	5.4	
うち飼料用	19.0	18.5	20.0 (19.5)	1.0	8.1	
輸 出 量	39.1	33.0	42.0 (37.6)	2.0	27.3	
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-	
期末在庫量	11.4	12.1	14.4 (14.6)	2.8	19.0	
期末在庫率	13.9%	16.2%	16.7% (17.8%)	2.6	0.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	28.70 (28.2)	0.90	3.9	
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.07 (3.02)	0.14	12.9	
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 August 2022)						
IGC 「Grain Market Report」(21 July 2022)						

図：ロシア産小麦の生産量、収穫面積、単収の推移



図：ロシア産小麦の輸出先国、輸出量

2019/20年度 (2019年7月～2020年6月)			2020/21年度 (2020年7月～2021年6月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	791.3	28.6	エジプト	793.5	20.1	トルコ	641.5	19.7
エジプト	606.3	21.9	トルコ	686.0	17.4	イラン	626.6	19.2
バングラデシュ	221.6	8.0	バングラデシュ	182.1	4.6	エジプト	501.3	15.4
アゼルバイジャン	128.3	4.6	イラン	176.2	4.5	カザフスタン	217.3	6.7
スーダン	114.3	4.1	アゼルバイジャン	137.6	3.5	アゼルバイジャン	95.4	2.9
イラン	113.0	4.1	スーダン	115.4	2.9	サウジアラビア	90.4	2.8
ナイジェリア	95.8	3.5	ナイジェリア	107.2	2.7	ナイジェリア	75.5	2.3
その他	693.7	25.1	その他	1,741.9	44.2	その他	1,015.8	31.1
計	2,764.3	100.0	計	3,939.9	100.0	計	3,263.8	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 4者合意に基づく輸出再開で輸出量は1.0百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、19.5百万トンの見込み。ロシアの侵攻により、前年度に比べ、収穫面積と単収が減少し、生産量は史上最高だった前年度(33.0百万トン)に比べ40.9%減少する見込み。

ウクライナ気象センター(2022.8.5)によれば、生育状況は、冬小麦は7月上旬におおむね完熟し、その後収穫は完了した。また、春小麦は完熟となり、収穫が進行中である。ウクライナ国家統計局(2022.8.11)によれば、2022/23年度の小麦全体の収穫面積は3.9百万ヘクタールで、収穫量は15.4百万トン、単収は4.01トン/ヘクタール。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者合意を受けた黒海からの輸出再開により、前月予測から1.0百万トン上方修正されたものの、前年度に比べ41.5%減少の11.0百万トンの見込み。

ウクライナ税関統計によれば、7月の小麦輸出量は、41.2万トンで、前年度同時期(96.1万トン)、過去4年平均(108.6万トン)をそれぞれ56.2%、62.1%下回っている。ウクライナ鉄道によれば、7月の穀物全体の鉄道輸送量は146.2万トンで、6月の136.4万トンから9.2%増加した。このうち輸出量は、7月が90.5万トン、6月が80.5万トンであった。

なお、4者合意を受けて、8月1日にはとうもろこし2.7万トンを搭載した船がオデーサ港を出港した。国連共同調整センター(2022.8.27)によれば、8月27日現在、合意に基づく輸出量は104万トンで、そのうち小麦の輸出量は18万トン、仕向地はトルコ等となっている。

USDAによれば、今回の合意に基づく黒海港湾からの輸出再開により、農産物の国際価格の上昇が抑制されることに加え、ウクライナの港湾の輸出滞留により生じる損失が減じられると見ている。

ウクライナでは長期保管に不可欠なエアレーションシステムを備えた穀物エレベーターが多くないことから、港湾に滞留していた穀物の大半が失われる事態が懸念されていた。

なお、港湾及びその周辺での軍事紛争の継続、港湾及び航路での地雷、機雷の問題、運賃と保険料による物流コストの高止まりが懸念されている。なお、2022年7月22日に合意された協定は、有効期間が120日間で、その後の延長は可能。輸出が再開される港湾はオデーサ港、ユジニ港、チョルノモルシク港の3港とされている。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	25.4	33.0	19.5 (19.4)	-	▲ 40.9
消費量	8.7	10.0	10.2 (8.3)	-	2.0
うち飼料用	2.6	4.0	5.0 (2.8)	-	25.0
輸出量	16.9	18.8	11.0 (10.0)	1.0	▲ 41.5
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 23.1
期末在庫量	1.5	5.8	4.2 (8.2)	▲ 1.0	▲ 27.4
期末在庫率	5.9%	20.3%	20.0% (44.8%)	▲ 5.9	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.25 (5.03)	-	▲ 29.1
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.71 (3.86)	-	▲ 16.6

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 July 2022)

図 ウクライナ産小麦の月別輸出量

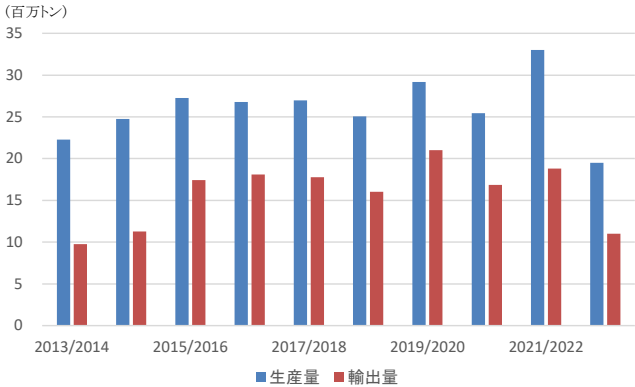


図: 黒海港湾からの輸出経路



2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ウクライナ等で上方修正も、EU、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

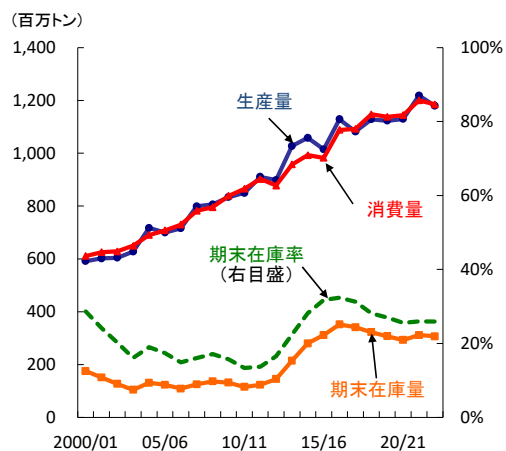
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ウクライナ等で上方修正も、EU、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・EU 等で下方修正も、ウクライナ、セルビア等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022. 8. 12）をもとに農林水産省にて作成

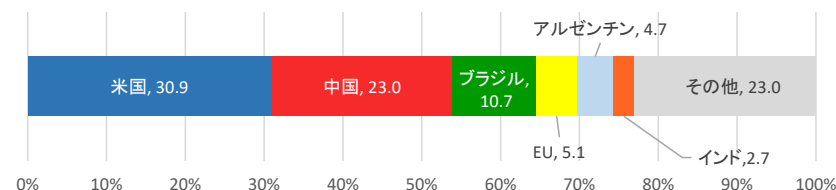
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

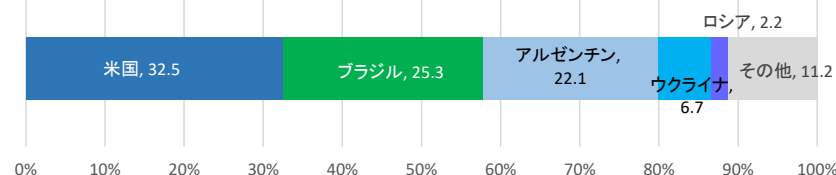
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,129.4	1,218.8	1,179.6	▲ 6.3	▲ 3.2
消費量	1,144.0	1,199.8	1,184.8	▲ 0.5	▲ 1.3
うち飼料用	724.2	745.9	746.0	▲ 1.2	0.0
輸出量	182.6	200.4	185.6	3.1	▲ 7.4
輸入量	185.2	178.6	179.8	2.7	0.7
期末在庫量	292.9	311.8	306.7	▲ 6.3	▲ 1.7
期末在庫率	25.6%	26.0%	25.9%	▲ 0.5	▲ 0.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 August 2022）

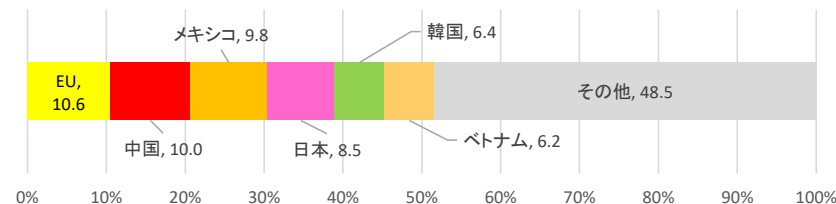
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量 (1,179.6 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量 (185.6 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量 (179.8 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、収穫面積の減少に加え、8月の初回の現地調査において、主産地のイリノイ州等では天候に恵まれたが、ノースカロライナ州からコロラド州にかけての南部産地で悪天候により単収が低下したことから前月予測から 3.7 百万トン下方修正され、前年度より 5.0%減の 364.7 百万トンの見込み。なお、収穫面積の減少は肥料価格高騰の影響から主産州で作付けが肥料の投入量のより少ない大豆等へシフトしたことが要因。

USDA「Crop Progress」（2022.8.22）によれば、主要 18 州におけるドウ（ミルク状の穀粒が徐々に柔らかい固まりになっていく段階）進捗率は 75%と前年度同期（83%）及び過去 5 年平均（79%）より遅れている。デント（穀粒に窪みができる段階）進捗率は 31%と前年度同期（38%）及び過去 5 年平均（35%）より遅れている。作柄評価は、良からやや良が 55%と前年度同期（60%）を下回っている。9 月以降、成熟期を迎えるとみられる。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、前年度より 2.0%減の 308.6 百万トンの見込み。エタノール用需要が前年度から増加の一方、生産量の減少による国内価格の上昇等から飼料用需要の減少が要因。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、6 月の輸出ペースが過去 6 ヶ月間で最少となること等から、前月予測から 0.6 百万トン下方修正され、供給量の減少等から、前年度より 3.1%減の 60.3 百万トンの見込み。

USDAによれば、2022 年輸出検証高（2022 年 1 月 6 日～8 月 8 日）は、39.3 百万トンであり、内訳は中国（11.3 百万トン）、メキシコ（9.3 百万トン）、日本（7.6 百万トン）、コロンビア（2.7 百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、生産量の下方修正により前月予測から 2.1 百万トン下方修正され、前年度より 9.2%減の 35.3 百万トンの見込み。なお、期末在庫率は 9.6%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

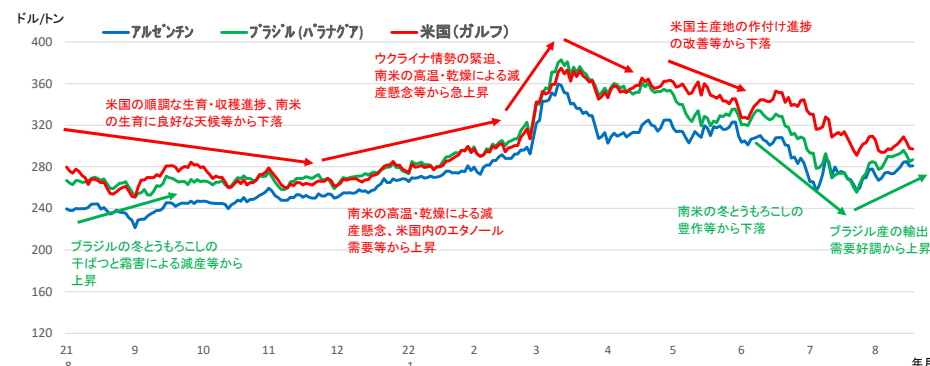
とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	358.5	383.9	364.7	▲ 3.7	▲ 5.0
消 費 量	306.7	314.9	308.6	▲ 0.5	▲ 2.0
うち飼料用	142.3	142.3	135.3	▲ 0.6	▲ 4.9
エタノール用等	127.8	135.9	136.5	－	0.5
輸 出 量	69.8	62.2	60.3	▲ 0.6	▲ 3.1
輸 入 量	0.6	0.6	0.6	－	－
期末在庫量	31.4	38.9	35.3	▲ 2.1	▲ 9.2
期末在庫率	8.3%	10.3%	9.6%	▲ 0.5	▲ 0.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.56	33.12	▲ 0.04	▲ 4.2
単収(t/ha)	10.76	11.11	11.01	▲ 0.10	▲ 0.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 August 2022）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より 8.6% 増の 126.0 百万トンで史上最高の見込み。

なお、ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2022.8.11）によれば、2021/22 年度の収穫が終了した夏とうもろこしの生産量は、2020/21 年度比 1.0% 増の 25.0 百万トンの見込み。

一方、主産地で収穫終盤を迎えた冬とうもろこしの生産量は、生育期にマット・グロッソ州など中西部の主産地では乾燥が続いたものの、パラナ州など南部産地では良好な天候に恵まれ、大幅な増産となり、干ばつ・霜害で減産となった 2020/21 年度に比べ 43.8% 増の 89.7 百万トンの見込み。

夏作・冬作の合計では 2020/21 年度比 31.7% 増の 114.7 百万トンで史上最高の見込み。
(P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照)。

冬とうもろこしの主産地である中西部のマット・グロッソ州で 8 月 8 日現在、収穫率は 100% で収穫終了。南部のパラナ州で 8 月 16 日現在、収穫率は 79% と、収穫が遅れた前年度同期より 40 ポイント進んでいる。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 5.5% 増の 77.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 5.6% 増の 47.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～7 月の輸出量は 10.4 百万トンで、前年同期（5.6 百万トン）と比べ 1.8 倍となっている。内訳は、1 位がイラン 2.4 百万トン、2 位がエジプト 1.6 百万トン、3 位が韓国 0.7 百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナ産の輸出が影響を受けており、代替としてブラジル産の中東向け輸出が大幅に増加した。

とうもろこしーブラジル

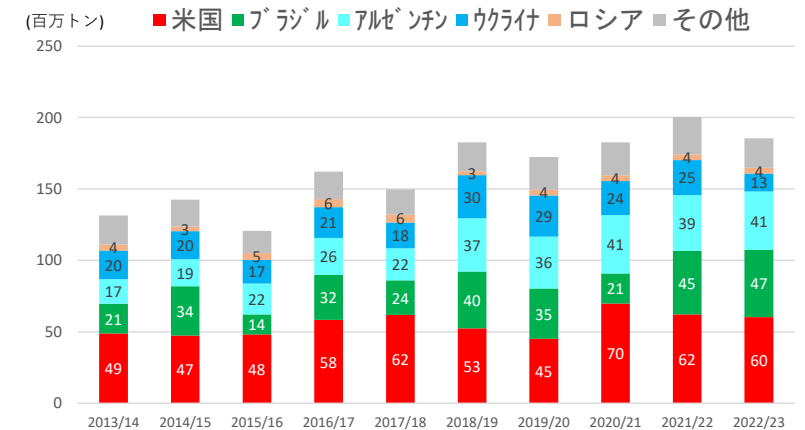
(大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが 3/4 を占め、夏とうもろこしは 1/4)

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	87.0	116.0	126.0	(123.1)	-	8.6
消 費 量	70.0	73.0	77.0	(78.6)	-	5.5
うち飼料用	59.5	62.0	65.5	(56.5)	-	5.6
輸 出 量	21.0	44.5	47.0	(43.6)	-	5.6
輸 入 量	2.9	2.0	1.3	(0.5)	-	▲ 35.0
期末在庫量	4.2	4.7	8.0	(8.5)	-	71.0
期末在庫率	4.6%	4.0%	6.4%	(7.0%)	-	2.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70	(21.80)	-	4.1
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.55	(5.65)	-	4.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 July 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料: USDA 「PS&D」 (2022. 8. 12) のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加により、前年度より 3.8%増の 55.0 百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.8.18）によれば、2021/22 年度の収穫進捗率は 98%で、過去 5 年平均より 4 ポイント進んでいる。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 2.2%増の 14.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 5.1%増の 41.0 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1 ～ 6 月の輸出量は 18.6 百万トンで、前年同期（17.5 百万トン）より 6.3%増。内訳は、1 位がベトナム 2.5 百万トン、2 位が韓国 2.0 百万トン、3 位がペルー 1.6 百万トン。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7 % から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧漁業大臣がとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。8 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2020/21 年度 4,160 万トン、2021/22 年度 3,600 万トンと設定されている。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	52.0	53.0	55.0 (60.6)	-	3.8
消 費 量	13.5	13.7	14.0 (21.2)	-	2.2
うち飼料用	9.5	9.8	10.0 (16.3)	-	2.0
輸 出 量	40.9	39.0	41.0 (41.0)	-	5.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.5)	-	-
期末在庫率	2.2%	2.8%	2.7% (4.0%)	-	▲ 0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.55	7.20	7.00 (8.00)	-	▲ 2.8
単収(t/ha)	7.94	7.36	7.86 (7.58)	-	6.8

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 July 2022)

写真：北部サンタフェ州の次期作付けを待つとうもろこし圃場
(7月31日撮影)

作付け作業は、8月の降雨があれば9月以降に開始予定。



< 中国 > 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、政府補助金による大豆奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積が減少することから、前年度より0.6%減の271.0百万トンの見込み。

国家糧油情報センター（2022.8.5）によれば、吉林省中西部、遼寧省北部等の春とうもろこしは7月の降雨過多により、一部の農地が浸水被害に見舞われるなど、影響が懸念される。8月上旬時点で、おおむねシルキング期にある。一方、河南省等の夏とうもろこしは、天候や土壌水分に恵まれ、生育も良好である。節間伸長期からシルキング期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より1.4%増の295.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より21.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～6月の輸入量は13.6百万トンで、前年同期比で11.2%減。内訳は、米国産8.4百万トン（62%）、ウクライナ産4.9百万トン（36%）。5月以降、前年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。（右図参照）

5月23日には、中国政府は、ブラジル産とうもろこしについても検疫問題をクリアし輸入の合意に至ったと公表した。しかし、遺伝子組み換えの承認手続き等に相当時間を要するとみられ、当面は米国産を手当てしている模様である。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年6月号」によると、6月の国内流通価格は、2,880元/トンと前月（2,940元/トン）から下落した。主な要因は、一部取引業者が冬小麦の仕入れのため、とうもろこし在庫を放出し、市場の供給が十分にあったこと。また、政府の備蓄用長期保存粳が継続的に安価で競売にかけられ、とうもろこしの飼料用消費がコメに代替されたためである。また、6月の輸入価格は、3,140元/トンと前月（3,280元/トン）から下落したものの、依然として国内価格を上回り内外価格差は大きい。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要。

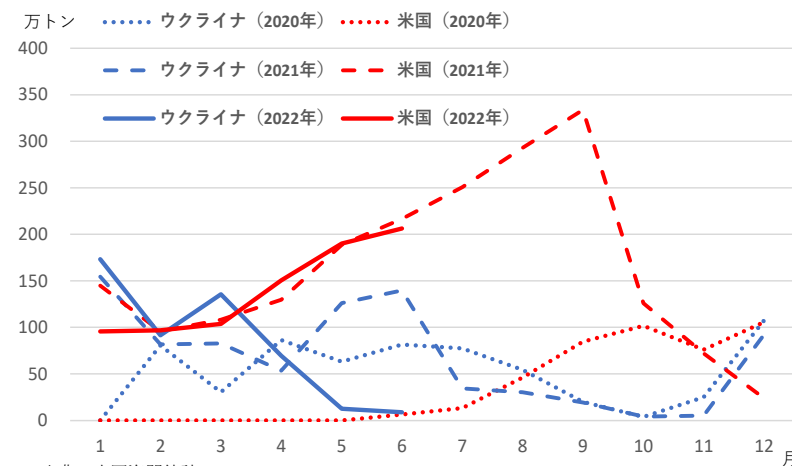
とうもろこしー中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.7	272.6	271.0 (273.0)	-	▲ 0.6	
消 費 量	285.0	291.0	295.0 (305.2)	-	1.4	
うち飼料用	203.0	209.0	214.0 (203.0)	-	2.4	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	29.5	23.0	18.0 (19.0)	-	▲ 21.7	
期末在庫量	205.7	210.2	204.2 (175.0)	-	▲ 2.9	
期末在庫率	72.2%	72.2%	69.2% (57.3%)	-	▲ 3.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00 (42.50)	-	▲ 0.7	
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.30 (6.42)	-	0.2	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 July 2022)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< ウクライナ > 4者合意に基づく輸出再開で輸出量は3.5百万トンの上方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、西部、南部で乾燥傾向も、主要生産地の北部、中部で適度な降雨と高温の日が少なかったことから単収の上方修正により前月予測から5.0百万トン上方修正された。しかし、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、燃料や肥料等の生産資材不足もあり、史上最高の生産量となった前年度より28.8%減の30.0百万トンの見込み。

ウクライナ気象センター(2022.8.5)によれば、7月上旬はほぼ降雨がなかったものの、中旬以降に降雨があり、土壌水分が改善された。7月末現在、西部や中央部の一部で土壌水分は不足気味となっている。生育状況は、おおむね開花期を迎えており、一部で乳熟期となっている。作柄は、おおむね良好であるが、一部で降雨不足による葉の変色や虫害、病害が発生している。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の上方修正に伴い前月予測から1.0百万トン上方修正されたものの、生産量の減少に伴い、前年度より4.1%減の11.7百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者合意による黒海の港湾からの輸出再開から、前月予測から3.5百万トン上方修正されたものの、前年度より49.0%減の12.5百万トンの見込み。

8月10日付けウクライナ農業政策食料省発表によれば、7月の輸出量は110万トンで、前月(101.5万トン)に比べ8%増加。

なお、輸出再開を受けて8月1日にはとうもろこし2.7万トンを搭載した船がオデーサ港を出港した。国連共同調整センター(2022.8.27)によれば、8月27日現在、黒海港湾からのとうもろこし輸出量は66万トン、輸出先国は、トルコ、韓国、イラン等である。

USDAによれば、EUは高温・乾燥の影響により生産量が減少する可能性があるため、地理的に近接するウクライナからとうもろこしを輸入するとみられている。

また、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より92.5%増の12.1百万トンの見込みで、在庫が積み上がっている。

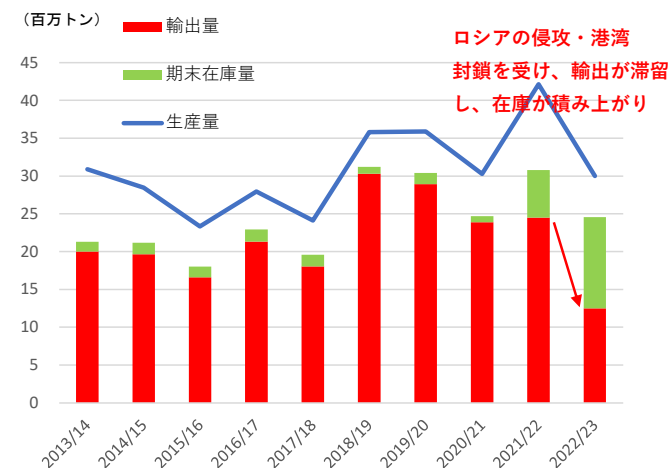
とうもろこしーウクライナ

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	30.3	42.1	30.0 (25.1)	5.0	▲ 28.8	
消費量	7.1	12.2	11.7 (10.7)	1.0	▲ 4.1	
うち飼料用	5.9	11.0	10.5 (5.5)	1.0	▲ 4.5	
輸 出 量	23.9	24.5	12.5 (12.0)	3.5	▲ 49.0	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0	
期末在庫量	0.8	6.3	12.1 (9.3)	-	92.5	
期末在庫率	2.7%	17.1%	49.9% (41.2%)	▲ 11.4	32.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.50 (4.59)	-	▲ 18.0	
単収(t/ha)	5.62	7.68	6.67 (5.47)	1.11	▲ 13.2	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 July 2022)

図: とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料: USDA 「PS&D」(2022.8.12)をともに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

生産量 前年度比 ↓ 2022/23 年度 前月比 ↓

- ・インド等で下方修正され、前月から下方修正された。

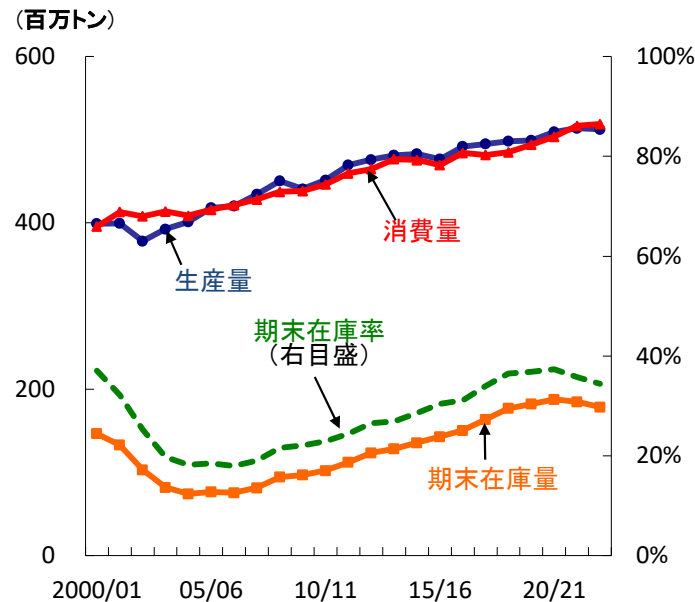
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・インドネシア等で下方修正されたものの、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」(2022. 8. 12)をもとに農林水産省にて作成

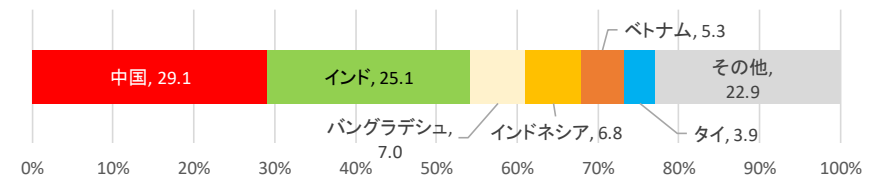
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

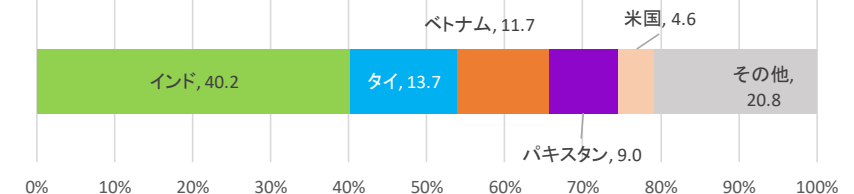
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	513.7	512.4	▲ 2.3	▲ 0.2
消 費 量	503.6	516.7	518.7	0.1	0.4
輸 出 量	50.9	54.6	54.7	0.1	0.1
輸 入 量	46.5	53.6	53.1	▲ 0.0	▲ 1.0
期末在庫量	187.9	184.8	178.5	▲ 4.2	▲ 3.4
期末在庫率	37.3%	35.8%	34.4%	▲ 0.8	▲ 1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 August 2022)

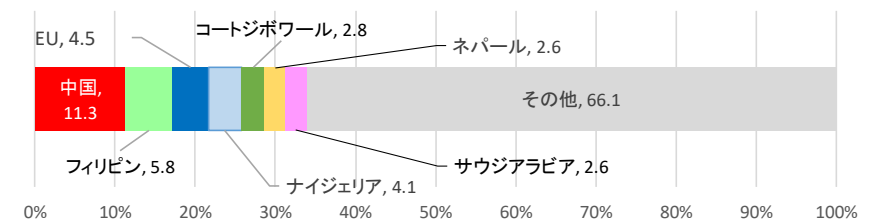
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(512.4百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(54.7百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(53.1百万トン) (単位：%)



（２）国別のコメの需給動向

＜ 米国 ＞ 中・短粒種は1985/86年度以来の歴史的低水準の生産量に

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、単収のわずかな引き上げにより前月予測から0.1百万トン上方修正されたものの、対前年度比8.2%減の5.6百万トンと、1996/97年度以来の低水準の見込み。収穫面積は、厳しい干ばつによる灌漑用水不足で、特にカリフォルニア州（中・短粒種の国内生産の75%を占める）で2年連続減少し、1958/59年度以来の低水準となった。一方ミシシッピ下流域では、農業資材の高騰に比べ米価の上昇幅が少ないこと、大豆やとうもろこしの収益性の方が高いことから主産地のアーカンソー州等で収穫面積が減少した。

同「Crop Progress」（2022.8.22）によると、主要6州における出穂率は93%と、前年同期（92%）を上回り、過去5年平均と同水準。作柄評価は、やや良から良が72%と、前年同期（77%）を下回っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はないものの、供給量の減少等から対前年度比2.5%減の4.6百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比13.2%増の1.4百万トンと、史上最高の見込み。また、消費に占める割合は30%と、史上最高となる見込み。なおカリフォルニア州の中・短粒種の生産が大幅に減少するとの予測から、中・短粒種の輸入量は、タイ、中国（米領プエルトリコ向けを含む）等に加え、豪州産の輸入により、対前年度比43%増の0.5百万トンとなる見込み。

2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比5.3%減の2.5百万トンと、1996/97年度以来の低水準の見込み。これはアジア産や南米産より価格競争力が低いため。

同「Rice Outlook」（2022.8.16）によれば、長粒種の価格はここ数か月間上昇しており、8月9日までの週のイラク向け長粒種（2等、碎米4%混入）は710ドル/トンと、2008年10月以来の高値となった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。また中・短粒種の価格は、8月9日までの週の地中海向けカリフォルニア米（1等、碎米4%混入）で1,550ドル/トンと、過去最高を更新した。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

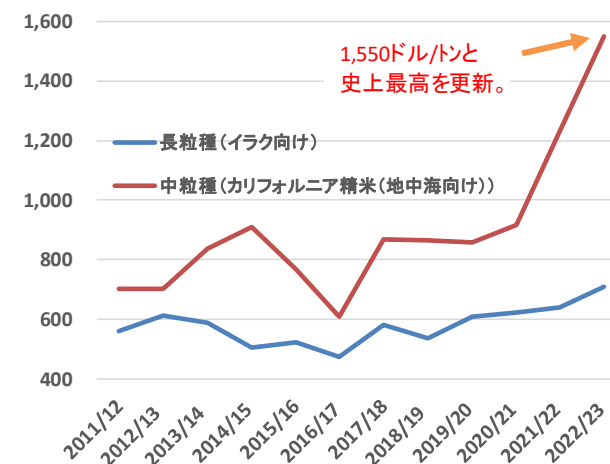
（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	7.2	6.1	5.6	0.1	▲ 8.2
消 費 量	4.9	4.7	4.6	-	▲ 2.5
輸 出 量	3.0	2.7	2.5	-	▲ 5.3
輸 入 量	1.1	1.2	1.4	-	13.2
期末在庫量	1.4	1.3	1.2	0.0	▲ 12.1
期末在庫率	17.8%	17.9%	16.3%	0.4	▲ 1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.93	-	▲ 7.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.55	0.07	▲ 1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 August 2022）

図：米国の長粒種と中・短粒種の価格の推移

（単位：ドル/トン）



資料：USDA「Rice Outlook」（2022.8.12）より。価格は年度内の平均価格。
なお、2022/23年度は8月の価格。

< インド > 作付面積減少により 2015/16 年以來初の減産に

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測から2.0百万トン下方修正され、対前年度比0.9%減の128.5百万トンとなる見込み。主産地のウッタル・プラデーシュ州等北東部で降雨が不十分だったことから、カリフ米の作付面積が減少した。2015/16年度以来、増産が続いていたものの、2022/23年度は減産となる見込み。ただし、依然として前年度に次ぐ史上第2位の水準となる見込み。

インド農業農民福祉省(2022.8.12)によると、カリフ米作付済面積は、8月12日時点で30.97百万ヘクタールと、前年同期(35.36百万ヘクタール)に比べて4.38百万ヘクタール少なくなっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比0.8%減の107.5百万トンの見込み。

2021/22年度の消費量は、政府が低所得世帯向け食料配給プログラム等で、コメの配給量を増加させたことから、前月予測から1.5百万トン上方修正され、対2020/21年度比7.0%増の108.4百万トンとなった。

USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、十分な輸出余力や価格競争力から、22.0百万トンと、前年度を1.1%上回り、史上最高となる見込み。なお、世界の輸出量の4割を占める。

同「Rice Outlook」(2022.8.16)によると、2021/22年度のコメ輸出量は、豊富な供給量と価格競争力から、特にバングラデシュ、ベトナム向けの輸出増加により前月から0.3百万トン上方修正され、21.8百万トンと、過去最高の見込み。

USDAによると2022/23年度の期末在庫量は、期首在庫量及び生産量の下方修正に伴い、前月予測から3.7百万トン下方修正され、対前年度比2.7%減の35.5百万トンとなる見込み。

同「Grain: World Markets and Trade」(2022.8.12)によれば、インド産米(碎米5%混入)の8月の価格は、355ドル/トンに上昇したものの、依然としてアジアの主要輸出国の中で最も低い価格となっている(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位:百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	124.4	129.7	128.5 (131.0)	▲ 2.0	▲ 0.9
消費量	101.1	108.4	107.5 (109.0)	-	▲ 0.8
輸出量	20.2	21.8	22.0 (19.7)	-	1.1
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	37.0	36.5	35.5 (39.2)	▲ 3.7	▲ 2.7
期末在庫率	30.5%	28.0%	27.4% (30.5%)	▲ 2.9	▲ 0.6

(参考)

収穫面積(百万ha)	45.77	47.00	46.00 (46.75)	▲ 1.00	▲ 2.1
単収(もみt/ha)	4.08	4.14	4.19 (2.80)	0.02	1.2

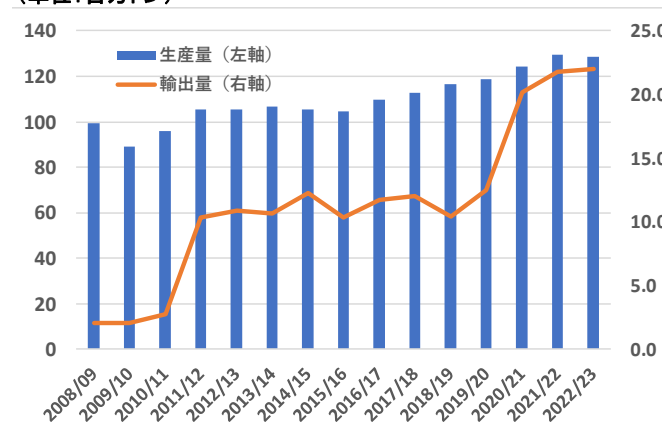
資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(12 August 2022)

IGC「Grain Market Report」(21 July 2022) (単収は精米t/ha)

図: インドのコメ生産量と輸出量の推移

(単位:百万トン)



資料: USDA「PS&D」(2022.8.12)をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 2022 年上半期の輸入量はインド産砕米を中心に対前年同期比 4 割増

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度をわずかに上回って 149.0 百万トンと、史上最高の見込み。

国家糧油情報センター（2022.8.5）によると、7 月末、全国の早稲の収穫は基本的に終了した。また、今年の早稲の作付面積は着実に増加し、豊作が期待される。二期作晩稲の播種は順調に進んでおり、7 月末現在、播種率は 8 割近くで、苗の状態も良好である。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」（2022.8.16）によると、東部地域の大部分で豪雨があり、一部で洪水等があったものの、土壌水分は良好となった。一方、南部で高温・乾燥となっており、生育への影響が懸念されている。

なお、報道によると、南部の干ばつに関し、中国政府は 24 日の常務会議で 100 億元（日本円でおおよそ 2000 億円）の対策を決定した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 0.2%増の 156.6 百万トンと、史上最高の見込み。

2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 1.7%増の 6.0 百万トンと史上最高の見込み。とうもろこしなど飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の砕米をインドやパキスタン等から引き続き輸入している。

中国海関統計によれば、2022 年上半期（1～6 月）の輸入量は、対前年同期の 2.5 百万トンから約 41%増加し、3.6 百万トンとなった。輸入先はインドが 1.2 百万トンと最も多く、次いでパキスタンが 0.9 百万トンとなっている。

USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、需要量が供給量を上回ることから、対前年度比 3.5%減の 109.0 百万トンとなる見込み。なお、世界の期末在庫量のうち、中国が 6 割弱を占める見通し。

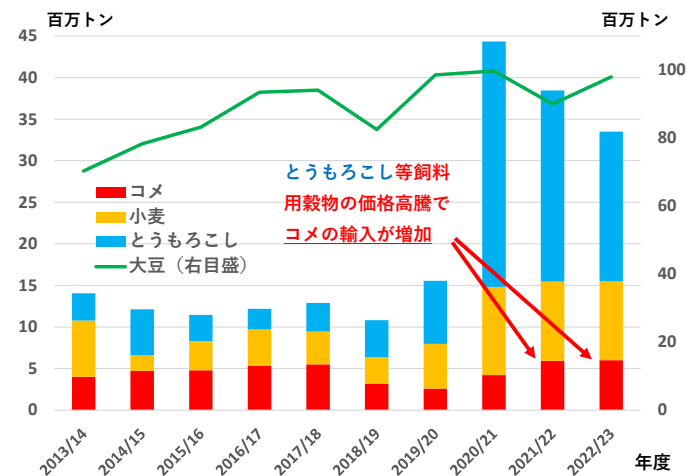
コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ（粳）米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは 3 割程度

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年 7 月～23年 6 月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	148.3	149.0	149.0 (149.0)	-	0.0	
消 費 量	150.3	156.3	156.6 (153.4)	-	0.2	
輸 出 量	2.2	2.1	2.4 (2.4)	-	14.3	
輸 入 量	4.2	5.9	6.0 (5.0)	-	1.7	
期末在庫量	116.5	113.0	109.0 (105.6)	-	▲ 3.5	
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.6% (67.8%)	-	▲ 2.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00 (30.03)	-	0.3	
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.10 (4.96)	-	▲ 0.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 July 2022) (単収は精米t/ha)

図： 中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022. 8. 12)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 2022 年上半期の輸出量が対前年同期比 6 割増

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 0.8%増の 19.8 百万トンの見込み。

2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対 2020/21 年度比 4.2%増の 19.7 百万トンの見込み。

USDA 「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.8.23) によると、全土でモンスーンによる降雨が続いており、雨季米の生育のための土壌水分量は十分と見られる。また、乾季作に向けて灌漑用水の補給となった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、対前年度比 4.2%増の 7.5 百万トンの見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、特にイラク向け輸出の増加により、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、対前年度比 18.8%増の 7.2 百万トンと、タイ政府が設定している 7 百万トン超の輸出目標を達成した。

タイ米輸出業者協会によれば、2022 年上半期（1～6 月）の輸出量は、対前年同期の 2.2 百万トンから約 59%増加し、3.5 百万トンとなった。輸出先はイラクが 0.7 百万トン（対前年度比 5.3 倍）、米国が 0.4 百万トン（対前年度比 1.6 倍）、南アフリカが 0.3 百万トン（対前年度比 1.1 倍）、中国が 0.3 百万トン（対前年度比 1.9 倍）。

USDA 「Rice Outlook」(2022.8.16) によれば、8 月 9 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、乾季作米の新穀の供給継続と雨季作早稲の出回りにより、7 月 5 日までの週の価格から 12 ドル下落し、416 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。



写真：タイ中部ナコンパトム県の圃場
(8 月 6 日撮影)

コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位：百万精米トン)

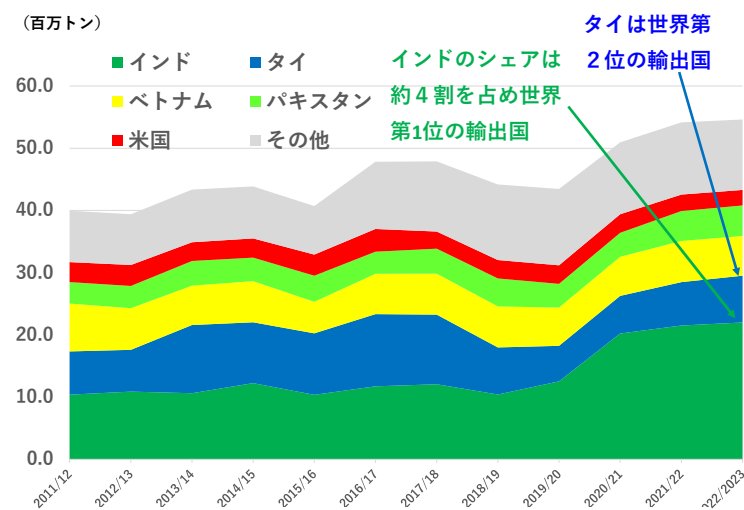
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値、()はIGC			
生 産 量	18.9	19.7	19.8	(20.0)	-	0.8
消 費 量	12.7	13.0	13.1	(12.3)	-	0.8
輸 出 量	6.1	7.2	7.5	(8.0)	-	4.2
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	(0.3)	-	-
期末在庫量	4.3	3.9	3.3	(6.9)	▲ 0.2	▲ 15.3
期末在庫率	22.8%	19.5%	16.2%	(34.3%)	▲ 1.0	▲ 3.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.51	10.59	10.70	(10.70)	-	1.0
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.80	(1.87)	-	▲ 0.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 July 2022) (単収は精米t/ha)

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2022. 8. 12) をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 2021/22 年度の冬春作が低温等により減産

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が 6.01 トン/ヘクタールと過去最高になることから、対前年度比 1.2%増の 27.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の実産量は、単収・収穫面積ともわずかに減少見込みであること、低温や高収益作物（野菜等）への転作等により冬春作の収穫が減少したことから、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、対 2020/21 年度比 1.1%減の 27.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 3.0%減の 6.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対 2020/21 年度比 4.8%増の 6.6 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022 年上半期（1～6 月）の輸出量は 3.5 百万トンで、上位からフィリピン（1.6 百万トン）、中国（0.4 百万トン）、コートジボワール（0.3 百万トン）となっている。うちジャポニカ米は 0.1 百万トン。

USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 33.3%減の 0.8 百万トンの見込み。

なお 2021/22 年度の実産量は、生産量の下方修正に加え、インドからの砕米輸入が増加する見込みから、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され 1.2 百万トンの見込み。

USDA 「Rice Outlook」（2022.8.16）によれば、ベトナム産米（長粒種、5 %砕米混入）の 8 月 9 日までの週の価格は、フィリピンからの引き合いが弱く、7 月 12 日までの週の価格から 15 ドル/トン下落して 395 ドル/トンとなった。

写真：ベトナム北部ハノイ市の圃場
（8 月 7 日撮影）



コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

（単位：百万精米トン）

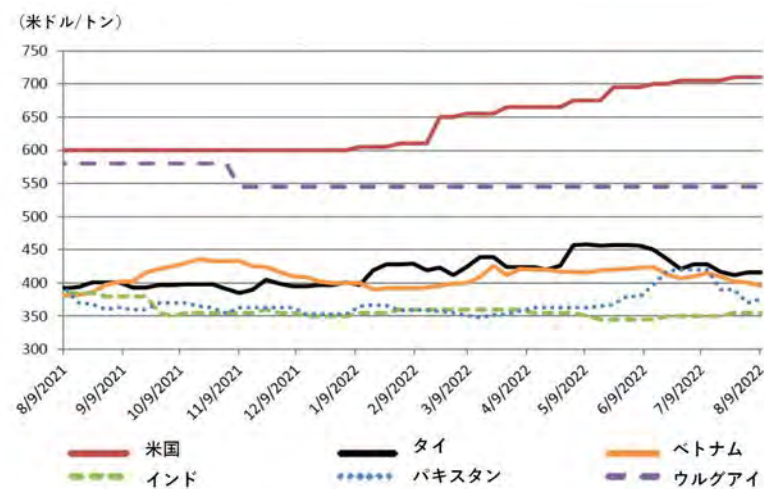
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.4	27.1	27.4 (28.9)	-	1.2	
消 費 量	21.5	21.5	21.7 (23.4)	-	0.9	
輸 出 量	6.3	6.6	6.4 (6.5)	-	▲ 3.0	
輸 入 量	1.8	1.2	0.8 (0.9)	-	▲ 33.3	
期末在庫量	2.6	2.8	2.9 (3.0)	▲ 0.2	3.6	
期末在庫率	9.5%	10.0%	10.4% (10.0%)	▲ 0.6	0.4	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.29	7.29 (7.28)	-	-
単収(もみt/ha)	6.00	5.95	6.01 (3.98)	-	1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 August 2022)
IGC 「Grain Market Report」 (21 July 2022) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」 (2022.8.12) より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU 等で下方修正も、中国、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

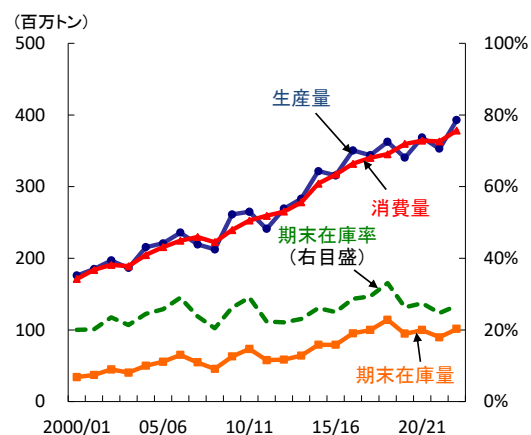
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU 等で下方修正も、ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・アルゼンチン等で下方修正も、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」(2022. 8. 12)をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

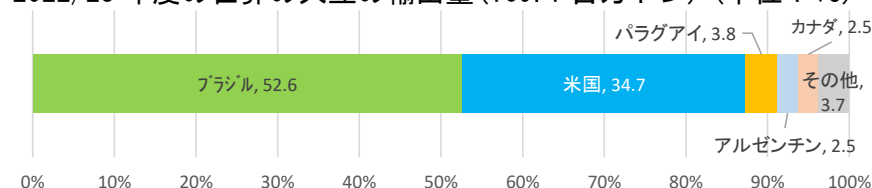
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	368.4	352.7	392.8	1.4	11.4
消 費 量	364.0	363.0	378.3	0.5	4.2
うち搾油用	315.4	313.8	327.8	0.6	4.5
輸 出 量	164.7	153.3	169.1	0.2	10.3
輸 入 量	165.5	153.4	166.2	0.1	8.4
期末在庫量	99.9	89.7	101.4	1.8	13.0
期末在庫率	27.4%	24.7%	26.8%	0.4	2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 August 2022)

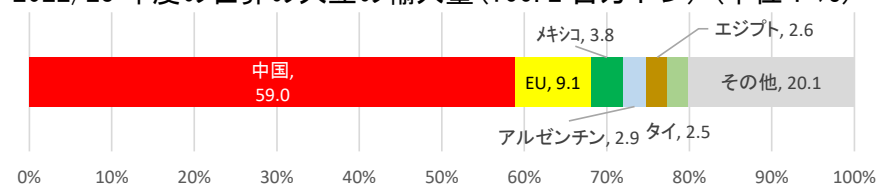
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (392.8 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (169.1 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (166.2 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 単収の上方修正により、生産量は史上最高、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測から0.7百万トン上方修正され、対前年度比2.1%増の123.3百万トンと史上最高の見通し。8月の初回の現地調査で収穫面積は下方修正されたものの、イリノイ州やミネソタ州等で単収が大幅に増加することと等から単収が上方修正されたことが要因。なお、収穫面積は、前月予測より下方修正されたものの、肥料価格高騰によるとうもろこしからの作付けのシフトを背景に前年度より増加している。

USDA「Crop Progress」(2022.8.22)によれば、主要18州における着莢進捗率は84%と、前年度同期(87%)及び過去5年平均(86%)より遅れている。作柄評価は良からやや良が57%と前年度同期(56%)を上回っている。南部の州では7月を通じた高温により遅れていた生育が進展したが、生産量上位4州(アイオワ、イリノイ、インディアナ、ミネソタ)では、過去の平均より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からほとんど変更なく、前年度より2.1%増の64.5百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の上方修正に伴い前月予測から0.5百万トン上方修正されたものの、前年度より0.2%減の58.7百万トンの見込み。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～8月8日)は、23.6百万トンであり、内訳は中国(9.4百万トン)、メキシコ(3.0百万トン)、エジプト(2.4百万トン)、ドイツ(1.3百万トン)、日本(1.3百万トン)の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、生産量の上方修正と前年度の輸出量の下方修正により、前月予測から0.4百万トン上方修正され、前年度より8.6%増の6.7百万トンの見込み。なお、期末在庫率は5.4%で、前年度を上回るものの、依然として低水準の見込み。

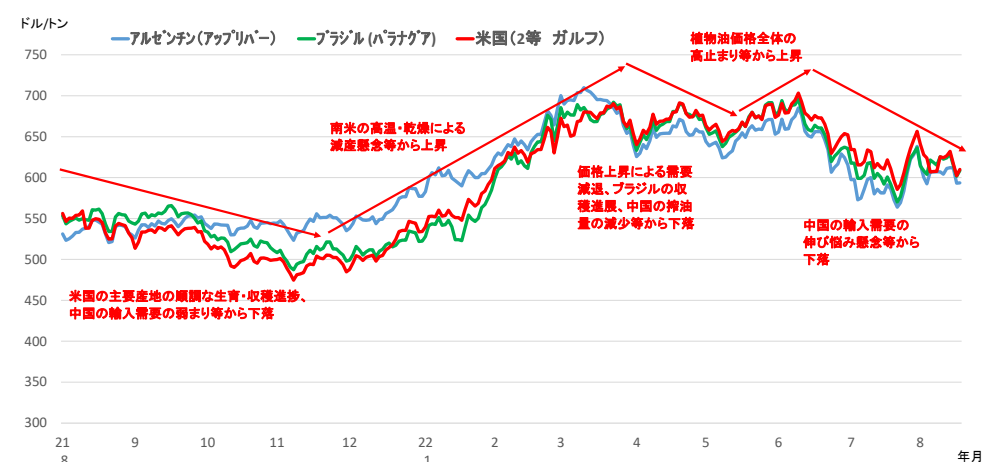
大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	114.8	120.7	123.3	0.7	2.1
消 費 量	60.9	63.2	64.5	0.0	2.1
うち搾油用	58.3	60.0	61.1	-	1.8
輸 出 量	61.7	58.8	58.7	0.5	▲ 0.2
輸 入 量	0.5	0.4	0.4	-	-
期末在庫量	7.0	6.1	6.7	0.4	8.6
期末在庫率	5.7%	5.0%	5.4%	0.3	0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.94	35.29	▲ 0.12	1.0
単収(t/ha)	3.43	3.45	3.49	0.03	1.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格(F0B)の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 2021/22 年度は高温・乾燥の影響で減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降に作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、前年度より 18.3%増の 149.0 百万トンと史上最高の見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告(2022.8.11)によれば、2021/22 年度の生産量は、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受け、2020/21 年度より 10.2%減の 124.0 百万トンの見込み。収穫作業は 6 月に終了している。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、旺盛な搾油用需要により前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、前年度より 0.7%増の 53.6 百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22 年度の消費量は、旺盛な搾油用需要により前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、2020/21 年度より 6.8%増の 53.3 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 11.3%増の 89.0 百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22 年度の輸出量は、輸出ペースの減速により前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、2020/21 年度より 2.0%減の 80.0 百万トンの見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～7 月の輸出量は 60.5 百万トンで、前年同期(66.2 百万トン)に比べ 8.6%減となっている。内訳は、1 位が中国 40.4 百万トン、2 位がスペイン 2.7 百万トン、3 位がタイ 1.8 百万トンとなっている。なお、7 月の輸出量は 7.5 百万トンで前年同月(8.7 百万トン)と比べ、13.3%減となっている。

大豆ーブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	126.0	149.0 (143.0)	－	18.3	
消 費 量	49.9	53.3	53.6 (51.0)	0.8	0.7	
うち搾油用	46.7	50.0	50.3 (48.2)	0.8	0.5	
輸 出 量	81.7	80.0	89.0 (88.8)	－	11.3	
輸 入 量	1.0	0.6	0.8 (0.2)	－	36.4	
期末在庫量	29.4	22.7	29.9 (5.6)	▲ 0.5	31.5	
期末在庫率	22.4%	17.0%	20.9% (4.0%)	▲ 0.5	3.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	39.20	41.00	42.00 (41.70)	－	2.4	
単収(t/ha)	3.56	3.07	3.55 (3.43)	－	15.6	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 July 2022)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2021/22年度	2021年												2022年									
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1	2	3	4	5	6	7	8		
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等						作付 4.5(百万ha)						収穫 25.0(百万t)								収穫夏冬計 114.7百万t	
冬とうもろこし	作付面積夏冬計 21.6百万ha												作付 17.0(百万ha)				収穫 89.7(百万t)					
大豆	マツト・グロッソ州、パラナ州等						作付 41.0(百万ha)						大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし播種								収穫 124.0(百万t)	

資料：CONAB穀物レポート(2022.8.11)

＜ アルゼンチン ＞ 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDAによれば、本年11月以降作付けが開始される2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より15.9%増の51.0百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22年度の実産量は、生育期の高温・乾燥の影響で、2020/21年度より4.8%減の44.0百万トンの見込み。

6月末までに2021/22年度の実産量はほぼ終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より1.0%増の48.3百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、増産が見込まれる米国産との輸出競争により前月予測から0.4百万トン下方修正されたものの、生産量の増加に伴い、前年度より1.9倍の4.3百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～6月の輸出量は52.2万トンで、前年同期（188.1万トン）より72.3%減。内訳は、1位が中国33.4万トン、2位が米国4.1万トン、3位がチリ2.4万トンとなっている。

アルゼンチンは、丸大豆より搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定。さらに、2022年3月19日付けアルゼンチン農牧漁業省プレスリリースによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げ、大豆と横並びの33%に変更した。

大豆ーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	46.2	44.0	51.0 (48.0)	－	15.9	
消 費 量	47.4	47.8	48.3 (48.1)	－	1.0	
うち搾油用	40.2	40.6	41.0 (42.1)	－	1.1	
輸 出 量	5.2	2.3	4.3 (4.6)	▲ 0.4	91.1	
輸 入 量	4.8	3.4	4.8 (4.8)	－	41.2	
期末在庫量	25.1	22.5	25.7 (2.6)	0.8	14.5	
期末在庫率	47.6%	44.9%	48.9% (4.8%)	1.8	4.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	16.00	17.00 (16.65)	－	6.3	
単収(t/ha)	2.81	2.75	3.00 (2.88)	－	9.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(12 August 2022)

IGC「Grain Market Report」(21 July 2022)

写真：北部サンタフェ州の大豆の保管風景 (7月31日撮影)

大豆の収穫中に貯蔵施設の容量に達したため、サイロバッグ
(貯蔵容量250トン、長さ75メートル)を多く並べ、一時保管。



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測から収穫面積が上方修正されたことから0.9百万トン上方修正され、政府の補助金による大豆生産奨励策で収穫面積が増加したことから、前年度より12.2%増の18.4百万トンの見込み。

国家糧油情報センター（2022.8.5）によれば、8月の中国東北地区の降水量は前年同期より多く、大豆の作柄は前年並みまたはやや良好となっている。遼寧省西部、内モンゴル自治区東南部、吉林省南西部等の干ばつが発生しやすい地区や丘陵地帯の作柄も好転している。ただ、吉林省中西部、遼寧省北部等では降雨過多により、一部の農地は浸水被害に見舞われ、影響が懸念される。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国内大豆粕需要の回復による搾油用消費量の増加から、前年度より8.3%増の115.6百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より8.9%増の98.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～6月の輸入量は46.3百万トンと、前年同期比で5.4%減。内訳は、ブラジル産27.7百万トン（60%）、米国産17.6百万トン（38%）。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年6月号」によると、6月は、農家の大豆在庫が底を突いているものの、国内消費もオフシーズンに入っていたため、国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月から横ばいの6,500元/トンとなったが、依然として高水準で推移している。主産地における農家の在庫は底を打ち、今後、新穀大豆が市場に出荷されるまで、国内価格は高値を維持するとみられる。6月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、5,500元/トンと前月（5,400元/トン）から上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

大豆－中国

（単位：百万トン）

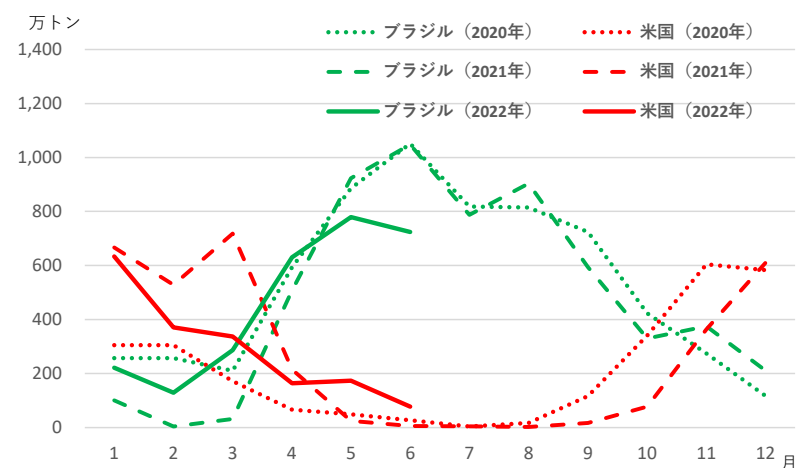
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.6	16.4	18.4	(19.5)	0.9	12.2
消 費 量	112.7	106.7	115.6	(114.3)	-	8.3
うち搾油用	93.0	87.0	95.0	(95.6)	-	9.2
輸 出 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	-
輸 入 量	99.8	90.0	98.0	(96.8)	-	8.9
期末在庫量	31.2	30.7	31.5	(31.9)	0.9	2.3
期末在庫率	27.6%	28.8%	27.2%	(27.8%)	0.8	▲ 1.6

(参考)

収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	9.35	(9.90)	0.45	11.3
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97	(1.97)	-	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 July 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積・単収の減少により減産も、輸出量は増加見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少から、前年度より4.3%減の6.0百万トンの見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.8.16)によれば、主産地のカナダ南東部では、8月上旬に降雨があったものの、再び乾燥天候が戻り、生育・充実には土壌水分が必要。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.8.22)によれば、2022/23年度の生産量は、マニトバ州などカナダ西部での作付面積の減少の一方、前年度から回復する過去5年平均単収を前提とすれば、前年度より1.2%増の6.4百万トンの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より5.2%減の2.3百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.4%増の4.3百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2021/22年度(2021年8月～2022年7月)のうち、2021年8月～2022年6月の輸出量は281.2万トンで、国別では、イラン(53.7万トン)、イタリア(39.2万トン)、バングラデシュ(26.2万トン)、オランダ(22.6万トン)、中国(22.2万トン)の順。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.4	6.3	6.0 (6.4)	－	▲ 4.3
消費量	2.7	2.4	2.3 (2.4)	－	▲ 5.2
うち搾油用	1.6	1.9	1.8 (1.9)	－	▲ 5.4
輸出量	4.5	4.2	4.3 (4.3)	－	2.4
輸入量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	－	▲ 2.0
期末在庫量	0.3	0.4	0.3 (0.5)	－	▲ 28.0
期末在庫率	4.1%	6.4%	4.7% (7.5%)	－	▲ 1.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.10 (2.13)	－	▲ 1.4
単収(t/ha)	3.12	2.94	2.86 (2.98)	－	▲ 2.7

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 August 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(22 August 2022)

写真：カナダ平原部マニトバ州の大豆の生育風景 (8月12日撮影)



(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.040469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃=(° F-32)÷1.8			

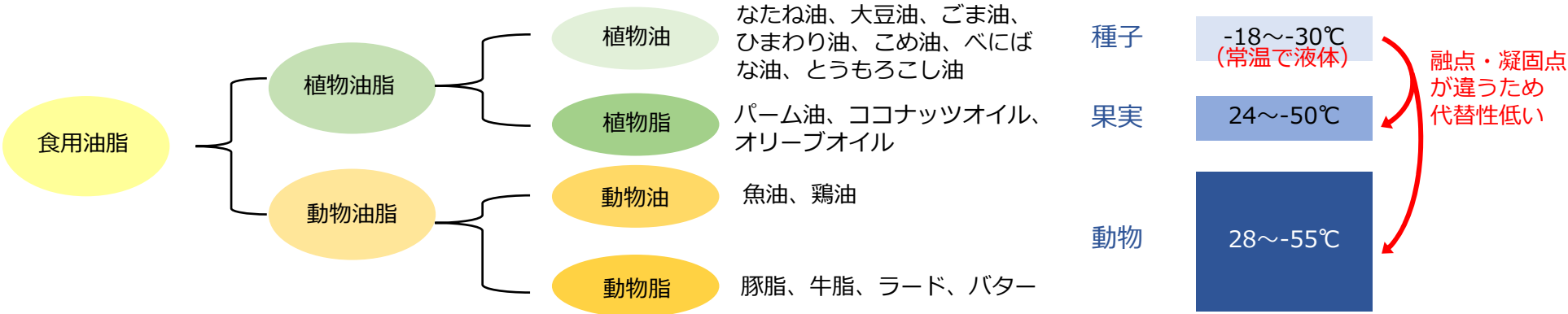
第14号特別分析トピック：我が国と世界の油脂をめぐる動向

基礎編・国内編

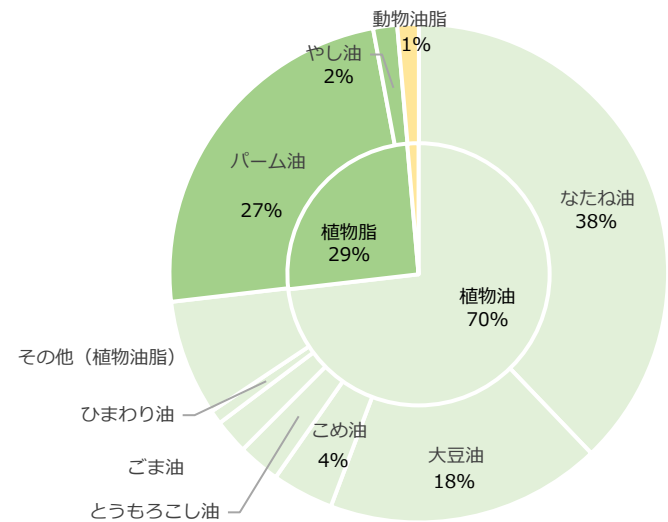
食用油脂の種類、油脂原料の分類

- 食用油脂は植物由来と動物由来に大別され、油脂原料（農産物）は特に油分を多く含む植物が選抜・利用されており、形態別に見ると植物の種子、果肉、副産物に分類される。

■ 油脂の種類



我が国の油脂供給量（2021年）



資料：農林水産省「油糧生産実績調査」、財務省「貿易統計」。

注：パーム油はパーム殻油を含む。その他（植物油脂）については一部植物脂も含むが、大部分が植物油なため、便宜的に植物油に含めている。

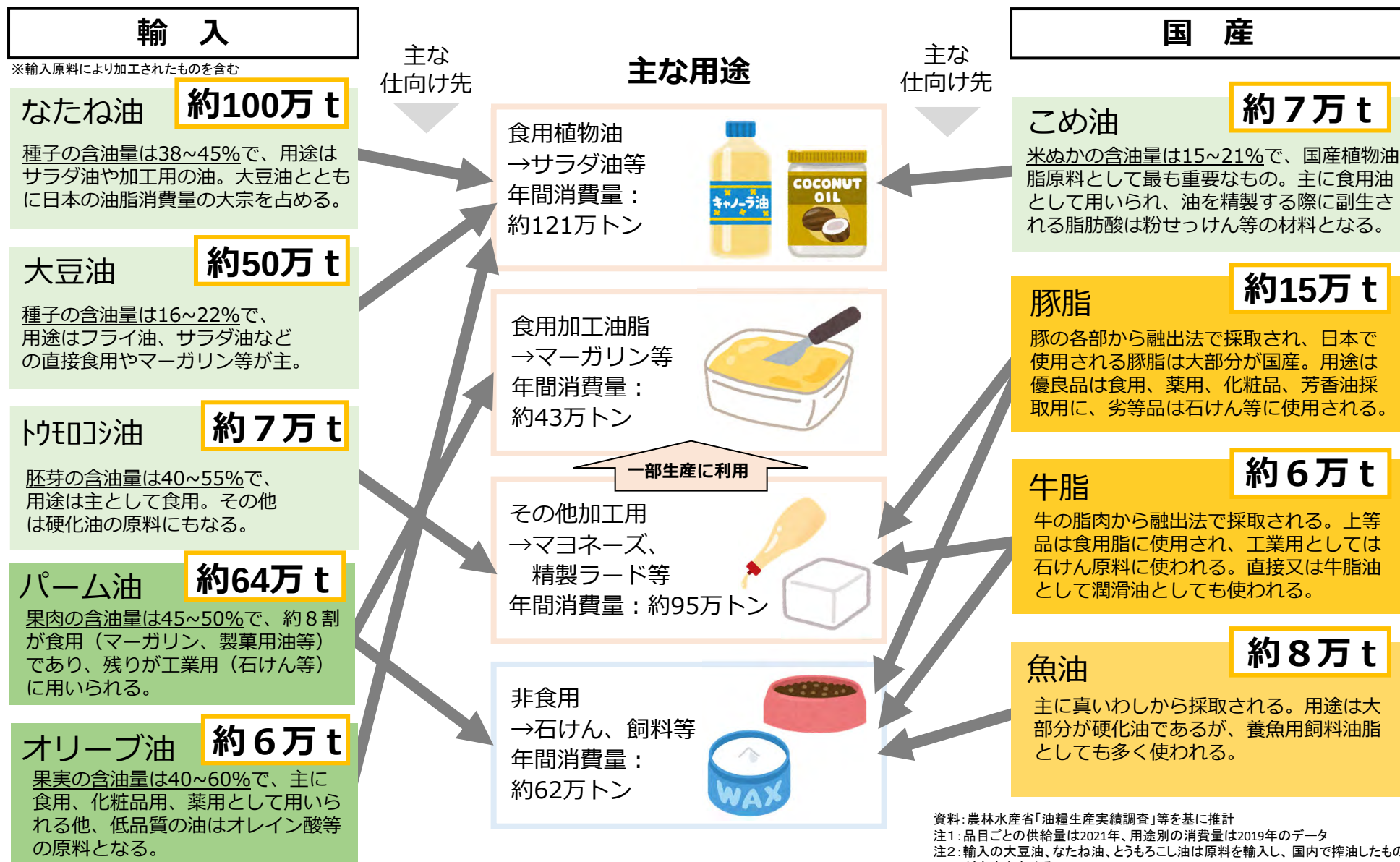
表 1：植物油原料の形態による分類

資料：日本植物油協会のHPより引用

分類	説明	主な原料名
植物の種子	代表的な植物油の原料。植物の種子で油分を多く含むもので、油糧種子と呼ばれる。通常の条件で保管しても変質が少ないため、種子の形状で国際的に流通する。	大豆、なたね（キャノーラ）、ひまわりの種、綿実、落花生、ごま、サフラワー（ベに花）、パーム核（パームの種の部分）、ひまの実、あまに、オリーブの種（ボマース）、椿の実、茶の実、エゴマ、やし（コブラ）、ブドウの種
果肉	植物の果実の果肉の部分に多くの油分を含むもの。果肉は腐敗するため輸送には適していないので、油の形状で国際的に流通する。	パーム（油やし）、オリーブ、ココナッツ
副産物	主産物から分離された副産物で、油分を多く含むもの。変質が早く進むので、発生後できるだけ早く集荷し、搾油される。	米ぬか（玄米を精米した副産物）、とうもろこし胚芽、小麦の胚芽

油脂の種類と用途

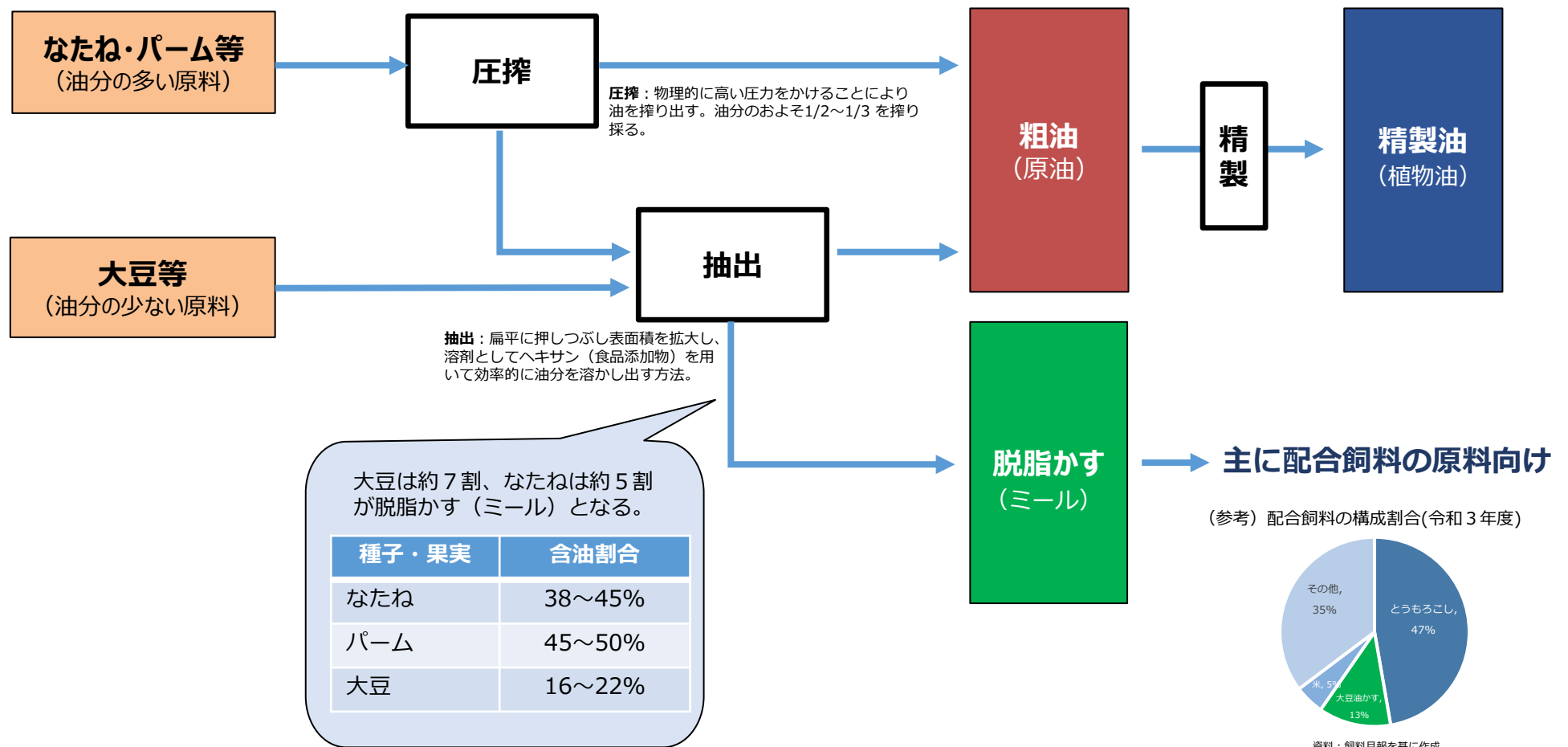
- 油脂は常温で液状のものを油、固体のものを脂と呼び、植物由来から動物由来まで様々な種類が存在するが、融点・凝固点といった物理的性質や脂肪酸組成の違い等によって用途が異なる



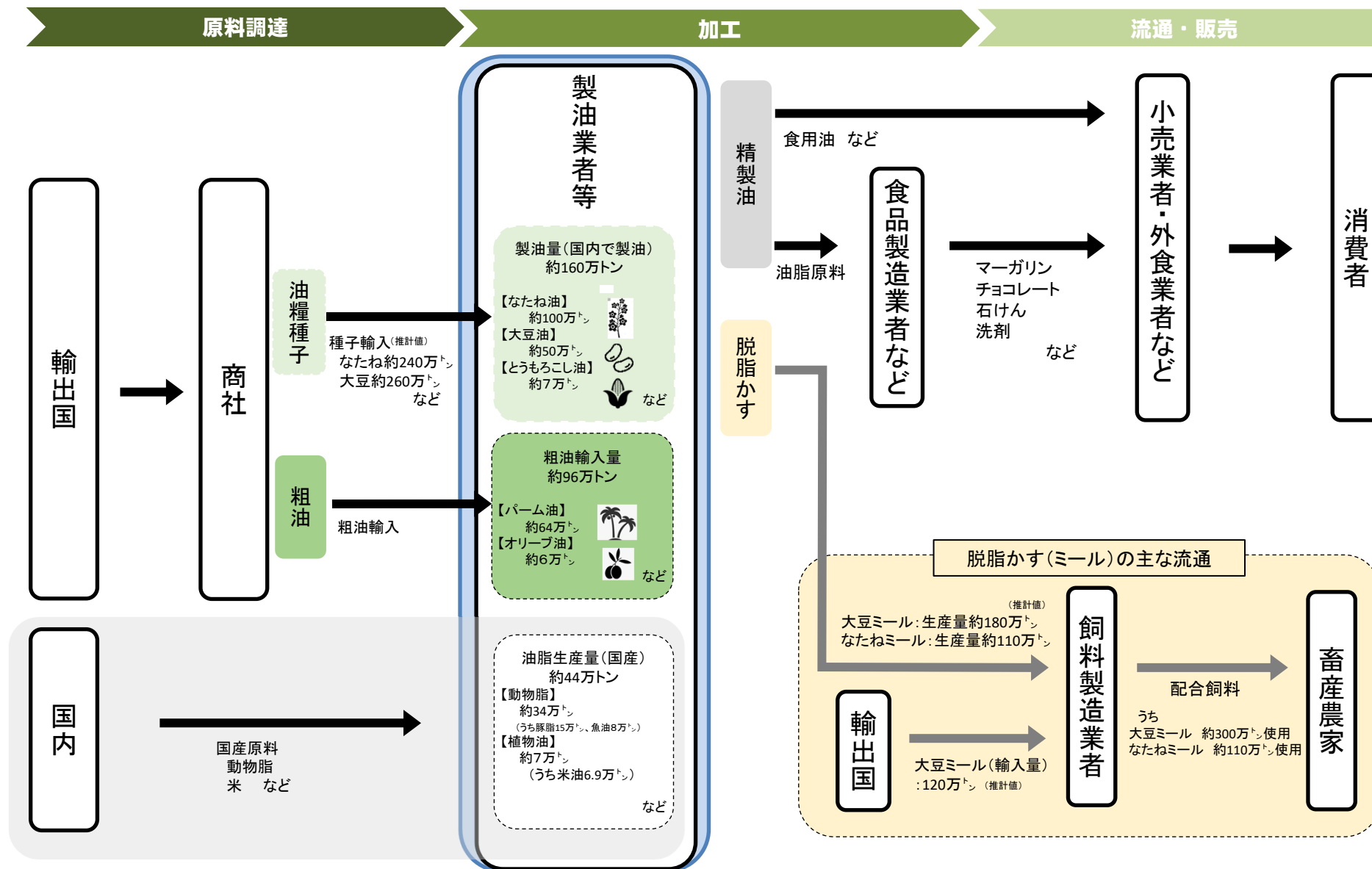
植物油脂の製造工程

- 植物油は、含有する油分の量に応じて、製造工程が異なる。含油量の多い、なたね・パーム等は圧搾工程（物理的に圧力を掛けて、油を絞り出す工程）を経る一方で、大豆等の油分が少ないものについては、圧搾工程を経ずに抽出工程（扁平に押しつぶした上で、溶剤（ヘキサン）を用いて油分を溶かし出す工程）を行う形が一般的。
- 抽出工程の中で生成される脱脂粕（ミール）は、大豆の場合、粗蛋白質が44%~48%と高く、またアミノ酸バランスにも優れているため、主に配合飼料の副原料として活用される。

【主な製造工程】



油糧種子・油脂の流通構造



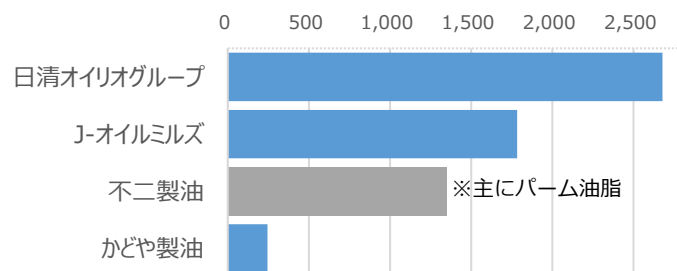
資料: 農林水産省「油糧生産実績調査」、「飼料月報<速報版>」、財務省「貿易統計」、(財)油脂工業会館「世界の油脂原料事情」を基に作成・推計。フロー図における数値は2021年の数値。

注: なたね・大豆及び各々のミールの輸入量は、製油や配合飼料向けに使用される分の輸入数量の推計値を参考として示したもの。なたね油、大豆油の製油向けの油糧種子輸入量は、なたね・大豆油生産量から、含油率の中央値(なたね41.5%、大豆19%)を各々除して推計(十万ト未満四捨五入)。大豆ミールの生産量は、大豆輸入量にミール割合70%(推計値)を掛けて推計(十万ト未満四捨五入)。大豆ミールの輸入量は、配合飼料の大豆ミール使用量約300万ト(十万ト未満四捨五入)から、大豆ミール生産量(推計値)を控除して推計。なたねミール生産量はなたねミール使用量と同一として推計(十万ト未満四捨五入)。

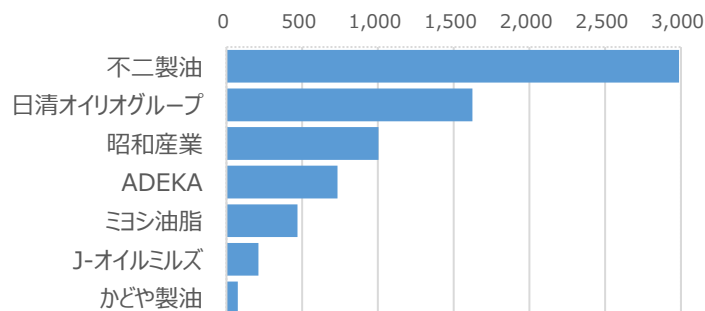
我が国の製油業界の動向

- 食用油（パーム油除く）については、日清オイリオグループとJ-オイルミルズの2社が大手。2000年代の業界再編により大手2社に集約されている。
- 油脂加工品では、チョコレート等の油脂加工品を手掛ける不二製油が最大手。

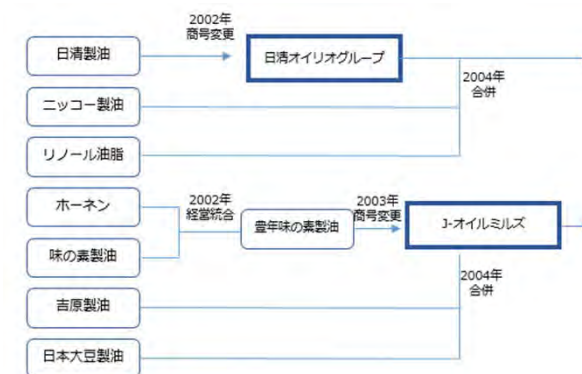
油脂事業の売上高



油脂加工事業の売上高



食用油の大手2社のM&A推移



■ 製油業界各社 (油脂事業の売上高順) (単位: 億円)

社名	売上計	油脂事業の売上高順			油脂に含めた事業	油脂加工品に含めた事業
		油脂	油脂加工品	その他		
日清オイリオグループ	4,328	2,678	1,624	26	「油脂・油糧事業」：ホームユース（食用油）、業務用食用油、加工用油脂、油粕	「加工油脂事業」：パーム加工品、チョコレート用油脂、マーガリン、ショートニング。「加工食品・素材事業」：チョコレート関連製品、ホームユース（ドレッシング）、ウェルネス食品、MCT、レシチン、トコフェロール、食品大豆、大豆たん白、豆腐類。「ファインケミカル事業」：化粧品・トイレタリー原料、化学品、植物性工業油、洗剤、殺菌洗浄剤、界面活性剤
J-オイルミルズ	2,016	1,784	211	21	「油脂事業」主に家庭用油脂・業務用油脂・ミール	「スペシャルティフード事業」：油脂加工品・テクスチャーデザイン・ファイン
不二製油	4,338	1,350	2,989	0	「植物性油脂事業」：パーム油及びパーム核油等を基礎原料とした食用加工油脂、食用油及びチョコレート用油脂等	「業務用チョコレート事業」：チョコレート、コンパウンド及びココア製品。「乳化・発酵素材事業」：クリーム、マーガリン及びフィリング等。「大豆加工素材事業」：豆たん白素材、大豆たん白食品及び水溶性大豆多糖類等。
かどや製油	322	245	76	1	「ごま油事業」：家庭用及び業務用のごま油やごま油の副生成物である脱脂ごま等	「食品ごま事業」：家庭用及び業務用のいりごまやねりごま等
昭和産業	2,876	1,004		1,872	「油脂食品事業」：業務用および家庭用の食用油・ブレミックス・パスタ、冷凍生地、冷凍食品、ギフトセット、石けん、大豆蛋白、脱脂大豆、菜種粕、米粕等。 ※「その他」は主に製粉事業、糖質事業、飼料事業。	
ADEKA	3,630	0	733	2,897	—	「食品事業」：マーガリン類、ショートニング、フィリング類 ※「その他」は主に化学品事業、ライフサイエンス事業
ミヨシ油脂	475	0	470	5	—	「食品事業」：マーガリン、ショートニング、ラード、粉末油脂、ホイップクリーム、その他食用加工油脂、「油化事業」：脂肪酸、グリセリン、工業用石鹸、その他工業用油脂、繊維用処理剤、消泡剤、香粧品原料、重金属捕集剤、重金属固定剤、その他各種界面活性剤

資料：各社の有価証券報告書を基に農林水産省作成。注：各社、直近の通期決算期の連結決算数値。セグメント別売上高は外部顧客への売上高。昭和産業は小麦粉加工品も含むが便宜的に「油脂食品事業」を「油脂加工品」と分類した。

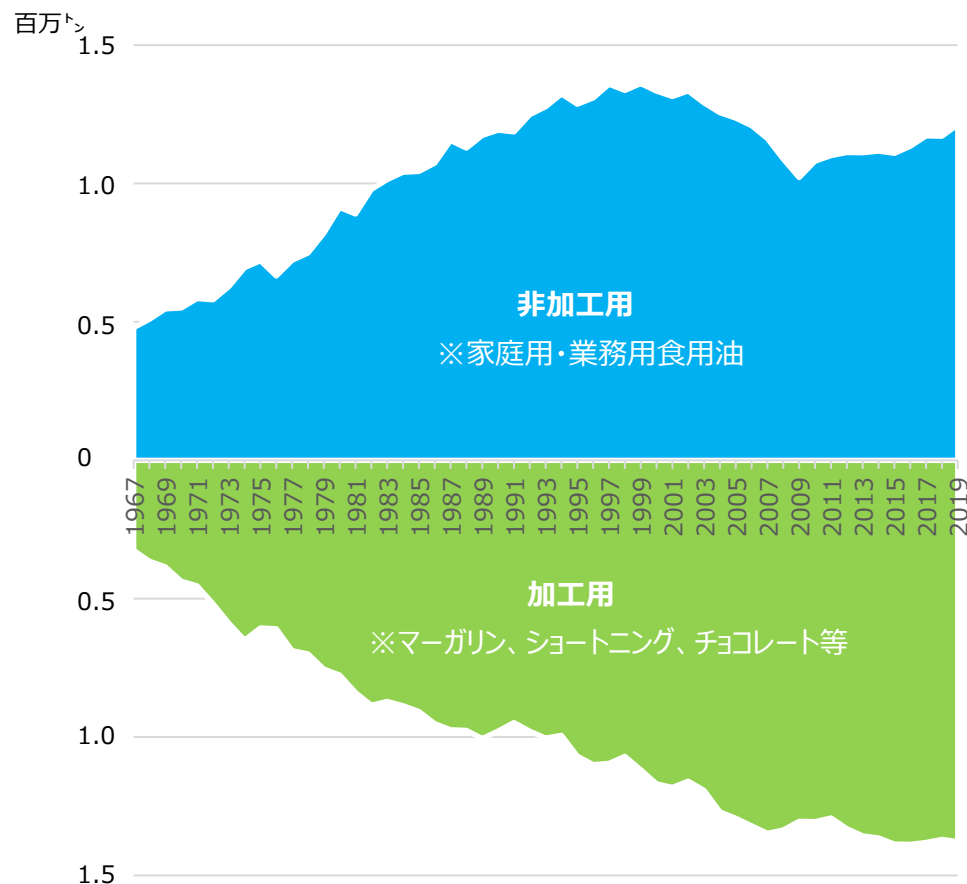
注：昭和産業は便宜的に油脂加工事業に含めた

我が国の食用油脂の種類別消費量及び価格推移

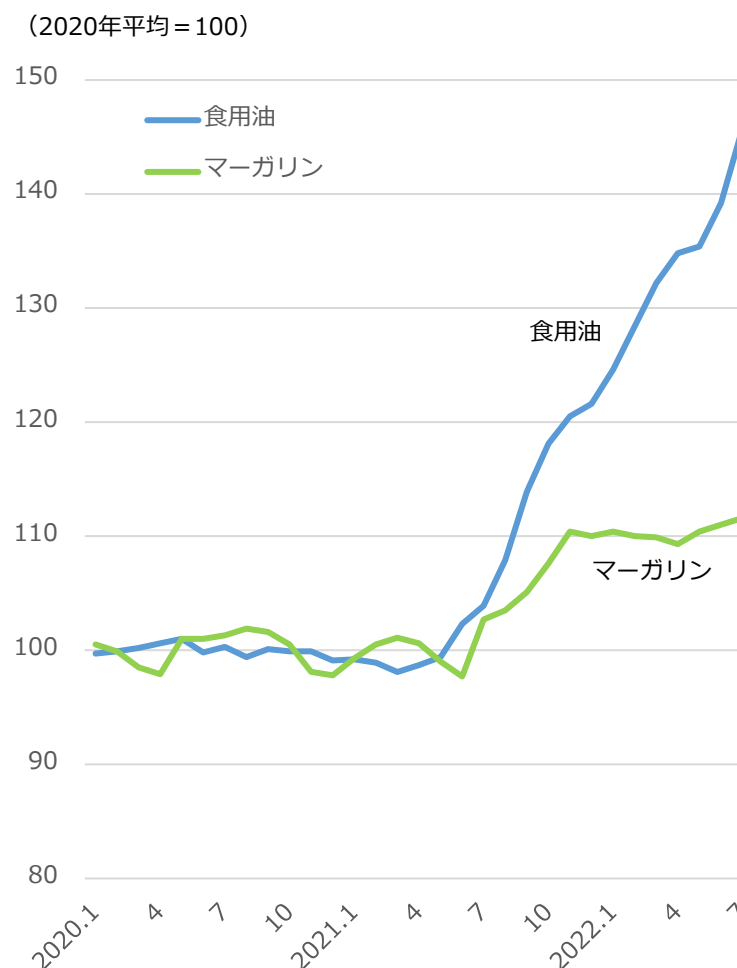
- 食用油脂の消費量は食生活の変化等に伴い、1960年代と比較して、足下では2倍以上の消費量となっている。
- 食用油の消費者物価指数は、原材料価格の高騰^{注1}等に伴い上昇している。

注1：原材料の国際価格については、P14,P15「国際価格（大豆）」、「国際価格（なたね、パーム）」を参照。

食用油脂の年次別消費量



食用油脂の消費者物価指数



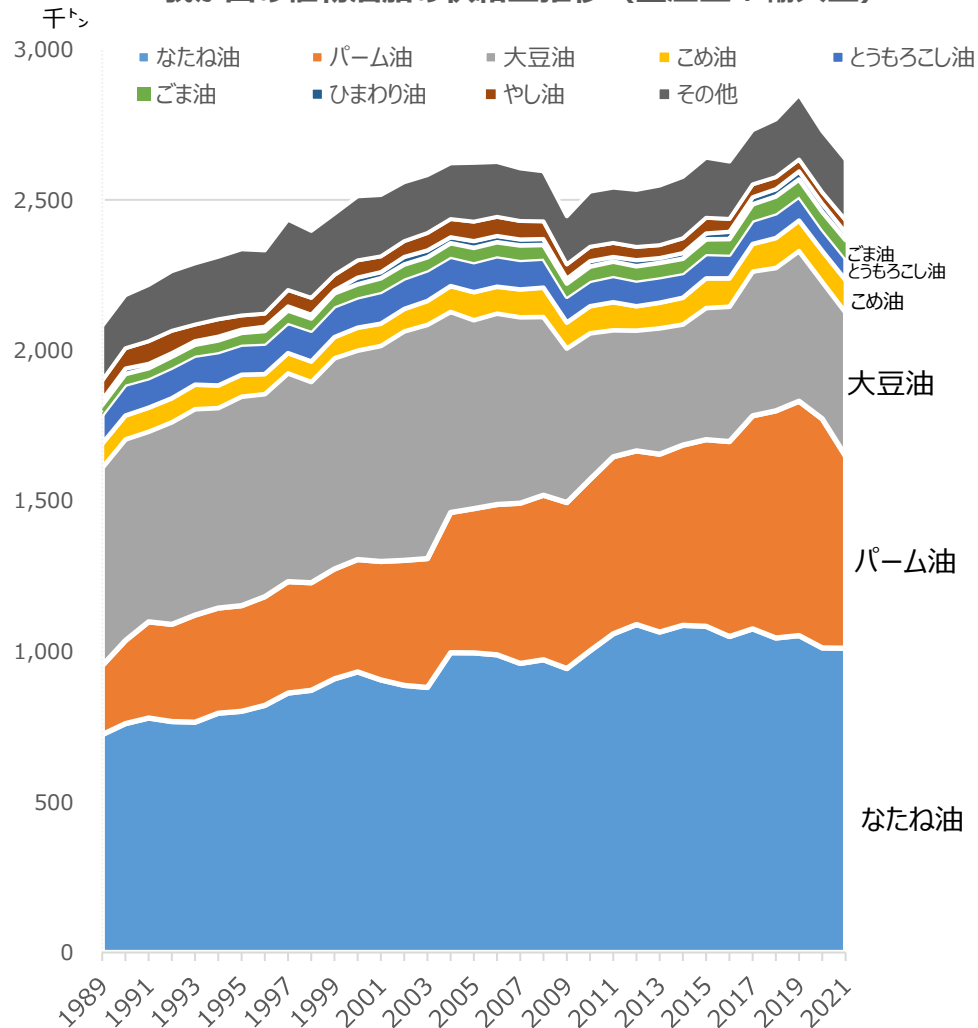
資料：農林水産省「油糧生産実績調査」等を基に推計（2019年以降はN/A）

資料：総務省「消費者物価指数」

我が国の植物油脂供給量

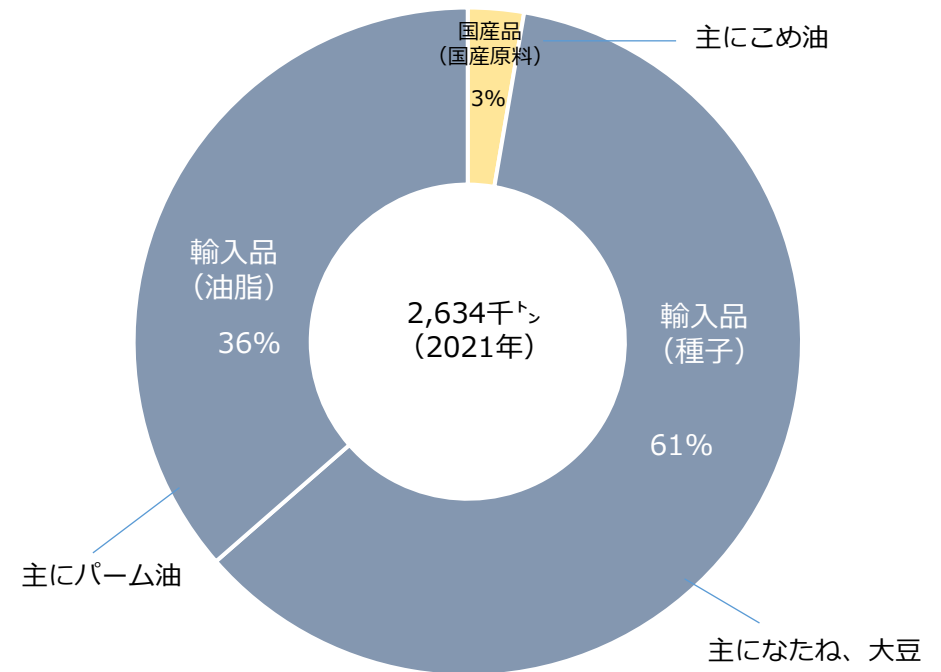
- なたね油、パーム油、大豆油で植物油脂供給量の概ね8割以上を占める。
- 総供給量は緩やかな増加傾向。なお、2009年の落ち込みは、リーマン・ショック後の消費減退等が影響しており、また、2021年の落ち込みは、新型コロナウイルス拡大に伴う外食向け需要の減少等が影響。
- 油種別には、大豆油が2003年以降は減少したものの、なたね油、パーム油は増加傾向。
- なたね、大豆は原料を輸入し、国内で搾油している一方、パームは粗油を輸入しているケースが大宗を占める。

我が国の植物油脂の供給量推移（生産量＋輸入量）



資料：農林水産省「油糧生産実績調査」、財務省「貿易統計」、S&P Global Trade Atlas。

我が国の植物油脂供給量（内訳）

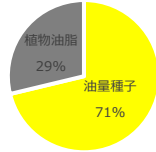


資料：農林水産省「油糧生産実績調査」、財務省「貿易統計」。

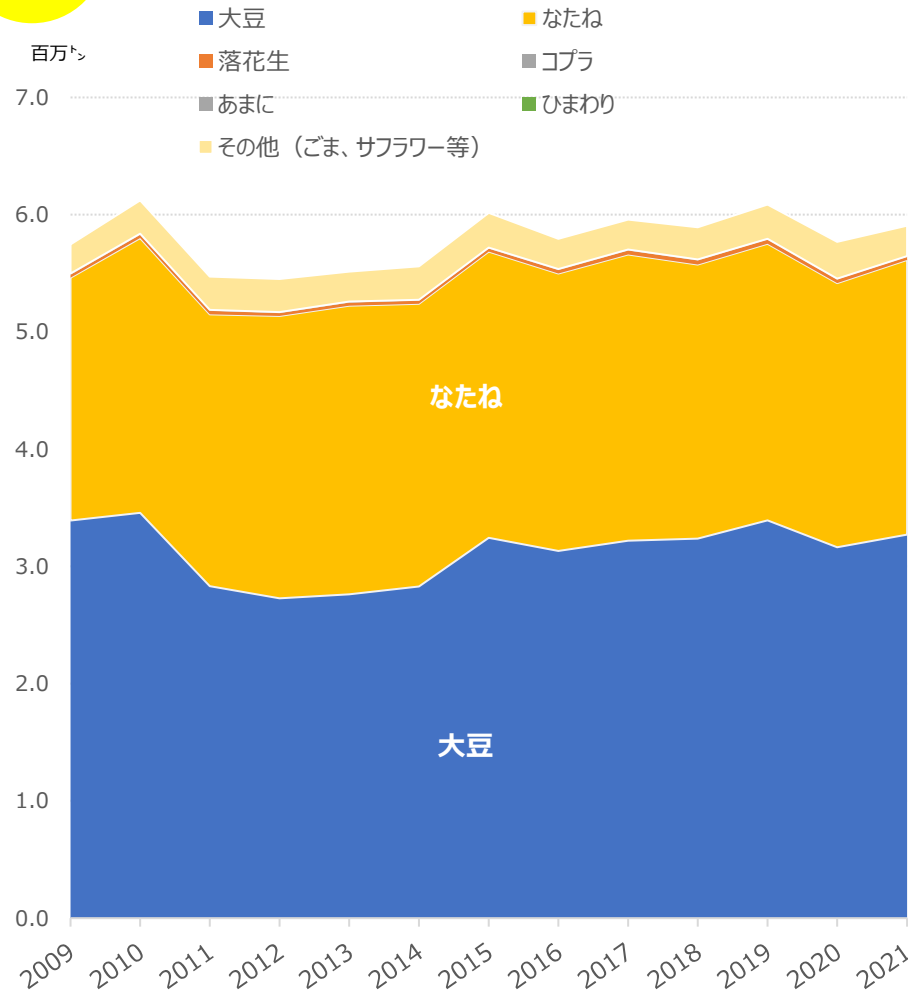
我が国の油糧種子の輸入量の推移

- 油糧種子の輸入については、大豆、なたねが大部分を占める。
- なたねについては、カナダから9割以上を輸入、大豆については米国、ブラジルから8割以上を輸入している。

輸入割合（油換算ベース）

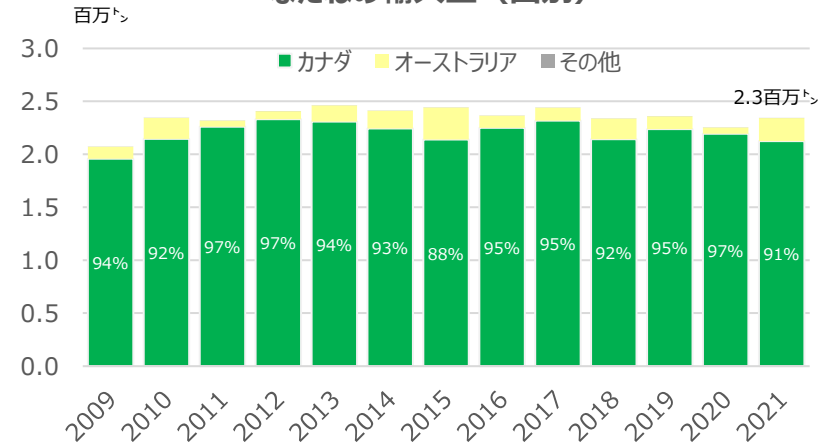


我が国の油糧種子の輸入数量の推移



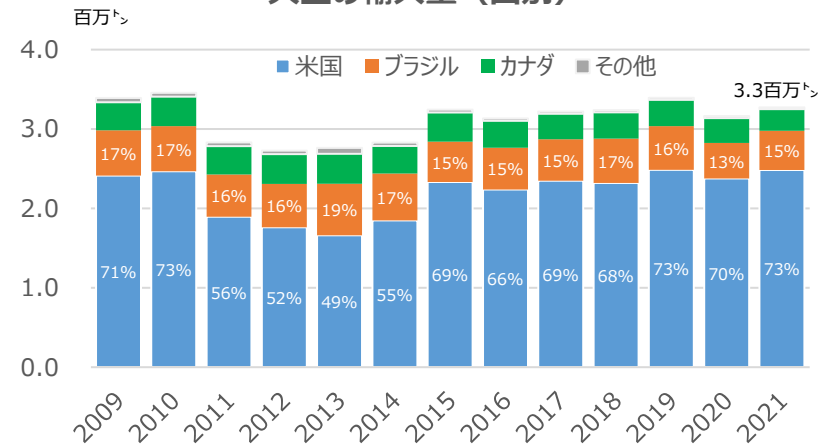
資料：財務省「貿易統計」、S&P Global Trade Atlas

なたねの輸入量（国別）



資料：財務省「貿易統計」、S&P Global Trade Atlas

大豆の輸入量（国別）

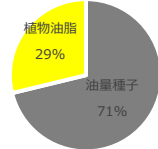


資料：財務省「貿易統計」、S&P Global Trade Atlas

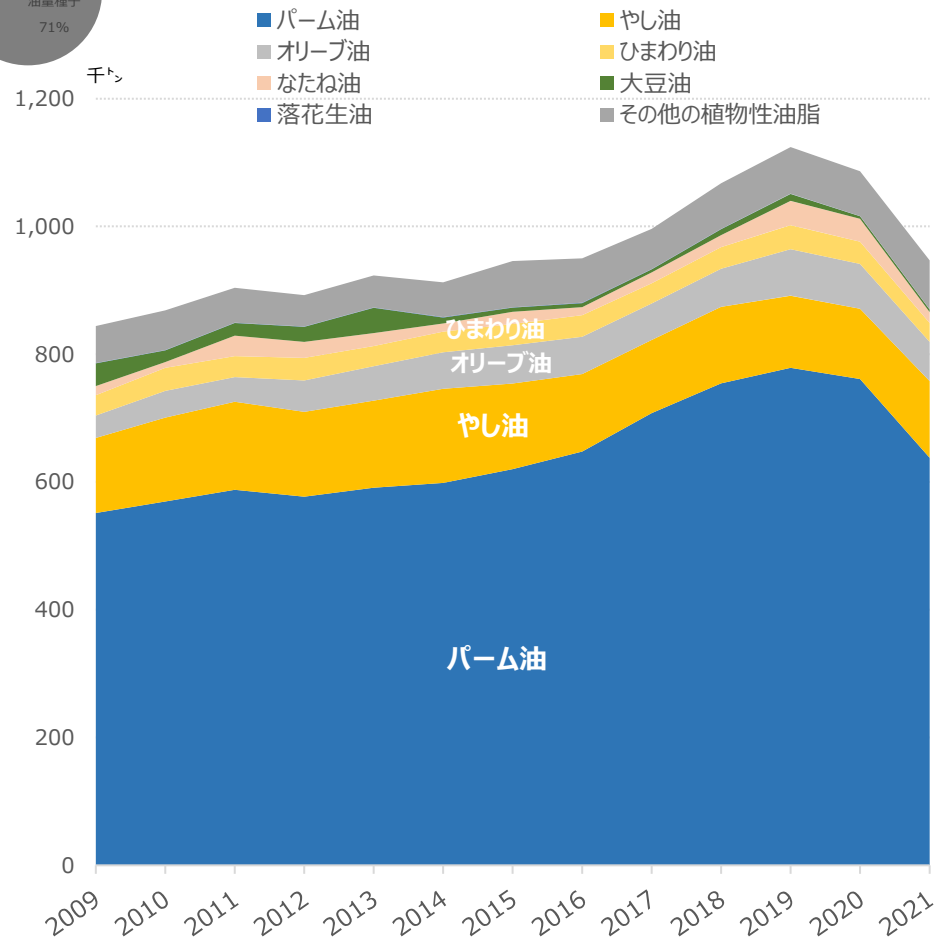
我が国の植物油脂（主に粗油）の輸入量の推移

- 我が国に油（主に粗油）として輸入される油脂は、パーム油、やし油等の果実を原料としたものが主体。
- パーム油は、主にマレーシア、インドネシアから輸入している（両国からの輸入で概ね100%）。近年は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴うマレーシアでの労働力不足、インドネシアの輸出規制等による価格高騰もあり、輸入数量が減少している。

輸入割合（油換算ベース）

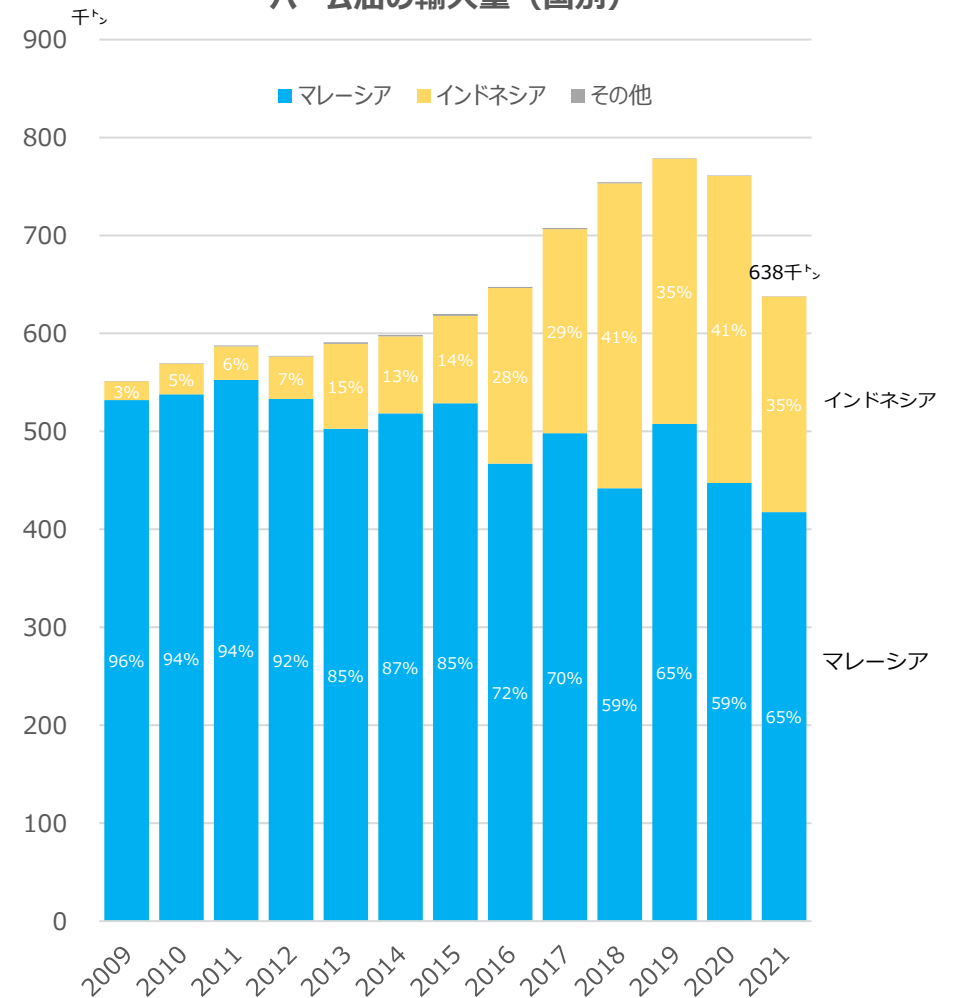


我が国の植物油脂の輸入数量の推移



資料：財務省「貿易統計」、S&P Global Trade Atlas。
HSコード1507～1515を抽出。

パーム油の輸入量（国別）

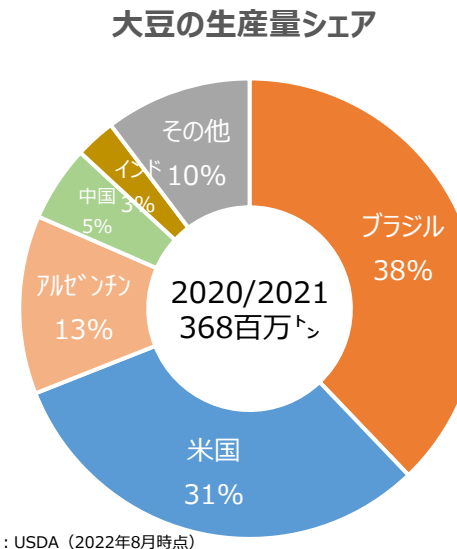
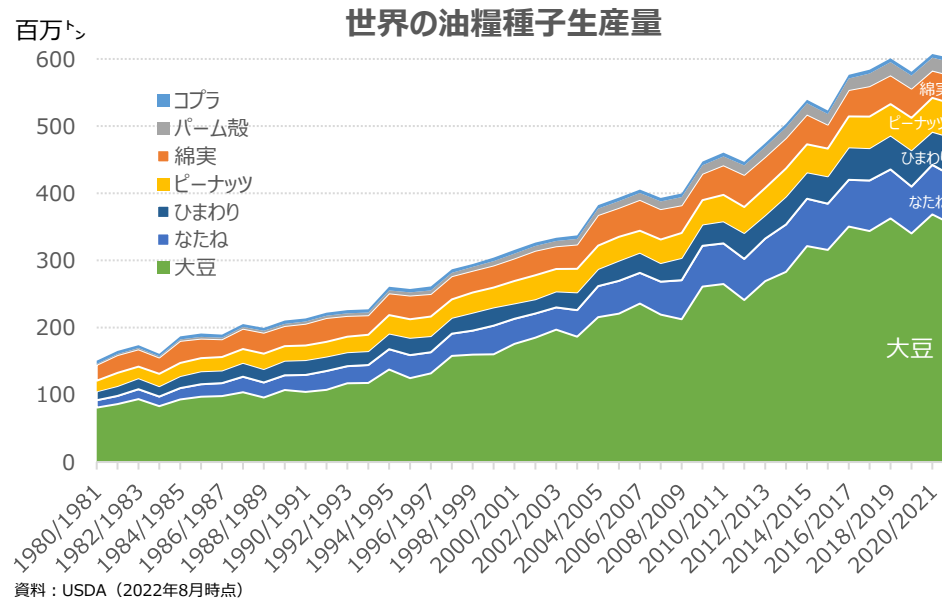


資料：財務省「貿易統計」、S&P Global Trade Atlas。

国際編

油糧種子の生産量

- 主な油糧種子生産量約6億トンの内、大豆が過半以上を占める。貿易量（輸出量）については、大豆が8割以上を占める。
- 大豆の生産量シェアはブラジル、米国で約7割、なたねは、カナダ、EU、中国、インドで約8割を占める。

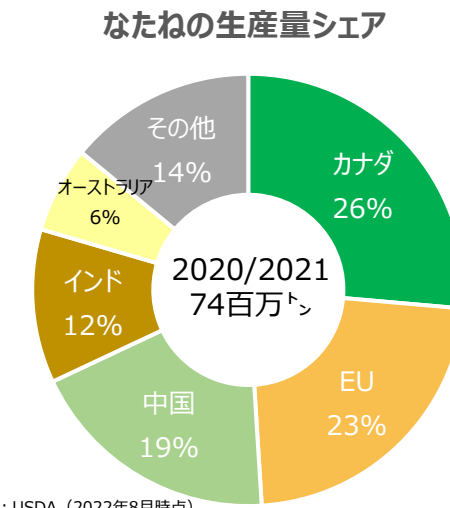


生産量と貿易量の割合（油糧種子）

(単位：百万トン)

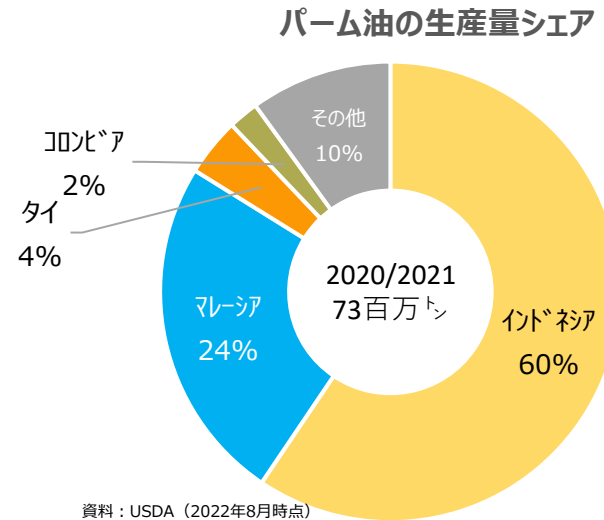
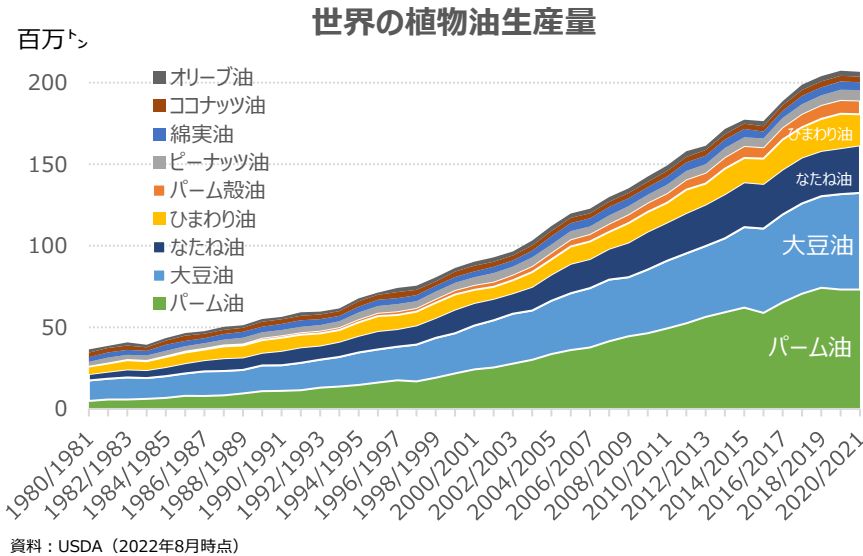
2020/2021	生産量	割合	輸出量	割合
大豆	368	61%	165	86%
なたね	74	12%	18	9%
ピーナッツ	50	8%	5	3%
ひまわり	49	8%	3	2%
綿実	41	7%	1	1%
パーム殻	19	3%	0.1	0%
コブラ	6	1%	0.1	0%
上記合計	607	100%	192	100%

資料：USDA（2022年8月時点）



植物油の生産量

- 主な植物油の生産量約2億トン強の内、パーム油、大豆油が過半以上を占める。
- パーム油の生産量シェアはインドネシア、マレーシアで約8割以上、大豆油は、消費国でもある中国、米国、ブラジルで6割以上を占める。



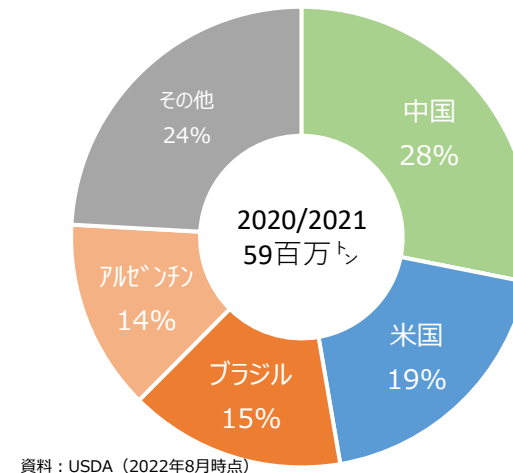
生産量と貿易量の割合（植物油）

（単位：百万トン）

2020/2021	生産量	割合	輸出量	割合
パーム油	73	35%	48	56%
大豆油	59	29%	13	15%
なたね油	29	14%	6	8%
ひまわり油	19	9%	11	13%
パーム殻油	8	4%	3	4%
ピーナッツ油	6	3%	0.5	1%
綿実油	5	2%	0.1	0%
ココナッツ油	3	2%	2	2%
オリーブ油	3	1%	1	2%
上記合計	207	100%	85	100%

資料：USDA（2022年8月時点）

大豆油の生産量シェア

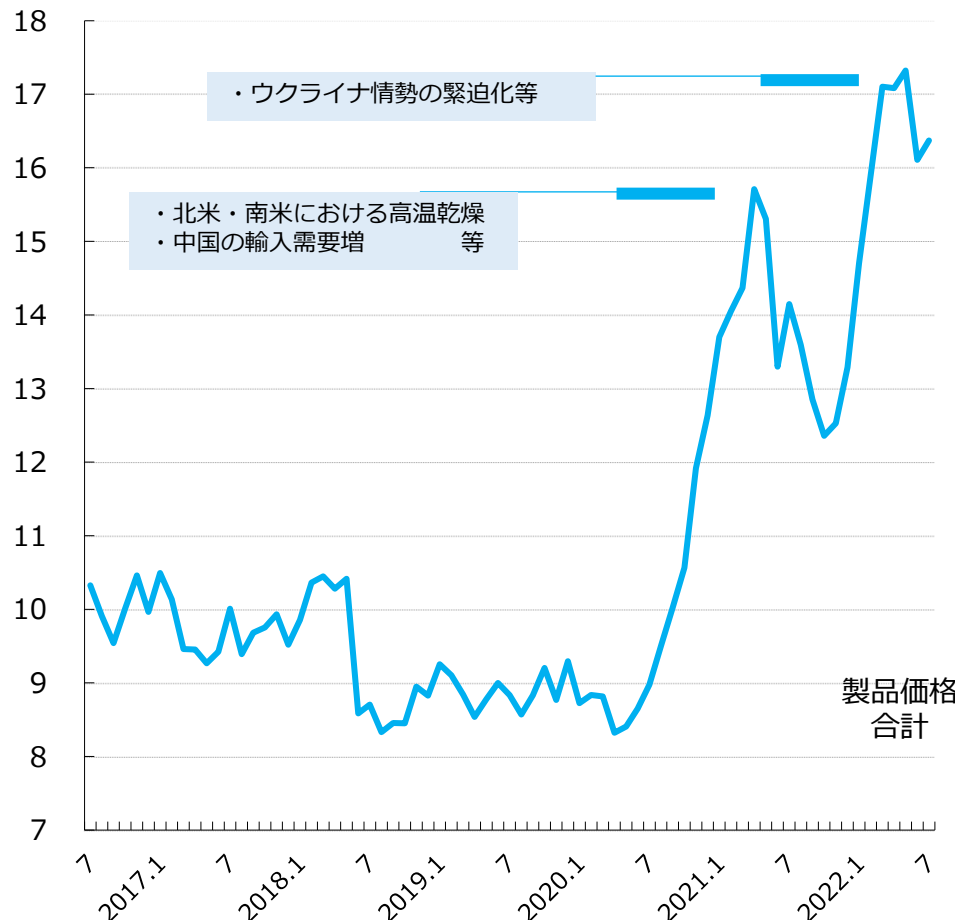


国際価格（大豆）

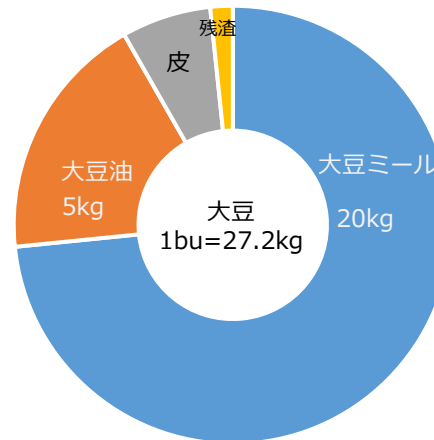
- 大豆の国際価格は世界の需給状況に応じて変動。世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 大豆圧搾時の主な生成物は、大豆ミール（油かす）と大豆油。大豆ミールは配合飼料において蛋白原料とアミノ酸を提供する副原料の代表格として欠かせない飼料原料。一般的に、製品価格（大豆油＋大豆ミール）の合計と大豆価格の差額を「搾油マージン」と言い、その増減に応じて、搾油業者が生産量を判断。搾油マージンの変動に伴い大豆需要が増減する側面もあり。

(ドル/ブッシェル)

大豆価格の推移



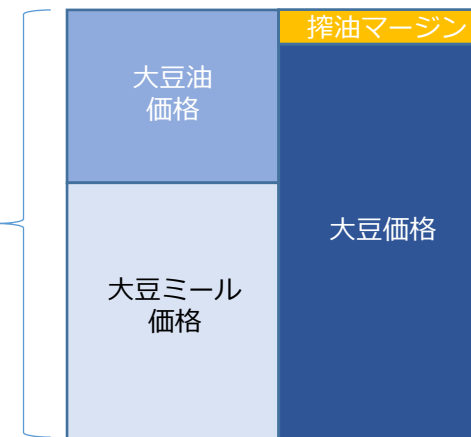
大豆圧搾時の生成物



資料：東京証券取引所の資料を基に農林水産省が作成

←大豆を圧搾して得られる生成物の約75%は大豆ミール。約20%前後は大豆油。

搾油マージンによる大豆需要増減



←40セント/buが損益分岐点と言われている。

搾油マージンの増加 ⇒ 大豆需要の増加
" 減少 ⇒ "

注：2016年7月～2022年7月までの各月最終週末の期近価格（セツルメント）である。

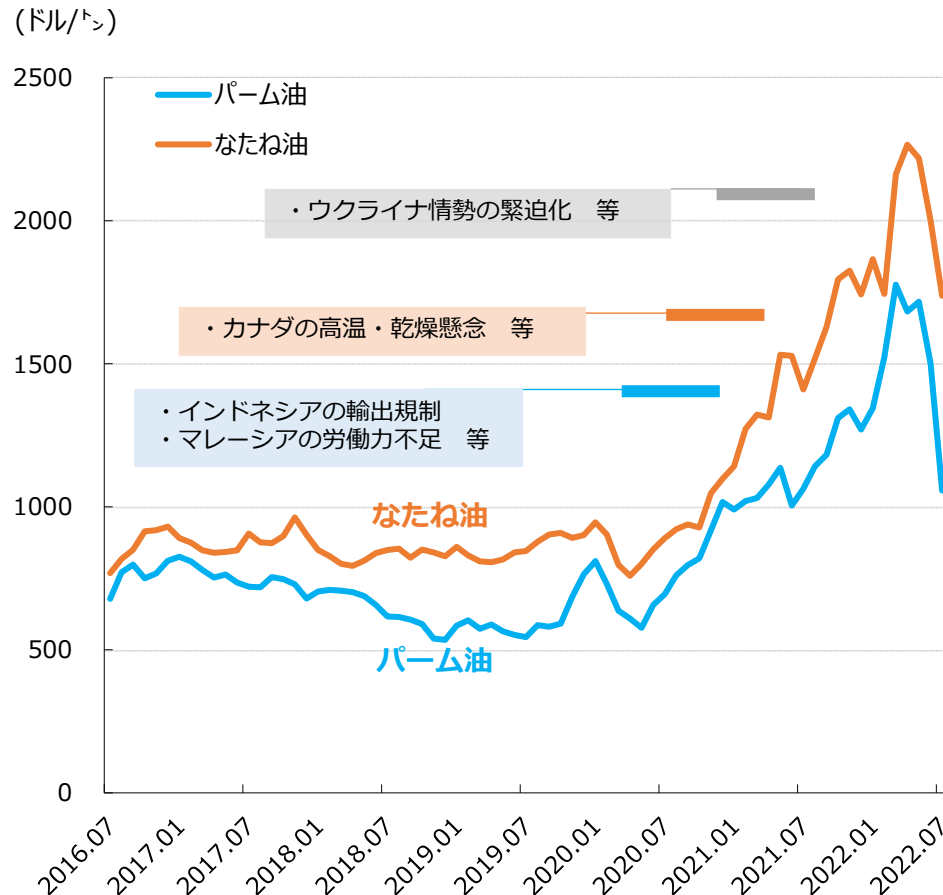
資料：CBOT

資料：東京証券取引所の資料を基に農林水産省が作成

国際価格（なたね、パーム）

- 油脂価格（なたね・パーム）については、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の緊迫化等の影響を受けている。
- なたねについては、カナダが世界最大の生産・輸出国であり、当該国の生産動向等の影響が大きい。2021年のカナダの記録的な不作時においては、なたね油価格が大幅に上昇。足下では、カナダの生産回復等により価格は一定程度下落しつつある。
- パーム油については、インドネシア、マレーシアが二大生産国・輸出国であり、当該国の影響が大きい。近年は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴うマレーシアでの労働力不足、インドネシアの輸出規制等が価格に大きく影響を与えた。

なたね油、パーム油の国際価格推移



資料：World Bank Commodity Price Data (2022.8)より作成。2016年7月～2022年7月までの月次の価格。

インドネシアのパーム油輸出規制の動向

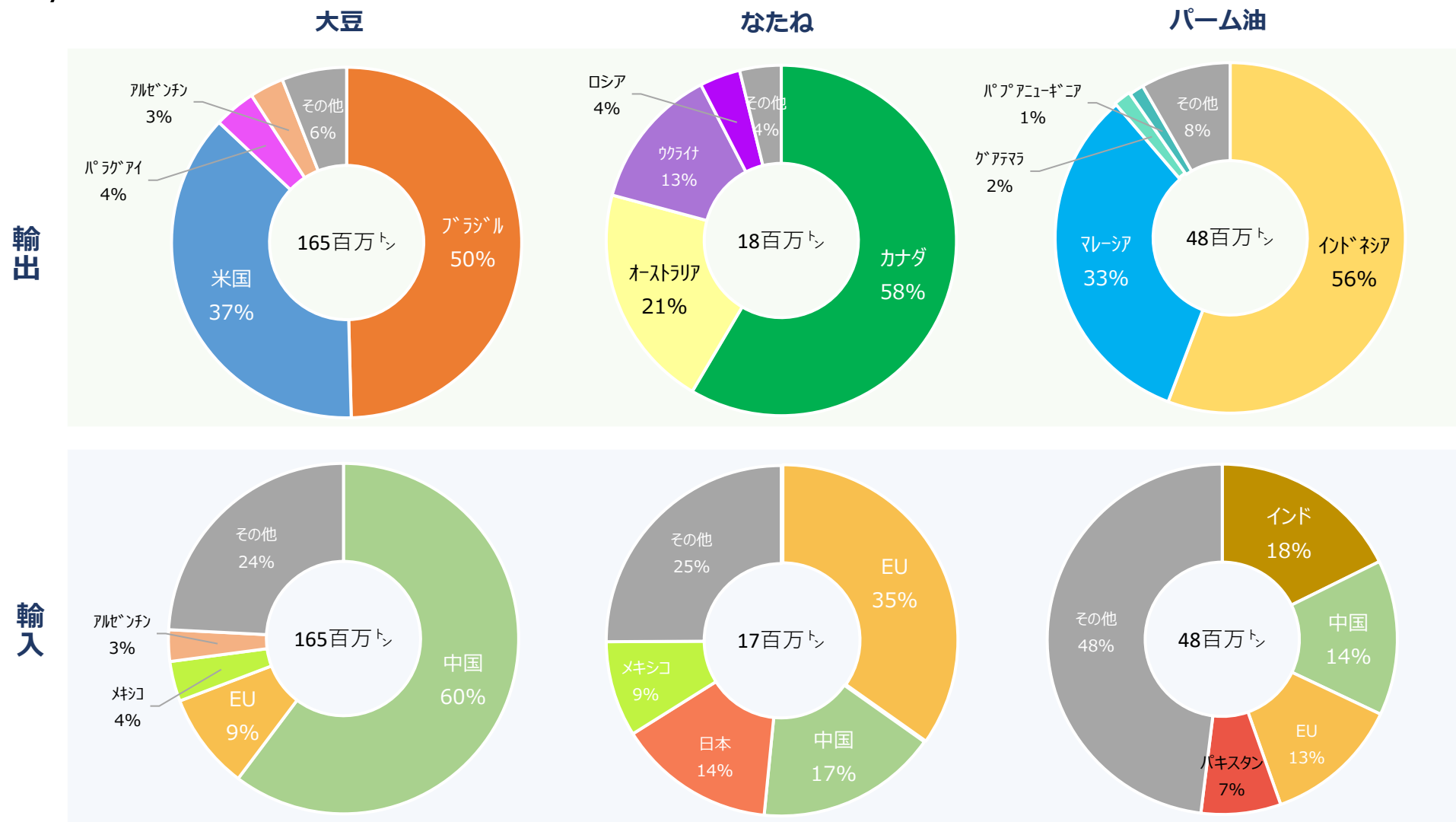
年月	主な動向
2022.1.24	商業大臣規程2022年第2号が施行され、パーム油生産者に対し、固定価格で輸出量の20%をインドネシア国内に供給することを義務付け。
2022.4.28	商業大臣規定2022年第22号を公布し、パーム油原油等について、4月28日から一時的に輸出を禁止。
2022.5.23	商業大臣規定2022年第30号を公布し、即日施行した。4月末より導入していたパーム油原油等の国外への輸出禁止措置を解除。 一方、輸出再開の条件として、輸出業者に対し、海外への輸出量のうち一定量を国内に販売する義務を課した。

資料：JETROのリリースを基に農林水産省作成

主な油糧種子・植物油の輸出入シェア

- 大豆については、ブラジル、米国の2国に輸出国が偏っており、当該輸出国から主に中国等に輸出されている。
- なたねについては、世界最大の生産国のカナダが輸出量の過半以上を占めており、カナダからEU、中国、日本等に輸出されている。
- パーム油については、輸出国がインドネシアとマレーシアに偏っており、主に当該2カ国から消費国に輸出されている。

2020/2021 (出典 : USDA)



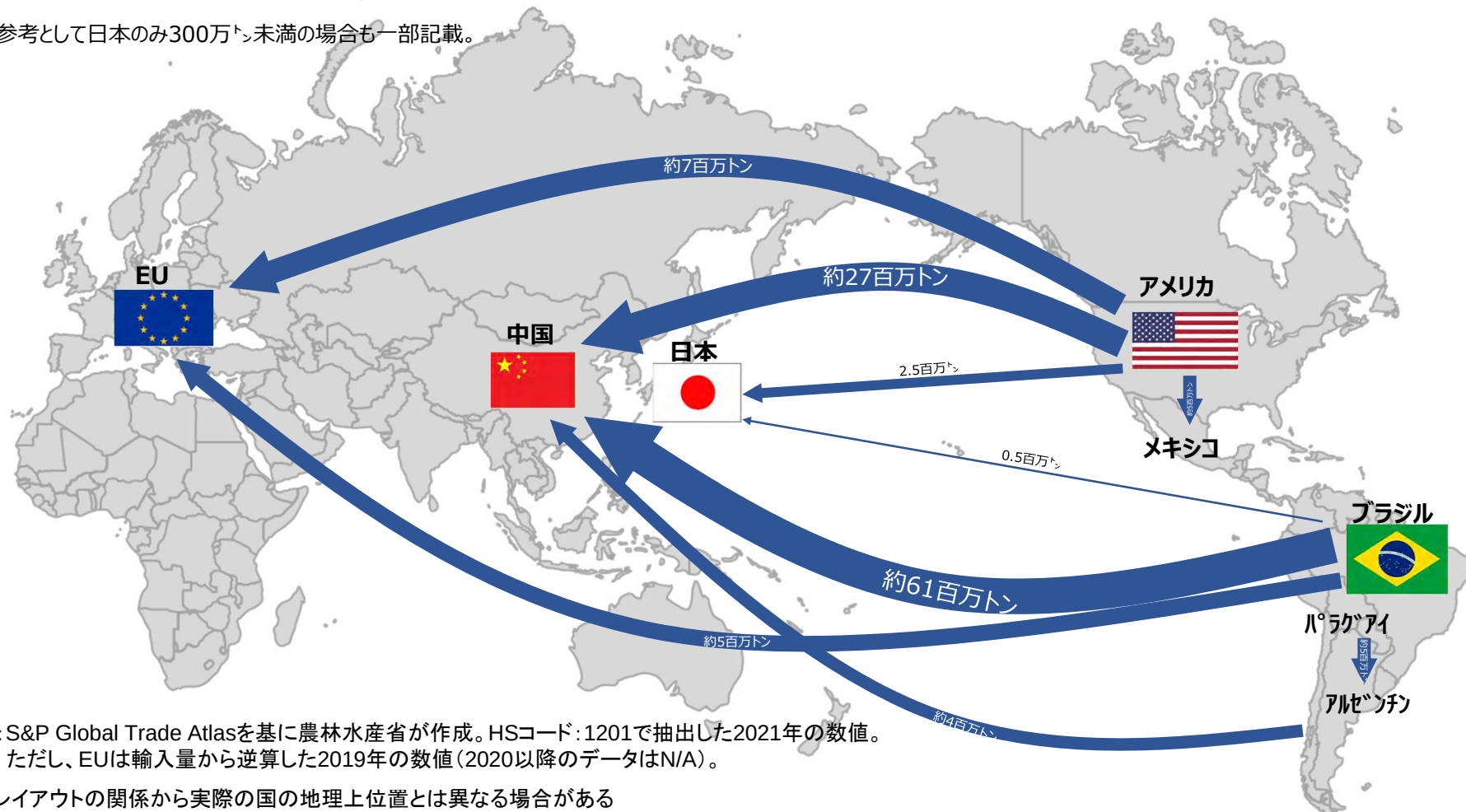
資料 : USDA (2022年8月時点)

大豆の貿易フロー（2021年）

- 大豆の国際貿易については、2大生産国である、アメリカ、ブラジルを始めとしたアメリカ大陸から、主に中国やEUに輸出されている。

※ 300万トン以上輸出している貿易フローを作図

※参考として日本のみ300万トン未満の場合も一部記載。



資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。HSコード：1201で抽出した2021年の数値。
ただし、EUは輸入量から逆算した2019年の数値（2020以降のデータはN/A）。

注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

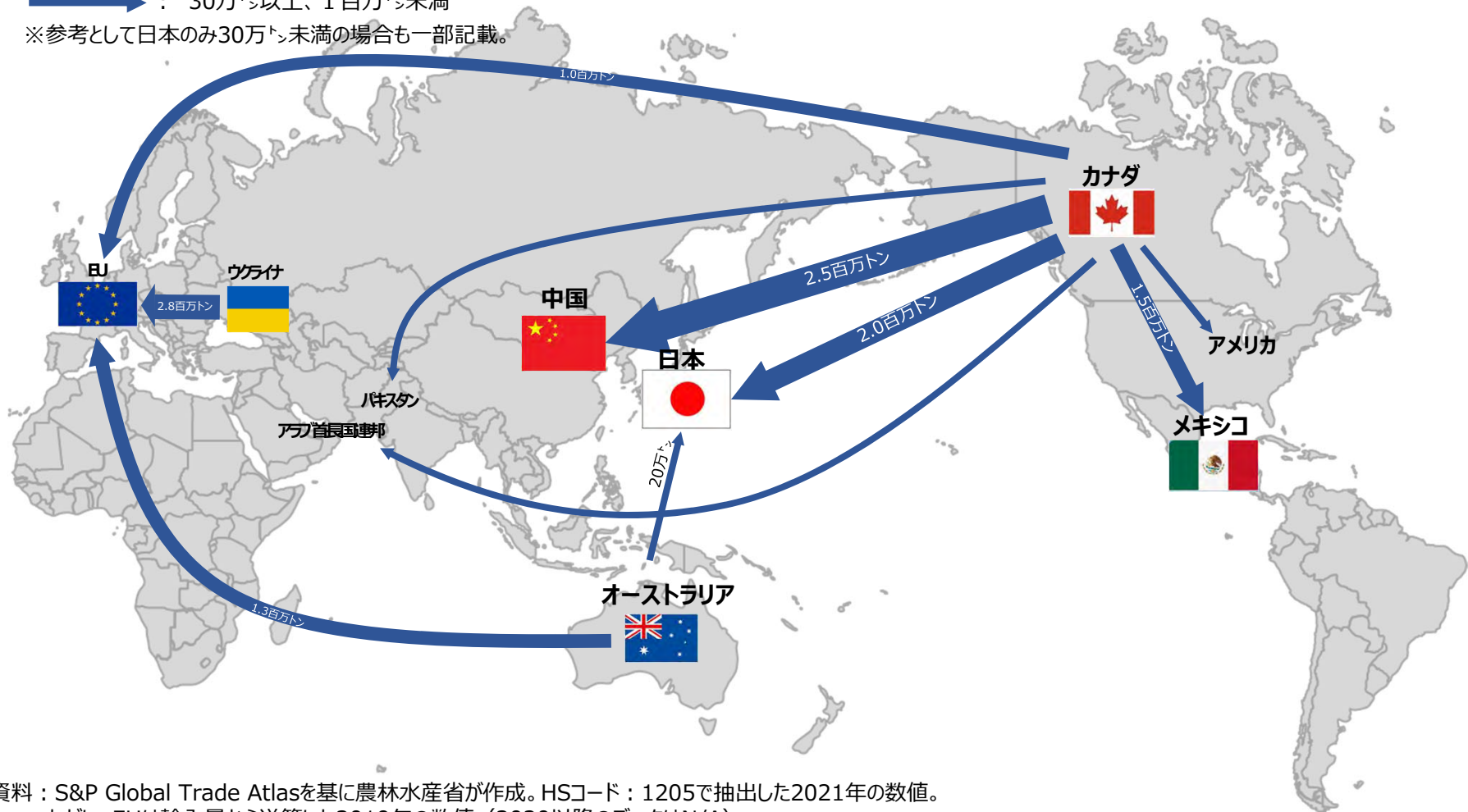
なたねの貿易フロー（2021年）

- なたねの国際貿易については、世界最大の生産国であるカナダから主に中国、日本、EUに輸出。世界3番目の輸出国であるウクライナからは、主にEUに輸出されている。

※ 30万トン以上輸出している貿易フローを作図

→ : 30万トン以上、1百万トン未満

※参考として日本のみ30万トン未満の場合も一部記載。



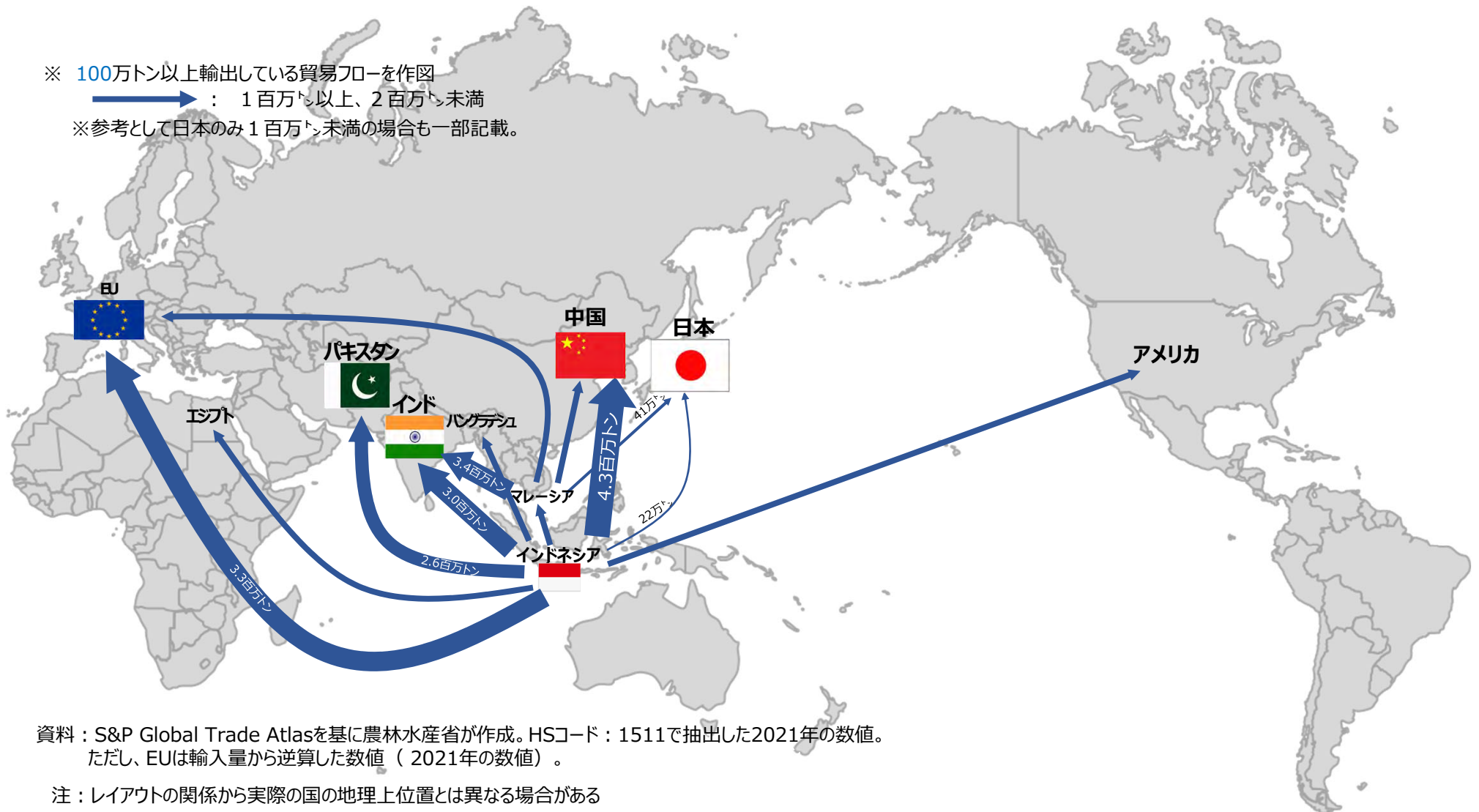
資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。HSコード：1205で抽出した2021年の数値。
ただし、EUは輸入量から逆算した2019年の数値（2020以降のデータはN/A）。

注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

パーム油の貿易フロー（2021年）

○ パーム油の国際貿易については、2大生産国であるインドネシア、マレーシアの2カ国から、主に中国、インド、EU等に輸出されている。

※ 100万トン以上輸出している貿易フローを作図
→ : 1百万トン以上、2百万トン未満
※参考として日本のみ1百万トン未満の場合も一部記載。



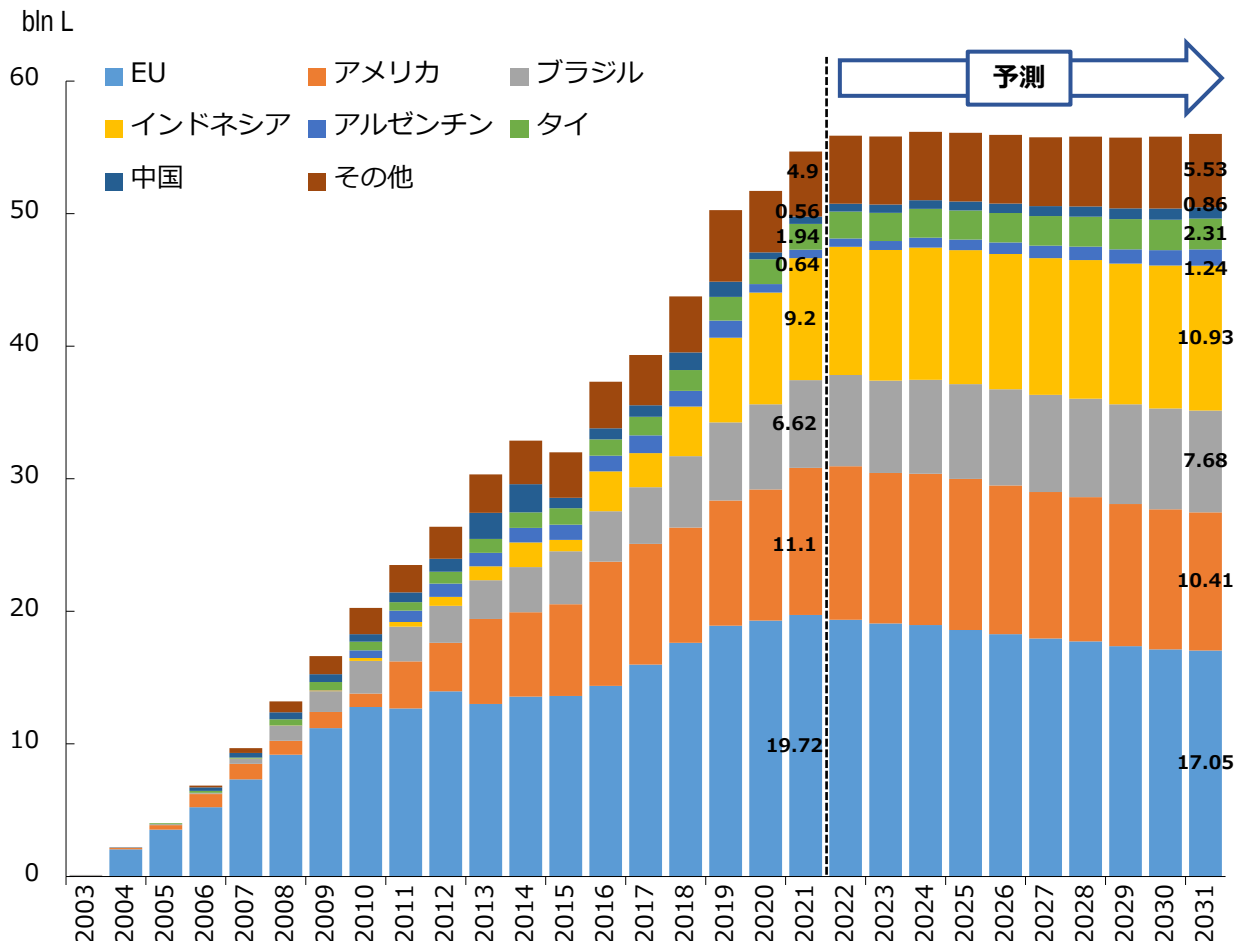
資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。HSコード：1511で抽出した2021年の数値。
ただし、EUは輸入量から逆算した数値（2021年の数値）。

注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

バイオ燃料への用途拡大

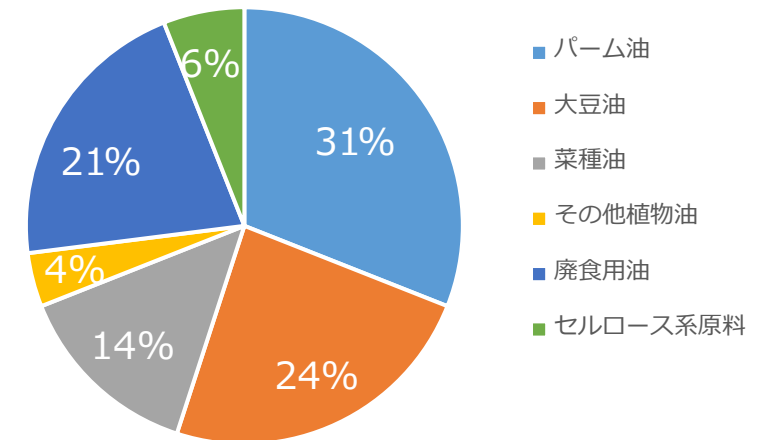
- 植物油の新しい利用用途として、バイオ燃料（ディーゼル）への利用が拡大しており、2021年の消費量は546.8億トン、10年後の2031年には560.1億トンの見込みとなっている。アジア諸国では利用拡大が進む一方、EU、アメリカといった先進国については、支援政策の縮小等により消費量の減少が予想されている。
- バイオディーゼル製造の原料となる主な油種は、パーム油、大豆油、菜種油で、食用に利用されて廃棄された油脂（廃食用油）、高度な技術に基づく作物残渣等のセルロース系原料の利用も行われている。

○世界のバイオディーゼル消費量の推移



資料：OECD/FAO (2022), "OECD-FAO Agricultural Outlook", OECD Agriculture statistics (database)

○バイオディーゼル原料の割合（2021）



○主要生産国のバイオディーゼル原料

	主要な原料
EU	菜種油、パーム油、廃食用油
アメリカ	大豆油、廃食用油
ブラジル	大豆油
インドネシア	パーム油
アルゼンチン	大豆油
タイ	パーム油
中国	廃食用油

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 8 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--